



たぶん面白半分



短編小説集

星野廉



目次

たぶん面白半分 *	3
街の天使 *	9
バニシング *	17
顔 *	21
三人家族 *	31
PDSジェネレーションズ *	43
トイレ同盟 *	57
セレブリティ *	67
幼なじみ *	73
捨てられた名前たち *	79
バット・スキン・ディーブ *	83
アセクシュアリティ -1- *	91
アセクシュアリティ -2-	

*	99
アセクシュアリティ -3-	
*	107
アセクシュアリティ -4-	
*	115
アセクシュアリティ -5-	
*	123
ベランダ	
*	133

たぶん面白半分

＊

週末とその種の雑誌の発売日とが重なり、本屋の中は込みあっていた。明は初めて見るその男に注目した。雑誌を読んでいるふりをして、明は男を観察した。

年は三十五歳前後。ごく普通のサラリーマンに見える。高くも安くもなさそうなビジネススーツ。ネクタイは紺系で地味。靴は新しく、磨いてある。カバンは持っていないから車で来ているのかもしれない。

年の頃といい、格好といい、初心者のキャサリンがアタックするにはぴったりだと思う。

「ぼくもストリート・ボーイになる」

唐突にキャサリンがそう言ったのは、その日の午前、五丁目のコインランドリーで明が乾燥をかけているときだった。

明とキャサリンは、前日の夕方から二丁目内をあちこち歩き回った末、サウナの大部屋でくっつき合って眠った。高校二年生で、神奈川県南端から来ているキャサリンにとっては初めての夜の新宿だった。

明は男の死角に立ち、そいつを狙えと顎で示してキャサリンに合図する。華奢な体つきで女の子にも見えるキャサリンは男の前に移動して、平積みされた雑誌に手を伸ばした。

寝不足のため瞼を腫らしたキャサリンに、男は見向きもしない。明のほうにチラチラ視線を送ってくる。キャサリンには悪いと思ったが、明はその男をもらうことにした。

奥にいる男と出入り口近くで立つ明との間には三人の男がいる。明は雑誌を手にして男の行動を待った。男が雑誌を元に戻し、接近して来るのが目の端に見えた。純情っぽく見えるように、わざと身を固くする。男が隣に来たら、雑誌を支える手を小刻みに震わせるつもりだった。

男は明の後ろを通り過ぎた。明が振り返ると、男は外へ出ようと目配せしている。明は男の後に従う。店を出るとき、ふてくされた顔をして明をにらんでいるキャサリンに軽く頷いて謝る。

通りに出た二人は、最初のうち、間隔を空けて歩いた。やがて男は歩く速度を緩めて、明と並んだ。

「この辺には、よく来るの？」

男の言葉には関西弁らしい抑揚があった。

「ときどき」

「学生？」

「はい」

「お茶でも飲む？」

「ボク、あんまり時間がないんで」

「どこか、行く？」

『どこか』とは、たいていはホテルだが、公衆便所だったり、人のあまり来ないビルの階段の踊り場のこともある。それはそれでいい。金さえくれれば。

「あのう、ボク、小遣いが欲しいんですけど、いいですか」

これだけは、最初からはっきりさせておかなければならない。さもないと、そんなことは聞いていないとかいって、あとで騒がれることがある。

「なあんだ、売ってんのか」

「すみません」

あくまでも、しおらしくする。このへんの呼吸についても、一通りキャサリンに教えてある。あいつ、大丈夫だろうか。自分だけで、客になりそうな奴を見つけられるか。またケチなオヤジにナンパされて、タダでやらされたあげくバイバイなんてことになるんじゃないか。

「別にいいよ。いくら？」

男はあっさり言う。

「二時間で前金の二万です。それから、バックは駄目です」

「わかった。こっちも、あまりゆっくりできないから、場所は安いところでいいよ」

値切られることを予期して提示した額がすんなりと受け入れられて、うれしかった。あとでキャサリンに自慢してやろうと思う。明は男をホテルではなく、レンタルルームへと案内した。

＊

三十分ほどで終わった。男は煙草に火をつけ、ベッドであぐらをかいた。少し休んでいくからと、男はテレビの横に付いている小箱の料金口に百円玉を入れた。照明を落とした室内がテレビの光でポッと明るくなる。

二時間で三千五百円のレンタルルーム。ホテルに比べて数段安い。部屋は六畳もなく、シングルベッド一台が大きく感じられるほどで、トイレは共同で部屋の外にある。

いつものように前もって金はもらってあった。お先に、と断ってシャワールームに入る。用心のため、折りたたみ式のドアは開けたままにしておく。ポケットに財布が入ったジーンズは、シャワールームの中から見える位置においてある。水が外に飛び散らないように気をつけながらシャワーを使い始める。

男がテレビのボリュームを上げたらしく、次々と流れてくるCMがうるさい。備え付けの小さな石鹸を泡立て、股の間で男が出した精液を洗い流そうとする。陰毛に糊のように固まった液が、なかなか取れない。

男は自分が出しただけで満足したのか、明には出すことを要求しなかった。ただ、液のついた手で明の髪に触れてきたため、その部分だけを洗わなければならなかった。

鏡についた湯気の曇りを手で拭い、液がついた部分を映してそっと湯で濡らす。いったん手を休め、鏡の表面が湯気で再びかすんでいくのを眺めながら小便をし始める。シャワーの水に混じって、黄色みを帯びた小便が排水口へと流れ込んで行く。

風呂やシャワーの最中に小便をするのは、幼い頃からの癖だ。テレビの音がうるさい。

突然シャワールームの電灯が消えて、ガシャッという音とともにドアが閉まった。驚いた明は声も出ない。再びドアに何か当たり、明は冷たいタイルの壁にへばりついた。

地震、停電、火事、暴力——。いろいろな想像が一瞬のうちに頭の中をよぎる。ドアの曇りガラスを通して光がちらつく。

テレビの音は依然として聞こえている。ドアの向こうで人の動く気配がする。ハメられたと、ようやく気づく。声を出そうと思うが、恐怖が先に立つ。裸でいることが、これほど無防備でみじめなことだとは思ってもしなかった。ただ早く男が部屋から出て行くことを願う。

しばらくして部屋のドアが開閉する音がした。続いて男が廊下を歩いていく靴音が聞こえる。速足だが逃げるような速さではない。完全に馬鹿にされている。明は思う。足音が聞こえなくなったところで、シャワールームのドアをそっと引く。

ドアが開かない。折りたたみ式の簡単なドアに錠は付いていない。ドアを引けばアルミの枠が折りたたまれてドアは開くはずだ。

押したり引いたりするうちに、ようやくドアが開き、何かが下に落ちる音がした。

シャワールームを出ると、部屋に備え付けのプラスチック製のハンガーが落ちていた。男はそれをドアの外側の取っ手にはさんで、つかい棒にしておいたらしい。明のジーンズは沓脱ぎに放ってある。確かめてみたが、もちろんポケットに財布はない。

急に体が震え出した。男を追いかけることができない自分が情けなかった。財布の中には、男からもらった金を含めて五万三千円くらいが入っていた。男は二万と部屋代の三千五百円を元手に三万儲けたわけだ。しかも、一発抜いたうえで。

せめて金だけを抜き取って財布はその辺に捨ててないかと、明は部屋の中を隅から隅まで探したが見つからなかった。

部屋のドアの鍵を内側から掛け、シャワールームに再び入った。男の体液のついた体を洗い直すために、もう一度石鹸をつける。たった今起こったばかりの出来事を思い出すと、膝ががくがく震えてきた。歯までががちがち鳴る。シャワーの口から噴き出す冷水を顔面に受けながら、明は泣いた。

思えば男の手口は巧妙だった。こういうことを、しょっちゅうやっているに違いない。根拠はないが、金に困ってやったとは思えなかった。たぶん面白半分に行ったという気がした。それだけに悔しかった。液のついた手で髪に触れてきたのも、シャワーを浴びるのに手間取るようにと計算したうえでのことかもしれない。

こんな時に相手を探して仕返しをしてくれたり、相談に乗ってくれる男がいる。暴力団とつながっているという噂の男だ。借りを作って、それをきっかけに人から管理されたくはない。

まあ、いい。金なんて、すぐにまた稼ぐ。面と向かって脅されなかつただけでした。

シャワーを浴び終わり、部屋を出ようとしてスニーカーに足を突っ込んだ明はそのまま転びそうになった。ご丁寧に左右の靴の紐が結んである。悔しさの代わりに、笑いが込み上げてきた。

明はドアの前で座り込んだ。ちょうどそのとき、テレビの電源が切れ、室内が暗くなった。

街の天使

＊

その日、明は二人の客を取ったが、一人目の客から一万五千円をもらっただけで終わった。それとトランク一枚が減った。

二人目の客だったその老人は、下着、服、靴、靴下、鞆といった、明が身に着けている物だけにしか興味を示さなかった。

ホテルのベッドの上に正座した老人は、裸になりなさいと言っておきながら、明には目をくれずに、明が脱いでいく物を次々と手に取り、シーツの上に丁寧に並べていった後、断るような目線をちらりと明に送ってきた。

明がその視線を無表情に受け止めると、今度は大事そうにまた一つ一つ手に取り、表面を撫でたり、裏返してみたり、鼻に近づけるといった動作をした。

明は裸のままベッド脇に立ち、シーツの上に座り込んでいる老人の様子を斜め上から眺めていた。ぼーっと突っ立っている自分が馬鹿みたいだと思った。

明の裸体など、その老人にとってはどうでもいい様子だった。明の存在を半ば無視し、明が身に着けていた物だけに執着している。明は身をかがめて、ジーンズの腿のあたりの匂いを嗅いでいる老人の耳元でささやいた。

「どうですか」

「いい匂いだ」

「そうスカ」

「うん」

「あげましょうか」

「このジーパンを？」

「別に構わないスよ」

「いくらで」

「新品が買えるくらいで」

「これ、もっとはき古せばいいのに」

「トランクもいいっスよ。三千円でどうですか」

「こういうものは買うより、盗んだ方がいい」

明はどきりとした。目の前にいる温厚そうな老人の口から出る言葉とは思えなかった。

「そうスカ」

「うちに来れば見せてやるよ」と言って、老人は薄い笑みを浮かべた。

「たくさんあるんですか」

「三百点以上」

「点、ですか」

「警察ではそう数えるよ」

このじいさん、下着泥棒でもして捕まったことがあるのか。明は、老人に興味を持った。

「だいぶ処分したからな。前はもっとあったよ」

「で、きょうはどうしましょうか」

そう言いながら、床屋じゃあるまいしと明はため息を飲み込んだ。

こちらがリードしなければならない客もいる。特殊な趣味やこだわりを持った客には戸惑う。六十代なのか七十代なのか、それ以上なのかは知らないが、このじいさんは何がしたいんだろう。客が何を求めるかを、相手の身になって考えてやらなければならない。そう思うと、気力がなえた。面倒だった。

「一人でやるところを見ますか」

以前、それだけで満足する客がいた。部屋に入ってからサングラスをかけ、花粉アレルギー用みたいな大きなマスクをしてバスルームに入り、ドアを細めに開けて、ベッドの上にいる明の動作を覗き見ていた。

夕方のラッシュアワーに山手線に乗って痴漢をさせてくれ。そんな要求を口にした客もいたが、明は断った。

これを着なさいと、相手が学生服をボストンバッグから取り出したときに、急に嫌気がさした。その客には、明と同様に路上や公園で客をとっているタツルを紹介した。

「何か、やってた？」

「スポーツですか？ サッカーを少々」

「なるほど」と、言って老人は明の足を見た。

生まれつき腿が太い明はいつもその嘘をつく。相手はたいてい、やっぱりとか言って納得する。実際には、帰宅部だった。水泳と答える場合もある。ただの鳩胸と筋肉との区別がつかない者が多い。

「煙草吸うかい？」

明はゆっくりと首を左右に振った。

老人は、端っこに手提げのループがついた大きめの鞆を開けた。その鞆は、昭和を設定にしたテレビドラマに出てくる借金取りを連想させた。妙に膨らんでいる。中身が気になった。

明の思いを察したのか、鞆の口を自分自身のほうに向けて、すばやく中からキャビンマイルドを取り出し、ズボンのポケットからライターを出した。

「風呂に入っておいで」と言われた明は、財布だけタオルにくるんでバスルームに入った。

客の中には、体を洗わせないまま相手をさせる者もいる。匂いが好きそうな老人が、風呂に入るように言ったのが気になった。さっきの警察の話も気掛かりだ。明は大急ぎでシャワーを浴びてバスルームから出た。

老人への警戒心もあったが、客との時間は早く終わるに越したことはない。

「ずいぶん早かったね。ゆっくりで、よかったのに」

老人は不満げな顔をしている。ベッドの上には、明の身に着けていた物が、見た目にはさきほどと変わらない位置に並んでいる。

「わたしがいいって言うまで、風呂に入っていてくれないか。ちゃんと、お湯を張って

浸かりなさい」

「はあ？」

「見ていられると、落ち着かないんだ」

本気でいらついているのか、声がかすかに震えている。

「わかりました」

逆らっても仕方ない。年に免じて、おとなしく言うことをきくことにする。今度は念のため、鞆だけをバスルーム脇の脱衣かごに入れ、ドアを半開きにし、かごを見えるようにしておく。

明自身もそうだが、鞆の中をやたら調べたがる者がいる。明が客をとり始めたころ、シャワーを浴びてくると、「君って、本当に十九？ もっと若いでしょう。職業柄、そのへんは敏感なんだ」と、自慢げにカマをかけてきた自称予備校講師がいた。

その男がバスルームに入っているうちに、ベッドの下に男が隠していた財布の中を覗いた。社員証から、本当は警備会社の従業員だと分かった。

蛇口の湯を止める。バスルームの換気扇が低い音を立てて回っている。老人の吸う煙草の煙が漂ってくる。明は湯船に足を入れ、腰をかがめた。久しぶりに首まで湯に浸かる。眠気が襲ってくる。

＊

明が小学五年生だったときのことだ。

当時住んでいた町で中学生や高校生たちの学生鞆や体育用の服を入れるスポーツバッグが盗まれることが続いていた。大抵は書店かゲームセンターで鞆を店の前に置き、目を離している間にとられてしまうらしかった。それが決まって男子生徒のものだった。

いったん学校から家に帰った後、自転車に乗って近所の商店街を流すのが、明の楽しみの一つだった。買い物途中の人びとや、下校の児童や生徒たちを巧みに避けながら、通りや路地の端から端を出来るだけ速いスピードで抜けて行く。それが楽しくて仕方なかった。

駅からほぼ放射状に広がる幾筋かの商店街のうち、嫌な記憶のある通りが一本あった。その町に引っ越して来たばかりのころ、その通りのパチンコ屋の前で、高齢の女性と一緒に歩いていた幼児を自転車で引っ掛けたことがあった。

道の左側を背の低い老女と手をつないで、てくてく歩いていたその子が、握った手を離さず腕をいきなりピンと伸ばし、体を右に傾けるのが見えた。ぶつかると思い、何とかハンドルを右に切ったが、ペダルに乗せた左足がその子の肩に触れ、二人の前に進み出たときに後ろでギャーと泣き叫ぶ声が聞こえた。

片足を地面に着けたまま自転車を止めて振り返ってみると、黄色のセーターを着たその子が真っ赤な顔をして泣いている。男の子か女の子かは分からない。柔らかそうな耳たぶだけが妙に白く清潔そうに見えた。

周りの人たちが一斉にこっちを見ている気がした。数秒間、迷った記憶がある。そのまま逃げた。

「おい、止まらんか」と、大人の男の声がした。

以来、その通りを自転車で抜けるさいには、いつも緊張した。あのときの自分を目撃していた人が、辺りにいるのではないか。突然目の前に大人が現れて通せん坊をする。ちょっと降りなさい——と呼び止められる。周りを人びとが取り囲む。

毎晩、布団に入り寝付く前のとりとめのない空想の中に、幼児を自転車で引っかけた場面と、通りで大人たちに行く先をさえぎられる場面が、その後たびたび現れた。夢に見ることさえあった。どういうわけか、その場面を思い起こすと必ず勃起した。

その通りには、パチンコ屋の二軒先にコンビニがあった。店員がうるさくないそのコンビニでは、比較的容易に雑誌の立ち読みができた。夕方になると決まって、ガラス張りの店の外には、中学生や高校生の鞆やスポーツバッグが固まって置かれていた。

万引き防止のために、周辺の学校の生徒たちには持ち物を店の軒下に置かせる。商店街で、そんな暗黙か公然のルールがあったのかもしれない。

怖いと思いつつも、その通りに行くことが快感になっていた。そのため、その日も、びくびくしつつ自転車で通りを流していた。例の自転車事件から、それほど日が経ってはいなかった。

パチンコ屋を無事通過すると、コンビニの前に人垣が出来ていた。それを見て明がとっさに頭に浮かべたのは、自分が起こしたあの自転車事件だった。一瞬引き返そうとしたが、好奇心には逆らえず、人だかりの横を自転車でゆっくり通り過ぎた。

「何やってんだ、てめえは」

「起きろよ」

「前にやったのも、おまえだろ」

低音だがまだ子供っぽく聞こえる、中学生くらいの複数の声が聞こえた。

取り囲んでいるのは大人の男が半分、詰め襟姿の生徒が半分だった。さらにその周りにセーラー服の生徒や大人の女性もいる。ガラス張りのコンビニ店内からも、何人かが外を覗いている。

明は、いったん自転車を止めた。サドルに腰掛けたまま、一方の足を地面に着け、もう片方をブラブラさせ、頭をかがめて人垣の下に目をやった。

いくつもの足の間から、男が両膝を抱えてうずくまっているのが見えた。そばには大きな紙袋が口を開けて転がっている。何やら自分がうずくまって罵倒されているような、映画か夢の一場面でも見ているような気がして、明はその光景に見とれていた。

結局その男は、通報を受けた警察官に連れて行かれ、鞆泥棒が捕まったというニュースは、しばらくの間その町の話題となった。逮捕に助力した中学三年の男子生徒が表彰されたという、もっともらしい噂も聞いた。

小学生だった明は、その男がなぜ男子生徒の鞆ばかりを盗んでいたのか、いろいろ想像してみた。

その事件について語る町の人びとの口調は、ためらいがちで歯切れが悪かった。変態とか、頭がおかしいとか、変質者とかいう言葉を盛んに聞いた。そうした言葉を耳にするたびに明は、どきどきした。そんな自分の感情を持って余した。

場面が飛び、小学校六年生のときに、デパートのトイレで小便をしているところを隣の便器に來た男に覗き込まれ、性的に興奮したことが頭に浮かんだ。

その男に対していただいた気持ちと、あの通りでいくつもの足の間から垣間見た、両膝を抱えてうずくまっている男に対して覚えた感情とが重なる。どこか似ている。そんな気がした。

「もういい」

声がした。

浴槽の中で眠り込み、夢を見ていた自分に明は気づいた。

「もういい」

老人が呼んでいる。明は、急いでバスタオルを使い浴室を出た。ベッドの上で、さきほどとほぼ同じ位置に並べられている衣服を拾い上げる。

「これでいいんですか」

湯にのぼせた明は、ふらつきながら服を着る。

「まだ何かしてもらいたいの？ 年寄りなふつう、もっとしつこい？」

「とんでもないっす」

本心だった。こんな長い間、湯に浸からせておいて、とんでもないぜ。それにしても、このじいさんは何をしていたのだろう。下着やジーンズに何か付いていないか、気が気でない。

「メールチェックさせてください」と、一言断る。鞆の中のケータイを出し入れするさいに、ほかの中身に目を走らせた。居眠りをしている間に、鞆を開けられた可能性も否定できない。財布を覗き、前もって老人からもらってある金額を確かめる。

「金、返します」

相手が気を悪くするかもしれないと思いながらも、明は半分気まぐれで言った。

「どうして？ ビジネスだろう？ 取っておきなさい」

「おれ、何にもしてないっす。久しぶりに、湯に浸かっただけです——」

本当かどうかは知らないが、初めて高校生とお茶を飲んだと言って感激した客から、喫茶店に付き合っただけで一万円ももらった、と知り合いの高校一年生が言っていた。ベンツに乗せてもらいドライブをただけで三万円を渡された、という嘘っぽい話を別の高校生から聞いたこともある。

そういう客を、この街の天使と呼ぶそうだ。そんな話を明は思い出した。

このじいさんは、天使とは程遠い。きっと年金暮らしでもしてるんだ——。明は想像する。老人にホテル代だけは出させても、商売として金を取る気にはなれなかった。

結局老人は明が返すと言った金を受け取った。その後、老人がご馳走したいと言うので、明は一緒にラーメン屋へ入った。食べながら明は、老人と雑談をした。

「名前は何て言うの？ 源氏名でいいけど」

「アキラです」

「きっと変わった漢字を当てるんだらうね。今の子どもたちの名前は、難しくて読めない」

「明るい明です。本名です」

「ずいぶん素直な名前だなあ」

ものを食べるときの老人は、幸せそうでいい顔をしていると、明は思った。店を出る間際に、明はレジの脇にあるトイレに入って、急いでトランクスを脱ぎ、丸めてジーンズの後ろのポケットに突っ込んだ。

老人は例の借金取りみたいな鞆のほかに、伊勢丹の手提げの紙袋を持っていた。明はその紙袋を代わりに持ってやりながら、老人を送って行った。

駅で老人が切符を買っている間に、明はジーンズの後ろに手をやった。すかさず紙袋に突っ込む。

老人とは、地下鉄の改札口の前で別れた。

バニシング

＊

「女性の恋人ができるたびに、交際を邪魔をされている気がしてならないんです。幻聴が聞こえることはありませんが、命令されているとか行動を指示されている感じはします。

付き合っている相手が男性だと、邪魔されている気はしないですね。ただ、自分の中にある片割れが僕の体を借りて楽しんでいる感覚はあります。嫌ではありませんよ。そんなときには僕も楽しんでいるんです」

会社員Sさん（男性・24）は語る。

＊

大学を卒業して就職し、両親と離れて住むようになったことで、Sさんが母親から片割れの話の聞かされることはなくなった。それがうれしい。なぜ、母親があれだけ片割れに執着するのか。理解できないことはないが、一人で生活するようになってからは、やはり母親の態度は行きすぎていると思う。

「あなたの中には、Kちゃんが溶けている。Kちゃんはあなたの中で生きているのよ」

繰り返して聞かされた言葉だ。母親の話では、妊娠時の検査ではふたごを出産する予定だったが、そのうちの一人が胎内でしだいに小さくなり、しまいには「溶けてしまった」らしい。

「ちゃんとしないと、Kちゃんが悲しむでしょ？」

『そんなことをすると、Kちゃんが笑っているよ』というバージョンもある。母親の言葉を父親はにこにこしながら、そばで聞いているだけだ。父親は片割れの話はいっさいしない。

片割れの命を吸って自分は母親の胎内で生きのびたという思いが、Sさんにはまだある。

「うちの宗教というか信仰のようなものですね。仏壇ですか？ それはないです。位牌もありません。お腹の中で溶けたというんですから、遺骨や遺影があるわけじゃないし。ただ毎日何かの形で話には出てきます。話すのは母だけですけど」

片割れの話は母親の創作ではないか、作り話なのではないか。そう思ったことは何度もある。母親と離れて住むようになり、それがいまでは確信に変わってきている。

「そうでも思わないと、僕は自由に恋愛もできないし、結婚もできない気がするんです。——ええ、するつもりです、相手が女性でも男性でも。結婚して子どもが何人もほしいと思っています。ひとりっ子は寂しいですもん」

明日、久しぶりにSさんは帰郷する。母親とはこれまでどおりに接するつもりだと言う。

「明後日が誕生日なんです。ケーキは二つ出てくるんですよ。子どものころには友だちが不思議がりました。もちろん、友だちは事情を知りません。わが家の秘密ですから。僕もプレゼントをするんです。これだけはやめません」

Sさんはうれしそうな表情で言い、片割れへのプレゼントが入っているという、足元に置いたデパートの袋を指さした。

顏

＊

顔＊

朝起きると、見知らぬ顔が鏡の中にいた。忘れもしない、二十年前のゴールデンウィーク最終日のことだ。驚いたのは言うまでもない。誰にも言わなかったのは、誰も気づいていないみたいだったからだ。家族も、学校でも。最も敏感であってほしい我が家の犬さえも。

翌日の午後、学校から帰る途中に、私を追い抜いていったバスの一番後ろの窓から見ていた私の顔と目が合った。私たちは互いに目を見開き、口を手で被った。驚いたのは言うまでもない。声を上げなかったのは、誰にも気づかれなくなかったからだ。私は心の中で、その顔にさようならと言った。

考えないように生きるのには慣れたつもりだが、一日に何度かは思い出すし、しばらく頭から離れないこともある。親にも友達にも言えなかったことは、今いっしょに暮らす夫にも子どもたちにも言えるわけがない。言っても楽になれるとも思えない。生きていくためには心にしまっていたほうがいいものがある。

私に支えがあるとすれば、誰もが言えない秘密を抱えているにちがいないという確信だ。そう信じているから、私は深い孤独に耐えることができる。そう考えることで私はかろうじて笑顔になれる。

顔＊＊

朝起きると、見知らぬ顔が鏡の中にいた。
忘れもしない、二十年前のゴールデンウィーク最終日のことだ。
驚いたのは言うまでもない。
誰にも言わなかったのは、誰も気づいていないみたいだったからだ。
家族も、学校でも。最も敏感であってほしい我が家の犬さえも。

翌日の午後、学校から帰る途中に、私を追い抜いていったバスの一番後ろの窓から見ていた私の顔と目が合った。

私たちは互いに目を見開き、口を手で被った。
驚いたのは言うまでもない。

声を上げなかったのは、誰にも気づかれなくなかったからだ。
私は心の中で、その顔にさようならと言った。

考えないように生きるのには慣れたつもりだが、一日に何度かは思い出すし、しばらく頭から離れないこともある。

親にも友達にも言えなかったことは、今いっしょに暮らす夫にも子どもたちにも言えるわけがない。

言って楽になれるとも思えない。

生きていくためには心にしまっていたほうがいいものがある。

私に支えがあるとすれば、誰もが言えない秘密を抱えているにちがいないという確信だ。

そう信じているから、私は深い孤独に耐えることができる。そう考えることで私はかろうじて笑顔になれる。

顔***

朝起きると、見知らぬ顔が鏡の中にいた。忘れもしない、二十年前のゴールデンウィーク最終日のことだ。驚いたのは言うまでもない。誰にも言わなかったのは、誰も気づいていないみたいだったからだ。家族も、学校でも。最も敏感であってほしい我が家の犬さえも。翌日の午後、学校から帰る途中に、私を追い抜いていったバスの一番後ろの窓から見ていた私の顔と目が合った。私たちは互いに目を見開き、口を手で被った。驚いたのは言うまでもない。声を上げなかったのは、誰にも気づかれなくなかったからだ。私は心の中で、その顔にさようならと言った。考えないように生きるのには慣れたつもりだが、一日に何度かは思い出すし、しばらく頭から離れないこともある。親にも友達にも言えなかったことは、今いっしょに暮らす夫にも子どもたちにも言えるわけがない。言って楽になれるとも思えない。生きていくためには心にしまっていたほうがいいものがある。私に支えがあるとすれば、誰もが言えない秘密を抱えているにちがいないという確信だ。そう信じているから、私は深い孤独に耐えることができる。そう考えることで私はかろうじて笑顔になれる。

＊

自分の顔が見えないと感じたのはいつなのか——正確に言うと、鏡に映る自分の顔のことなのですが——、よく覚えていません。以前にそうした意味のことを文章に書いたことがあり、その日付を見ればわかるのでしょうか、あえてしないでいます。

こういうことが自分だけに起きるのか、それともそう感じる人がいるのか、不明なままです。

＊

人の顔を見分けるのにどちらかという苦労する私ですが、鏡で見る自分の顔ほど分からないものはありません。見ているのに見えないという気がします。刻々と更新しつつある「いま」であるとか、刻々と更新しつつあるズレであるとかいう、苦しまぎれのレトリックをつかったことがあるほどです。

つまり目の前にある鏡を覗きこんだときに見ているのは形（自分の姿）ではなく「とき」（自分のイメージ＝心象）であるという意味なのですが、もしそうであるなら、自分はかなり動揺し困惑しているにちがひありません。他のものを見るのとは異なる次元にいたいというくらいのお話なのです。

＊

もしかすると、この困惑は鏡の中を覗きこんだときにそこに映っているものの名前はもちろん、言葉が浮かばないことと関係があるような気がします。自分の名前という意味ではなく、鼻とか口とか眉とかほくろとかそういう各パーツを指す言葉がいっさいない世界に放りこまれているという意味です。

夢の中と同じく鏡の中には名前がないのです。そこには意味もない気がします。というか、そういう心境におちいつているのかもしれませんが。「見覚えがある」とか「見慣れたものがある」感じなのですが、無名の世界なのです。

名前のないことが不安にさせるのかもしれませんが。それが夢とのちがひです。名前はなくても、夢の中ではこの底知れない不安を覚えた記憶はありません。

顔****

朝起きると、見知らぬ顔が鏡の中にいました。
忘れもしません、二十年前のゴールデンウィーク最終日のことです。
驚いたのは言うまでもありません。
誰にも言わなかったのは、誰も気づいていないみたいだったからです。
家族も、学校でも。最も敏感であってほしい我が家の犬さえも。

翌日の午後、学校から帰る途中に、私を追い抜いていったバスの一番後ろの窓から見ていた私の顔と目が合いました。
私たちは互いに目を見開き、口を手で被いました。
驚いたのは言うまでもありません。
声を上げなかったのは、誰にも気づかれなくなかったからです。
私は心の中で、その顔にさようならと言いました。

考えないように生きるのには慣れたつもりですが、一日に何度かは思い出しますし、しばらく頭から離れないこともあります。
親にも友達にも言えなかったことは、今いっしょに暮らす夫にも子どもたちにも言えるわけがありません。
言っても楽になれるとも思えません。
生きていくためには心にしまっていたほうがいいものがあります。

私に支えがあるとすれば、誰もが言えない秘密を抱えているにちがいないという確信です。
そう信じているから、私は深い孤独に耐えることができます。そう考えることで私はかろうじて笑顔になれるのです。

*

人にとって基本は「似ている」であり、「異なる」は「同じ」や「同一」のように学習した知識であり情報、つまり教わったものではないでしょうか。そもそも「同じ」や「同一」は、そこそこ精密な器具や器械や機械をつかわないと人には確認できません。

詳しく言うと、人にとっては「似ている」と「その他もろもろ」という印象だけがあり、「その他もろもろ」は、「似ていない」でも「異なる」でもなく、むしろ「見えても気

に掛けない」とか「見ていない」とか「見えない」とか「気づかない」という感じ、です。

(人は印象の世界に生きているのです。生まれてそんなに経っていない赤ちゃんや、無人島に漂着した素っ裸の人を想像してください。)

で、「その他もろもろ」というのは、いわば「見ようとすれば、怖くて不気味で見たくない」ものなのですが、この場合には人は「手なずける」ためにとりあえず「名付ける」という手段に出ます。

「見てもわからない」場合もありますが、気掛かりになるとちゃんと見て、つまり観察して「分けて」、やはり手なずけるためにとりあえず名付けます。ただし、「分けた」段階で「分かった」と「決める」という早合点がほとんどなようです。

なにしろ、人は「○△X」という言葉をつくって、その次に「○△Xとは何か？」と問い、思い悩む生物ですから。現に、いまもお悩みは続いていますね。

「分けた」段階でそそくさと名前を付けて、とりあえず「異なる」が決まるとも言えそうです。こう考えると事物を分けて事として認識し、即座にそれに言葉を与えているという意味で、「異なる」は「事(に)なる」であり、同時に「言(に)なる」なんて気がしてきましたが気のせいでしょう。

*

強引な例を挙げて恐縮ですが、見た目にはよく「似ている」柴犬とキツネが動物という点では「同じ」でも「同じ」種類ではなくて、つまり「異なる」種類であり、一見してぜんぜん「似ていない」ドーベルマンとポメラニアンが「同じく」犬であって、キツネとは「異なる」というのは、教わって知った知識だと言えば、お分かりになるでしょうか。

その意味で知識や情報は抽象であって、体感でも印象でもありません。

純粹に「似ている」世界にいるヒトの赤ちゃんは、ヒトが決めた決まりである「同じ」と「異なる」を学習しながらヒトのおとなになっていくと言えます。生まれたての赤ちゃんには、たぶん急須と湯飲みの「違い」も、玩具と動物の「違い」もわからないでしょ

う。というか、「知らない」でしょう。

万が一、ヒトの赤ちゃんがオオカミやコビトカバに育てられたら、いま述べた「違い」は「見えても見えない」とか「見えても気に掛けない」のではないかと私は想像しています。ひょっとするとどちらも「似ている」なのかもしれませんね。

「見る」は「見る」でも、「見える」は「見える」でも必ずしもなくて、見ない、見えない、見損なう、見損じる、見間違う、見誤る、見逃す、見外す、見過ごすと同時に並行して起きている気がします。「見る」は「見る」なの、すごくシンプルなわけ、なんて言い切る勇気が私にはありません。

顔****

朝起きると見知らぬ顔が鏡の中にいた――。

ある女性から聞いた話だ。

彼女は語る。

忘れもしない、あれは二十年前のゴールデンウィーク最終日だった、前日に家族で鎌倉に出かけて夜遅く帰った、そんなことは前にも後にもなかったのでよく覚えている。

その日、彼女は朝からゆっくりしていた。当然のことながら彼女は驚いた。誰にも言わなかったのは、家族の誰も気づいていないみたいだったからだ。台所で顔を合わせた母親も、廊下ですれ違った父親も、夕方になって部活から帰ってきた兄も、いつもと同様に視線を交わすことはないにせよ、互いの顔が視野に入っていたはずだ。それなのに、相手が声を上げるとかまじまじと見つめられる事態には至らなかった。

最も敏感であってほしい飼い犬さえ、夕方の散歩をさせても別段変わった反応を示さなかった。納得は行かないが、万事が普通に運んでいるのを目の当たりにすると勘違いではないかと彼女は思い始めた。

翌日学校でも取り立てて言うほどのことは起こらなかったが、下校の途中に大通りで追い抜いていったバスの一番後ろの窓から見ていた顔と目が合った。前々日までの自分の顔だった。

互いに目を見開き口を手で被った。鏡を見ているように同じ動作をしていた。彼女が驚いたのは言うまでもない。声を上げなかったのは、誰にも気づかれなくなかったからだ。まわりの目を気にする性格なのだ。心の中でその顔にさようならと言った。相手も同じ言葉をつぶやいている気がした、と彼女は言う。

考えないように生きるのには慣れたつもりだが、一日に何度かは思い出すし、しばらく頭から離れない日々もある。二十年も経つとあの日の出来事は偽の記憶ではないかと

思う時もある。

記憶は鮮明なわけではなく、しだいに薄れつつある。アルバムを見れば前の顔には会えるはずだが、今の彼女には昔の写真を見る習慣はない。

これまでの間に親にも友達にも言えなかったことは、いまいっしょに暮らす夫や子どもたちにも言えるわけがない。言っても楽になれるとも思えない。生きていくためには心にしまっていたほうがいいものがある。

そう彼女は述懐する。それが人生哲学のようになっている。

彼女にとって生きる上での支えは、誰もが言えない秘密を抱えているにちがいないという確信だ。そう信じているから、深い孤独に耐えることができるし、そう考えることでかろうじて笑顔になれると信じている。

三人家族

＊

第一部：おばちゃん

「要するに、その家でいいようにこき使われている。そういうことですね」

医師は要約するように言った。診察室内の時計を見ると、初診面談の時間があと五分で終わろうとしている。

「まあ、そうも言えますけど」

「そりゃあ、大変だ。誰だってストレスになりますよ。とりあえず、気分を落ち着ける薬を二種類、一日三回お出ししましょう。副作用がありますから、薬局でもらう説明書をよく読んで、生活に支障が出るようでしたら、服用は中止するか減らしてください」

「副作用というと？」

「まず心配なのは眠気です。お車でいらしてますよね。眠気がひどい場合には、絶対に運転は避けてください。あとは喉の渇きです。お薬について質問があれば、うちなり薬局なりに電話していただければお答えしますので」

岡田智樹は心療内科のある医院を出て、通りを挟んで斜め向かいの薬局に処方せんを出した。「お薬手帳」を持ってきてはいるが、それを出す気にはならない。ここは区別したい。いつも利用している薬局の人には知られたくない。

「お薬には強い方ですか？　たとえば、お医者さんから処方された風邪薬を飲んで、眠くなったり、変な言い方ですけど、らりるような感じがしたことはありませんか？」

妙に丁寧な対応をする薬局だと智樹は思う。医院の待合室で見掛けた母子らしい二人連れの様子が頭に浮かぶ。子どもは高校生くらいの少年だった。沈んだ表情が尋常ではなかった。目鼻立ちが弟に似ていたあの少年も、ここで薬を受けとるのだろうか。

薬局で対応しているのは三十前後に見える女性だった。ガラス張りの部屋にいる男性が薬剤師らしい。新しい「お薬手帳」を作ってもらい、二種類の薬について詳しい説明を受けた。ちょっとした質問にも、その女性はいちいちうなずきながら耳を傾ける。

「何かありましたら、遠慮なく、お電話くださいね。お大事に」と自然な笑みを浮かべて言い、薬の入った紙袋を手渡す。

「よかったら、どうぞ」

支払いを終えたところで、女性がパステルカラーの黄とピンクの包装紙にくるまれた飴らしきもの二個を差し出した。

「ありがとうございます」

包装紙の鮮やかな色を見た瞬間、唐突に空腹を覚えた。この場で飴を頬張りたくなる。何とかなるだろうという楽観的な気持ちが強まった。

車の中で、携帯電話で家に電話する。家を出てから一時間半が過ぎている。おばちゃんは、あの人が見ていてくれるから大丈夫だろう。きょうは、前夜に下剤を飲ませた日でもない。外出する前に、おばちゃんには排便をさせてある。

「もしもし。終わったから、お昼だけ買って帰るよ。おばちゃん、大丈夫？ トイレは？
あ、そう？ だったら、いい。じゃあね」相手のことを考えて、大声になった。

昼食後に二種類の薬を飲むのが楽しみだった。薬でストレスから解放されるのなら、そんないいことはない。心療内科を受診するにあたっては、掛かりつけの医院の医師に相談した。おばちゃんとあの人と智樹を入れた三人の主治医だ。その医院には、二週間ごとに智樹が付き添い、おばちゃんを受診させている。

「この辺だとお薦めできる精神科のある病院は遠いし、お話を聞いた感じでは、精神科医に診てもらふ必要はないと思います」そう医師は言い、「市内だったら、あそこがいいんじゃないかな。院長は私の知り合いだし、心療内科だから行きやすいでしょう」と助言してくれた。

心療内科の医師は、きちんと話を聞いてくれた。それでも、初診の三十分の面談で何もかもを説明することは難しかった。

『分かりにくい話ですね——』

運転をしながら、智樹はその日初めてかかった医師の言葉を思い出していた。確かに、分かりにくい。

消えてしまいたいと最近しきりに思う。かといって、死にたいという気持ちではない。すべてを放り出して自分の置かれた場から消えてしまいたいという気持ちに近い。智樹はそう医師に訴えた。ただ、そのような状況に自分が置かれている事情が説明しにくい。

『分かりにくい話ですね——』

実家を離れ、この町に住むある家族と同居している。その家族の食事、掃除、洗濯、買い物、八十歳近い「おばちゃん」と、その息子である四十代後半の男の世話をしている。家計を支えているのは、おばちゃんの年金と、細々と翻訳業を営むその男の収入である。

五年前に、母親が病に倒れたため、その人はこの町に帰る決心をした。東京でその人と一緒に暮らしていた智樹もアルバイト先を辞めて、その人に付いてこの町に来た。これだけでも、説明しにくい。どうしてと聞かれたら、どう答えたらいいのか。

どうして、その男と暮らしていたのか。どうして、その男の故郷に付いてきたのか。どうして、いまその男と母親の世話をしているのか。

『分かりにくい話ですね——』

いっしょにいたかったから付いてきた。いっしょにいたいから、いまは三人でいる――。

退院後のおばちゃんは、要介護の身となった。年老いた親の世話をするために、あの人が実家に帰ってきたのは事実だ。でも、あの人が何ができるというのだ？ 智樹は心配だった。

基本的に何もできない人だと智樹は思う。智樹と生活をともにする前、あの人は外食ばかりしたらしい。ナイフを使ってリンゴの皮さえ剥けない。週一回、コインランドリーで、着ている物やシャツ類をいっしょくたに洗濯することくらいはできる。だが部屋は、掃除が行き届いているとはお世辞にも言えなかった。

経済観念もおかしい。スーパーで買えば安い、ティッシュをはじめとする生活用品をコンビニで買いまくっていた。そんな人と智樹は暮らしはじめた。そして、その人にくっついて来る形で、二年前にその人の母親の住む家に移ってきた。

現在では、智樹が家事全般を任された格好になっている。足腰が弱く、内臓にも疾患をかかえたおばちゃん、つまりその人の母親は、内科と整形外科に定期的通わなければならない。家の中でも、歩行と排便と入浴に介助が必要である。寝たきり状態でないのが、せめてもの救いだ。

その人は聴覚に障がいがあって車の運転ができない。外にもめったに出ない。インターネットを通して、以前から仕事をもらっている会社から翻訳の仕事を請け、自室にこもって仕事をするか、本を読んでいる。

料理や洗濯などは、できるかもしれないが、智樹はその人にはさせたくないのも、何もかも自分がやっている。一人で背負い込んでいるのは分かっている。でも、やめるわけにはいかない。

最近、ストレスが溜まってくるのを感じるようになった。食後にデザートを大食いして胃がもたれ胃薬を飲む。肩がばんばんに凝り、しょっちゅう頭痛がする。世話をしているおばちゃんの不自由にいらついで、つつらく当たってしまうことがある。すると決まって自己嫌悪に陥る。

胃がむかつく。頭がずきずきする。いらいらが募る。消えてしまいたい。おばちゃんとその人を置いて実家に帰れば、問題は解決する。それは百も承知だが、二人の様子を見ているとできそうもない。どうしたらいいか分からない。消えてしまいたい――。そんな事情と心境を、かいつまんで医師に話した。

『ややこしくて分かりにくい話だとは思うんですけど、どうしようもないんです』

『要するに、その家で、いいようにこき使われている。そういうことですね』

＊

薬が効いた。二回目の受診のさいに、肩の凝りがまだ軽減されないと申し出ると、さらに別の薬を一錠飲むように指示された。一日分を合わせると六錠だったのが、九錠に増えた。

それで肩もほとんど凝らなくなった。副作用は、口の渴きを覚えるのと、朝にあまり立たなくなったことくらいだ。消えてしまいたい気分が失せた。それが何よりもうれしい。

診察は型通りの簡単なものとなり、医院へは処方せんを出してもらうために通うだけになった。

「本当は、一度、その家の人たちをこちらにお呼びして、三人揃ったところで、話し合うといいのですが」と、診察のさいに医師が言ったことがある。智樹が難色を示すと、「まあ、無理にとは言いません。今後の課題というか、選択肢の一つとして、そういう方法もあるということです」

「うちのこと、他人には分からないだろうね」と、その人はよく言う。「近所の人たちには、私たちの家がどんなふうに見えるんだろう。町内会には入っていない。息子は家に閉じこもって何をしているの分からない」と自嘲気味につぶやき、ため息をつく。続けて次のようにも言う。

「若い男の人が、おばあちゃんを毎日車に乗せて買い物に連れて行く。スーパーでカートを押す動作を繰り返すことで、足腰の運動をさせているらしい。病院にも連れて行っている。おばあちゃんを知っている人の話では、あの若い男の人は、息子でもないし、孫でもないらしい。誰なんだろうね？——そんな感じで見ているんだろうか」

孤立している家だと智樹は思う。あの人と自分がこの家に来る以前は、おばちゃんはいまよりも元気だったから、おばちゃんの知り合いや近所の人がときどき訪ねてくることがあったらしい。老人一人が暮らしていたわけだから、こういう小さな町では、そんな周囲の心遣いがあるのは当然だろう。

「おばちゃんは、もともと交際家じゃない。他人が泊まりにきたとか、他人を呼んで家で食事を出してもてなしたとか、そういう記憶はない」と、その人は言う。

この家に来て以来、その人の母親を智樹は「おばちゃん」と呼んでいるが、その人も自分の母親を「お母さん」ではなく「おばちゃん」と呼んでいる。面と向かっても、本人のいない場所でも、そう呼んでいる。照れくさいからなのか。だったら、変な人だ。それとも、何か事情があるのか。以前からそうだったのか。

その人はおばちゃんと、めったに口をきかない。その人は聴覚に障がいがあり、おばちゃんは高齢だから耳が遠いということはあるが、おばちゃんもその人も居間でずっと黙ってテレビを見ていることがある。

そこに智樹が加わると、おばちゃんが智樹に話しかけ、その人も智樹に話しかける。その人は、智樹を通しておばちゃんに何かを伝えようとする傾向がある。自分の母親とは抵抗もなく何でも話す智樹には、そんな母子の関係が分からない。

静かな家だとも思う。電話も一週間に一度掛かってくるかないか。たまに親機の通話記録をチェックすると、最後に電話が掛かってきたのが十日以上も前だということがあ

る。智樹から見ると、二人には友達と呼べる人がいないらしい。

そんな二人を智樹は似ていると思う。同時に、自分とも似ていると思う。自分にも、友達や親友と呼べる人がいない。他人が頻繁に訪れる家だったら、こんなに長くこの家で二人といっしょに暮らしていなかっただろう。そもそもあの人が社交的な人だったら、十年以上生活をともにすることもなかったにちがいない。この家に来るまでは、あのひとひっそりと慎ましい日々を送っていた。いっしょにいたいから、ここに付いてきた。それだけだ。

『分かりにくい話ですね——』

＊

智樹の携帯電話が鳴った。

「あ、お母さん？　ちょっと待ってね」

掛けてきたのは実家の母親だった。智樹がちょうどおばちゃんをトイレに連れて行くところだった。おばちゃんを椅子に再び座らせ、いったん居間を出る。その人の部屋をノックし、「おばちゃん、トイレ」と声を掛ける。その人が部屋から出て来るのを見届け、携帯電話を頬にくっつける。

「お待たせ——えっ、また辞めたの？　三日も経ってないじゃない。四日？　同じだつてそんなの」

智樹の弟がアルバイト先のコンビニに行かなくなったという話だ。客に頭を下げて「ありがとうございました」と言わなければならない仕事は、自分には向いていない。そんなわがままな理由を口にしてしているらしい。智樹はむしように腹が立った。

その人がおばちゃんを支えてトイレから出てくるのが見える。

「教育だよ。教育するの。お母さんは、あいつに優しすぎるんだって——。二十六？　年なんて関係ないの。いくつになっても、教えなければならないことってあるんだよ」

おばちゃんの手を取って廊下を進んで行くその人の動きは、いつものようにぎこちない。大丈夫だろうか。おばちゃんが転倒しないか、はらはらする。

「僕？　僕は、あいつに説教するつもりはないからね。だいいち、あいつが僕の言うことを聞くわけがない。お父さんはぜんぜん役に立たないし、やっぱり、お母さんがちゃんと言い聞かせなきゃ駄目。いくつになっても、教育しなきゃ」

智樹は携帯電話で母親と会話をしながら、危なっかしい足取りで歩む母子の後ろをゆっくりと進んだ。

第二部：分からない

出会ったころから、その人は孤独だった。仕事関係以外の電話が掛かってくることはない。自分から誰かに掛けている姿もほとんど見なかった。自分の場合も、実家の母親以外に電話をする相手がないと智樹は思い当たる。実家には祖父母、両親、弟がいる

が、電話で話すことはまずない。寂しいとは感じない。自分にとっては、それがふつうで自然な生き方だと思う。

「分からない」

ある晩、智樹がおばちゃんを寝室に連れていったあとに居間でテレビドラマを見ていると、その人が言った。口癖になっている言葉だ。ドラマのストーリーは、父親の死により、血のつながりのない母子が取り残されたというものだ。その人好みの物語だと智樹は思う。

「うちのことも、まわりの人たちには分かりにくいだろうね」

これも、その人の口癖だ。

智樹の思いは、この家に向かう。八十歳を間近にした実母を「おばちゃん」と呼んでいる五十近くの男。この家に住み、介護が必要なおばちゃんの世話をし、家事一切をこなしている二十八歳の自分。親戚との付き合いがなく、電話を掛けてきたり訪ねて来る人のほとんどいない家。

「この家のことは他人には分からないって言うけど、どこの家にも分からない部分があるように思う」と智樹は感じるままに言った。

その人はテレビから視線を外し、智樹の顔に目を向けた。智樹はその人にさらに言う。その人は補聴器をしていても聞こえが悪いので、智樹はゆっくりと大きな声で話す。

「ほら、うちの近所の家のことを考えてみてよ。Nさんの家にいる、あの太った女の人って何者なの？　だいいち格好が変だよ。白装束って言うんだっけ。おばちゃんの話では祈とう師だっていうじゃない。Nさんの家にいると言うより、あの家や土地自体が、あの太った人のものなんでしょう？　スーパーでそんな噂も聞いたよ」

「たぶん、家や土地の話は君の聞いた噂通りだと思う。だから、あんなに偉そうにしているんだよ。占いがよく当たると聞いて、遠くから来る人たちもいるらしい。どういいきさつで、Nさんたちと暮らしているんだろうね。Nさんは無職みたいだし。分からないなあ」

「でしょう？　それに、裏の家も分からないよね。あの家のお母さんは離婚してお父さんが出て行って以来、おばあちゃんと一緒に娘を育てていたんでしょう？　娘が成人してすぐに、お母さんが公然と愛人を家に泊めるようになった。そのうち、娘も自分の愛人を泊めるようになった。ふつうに考えると、めちゃくちゃじゃん。あの家のおばあちゃんって、うちのおばちゃんより少し年下くらいなんでしょ？　あそこのおばあちゃんも、きっと我慢して生活しているんだろうね」

「うん。あの家のことも、よく分からないね」

近所にあるいくつかの家族についての不可解な噂や、ふだんから見聞きしている身のまわりの不可思議な人間関係を話題にしながら、二人は首をかしげた。

テレビのニュースで、家族内での殺人や傷害事件についての報道があると、その人は身を乗り出すようにして画面の下の字幕を読む。字幕の設定をしてあるものの、この家のテレビの音は智樹の耳にはかなり大きい。

「分かるようで分からない話だなあ。ニュースだけでは分からない。家族のことって、警

察にも、検察にも、裁判官にも分からない。分かるはずがないんだよ。当事者たちにも分からないんだから」

その人の言うことが話をよけい訳の分からないものになっていると智樹は思った。

智樹は、実家の母親と週に一度は電話で話す。向こうの固定電話に弟や祖父母が出て、すぐに母親に回してもらう。三十分から一時間は話す。

「——味付け海苔はM社のじゃなきゃ嫌だよ。この間送ってくれたのとは、種類が違うの。えっ？ 本当に？ じゃあ、買っておいでくれる。ちょっと待って、えーとねえ、いま、台所の棚の中を覗いているところだから……。お味噌が切れそうだから、今度の便で送ってよ」

母親からは月に一回宅配便が届く。送られて来るものは、生活用品が中心だ。「そっちの広告にマヨネーズの安いのは出ていない？ メーカーはどこでもいいから」

母親との電話が済むと、「まるで母と娘の会話みたい」とか「所帯じみた話だね」とその人が言うことがある。

「こうやって、この家の経済に貢献しているんじゃない。文句ある？」と智樹は言い返す。でも、言えてるなあと思う。お母さんは、見知らぬ土地の家で、お母さんの言う「その人」と「その人」の母親である「おばちゃん」と五年も暮らしている僕のことを、どう思っているのだろうか？

この町に来るまでのその人との共同生活については、何とか誤魔化してばれずにいた。「今度、S町に引っ越してね、翻訳事務所をやっている人のところで、コンピューターの操作の手伝いをするの」そんな理由をつけて、引っ越すことを母親に告げた。

その人と知り合ったころ、智樹はコンピューター関連の専門学校に通っていたから、筋は通っている。じっさいその人は、パソコンの操作や、インターネットの接続について、驚くほど無知だ。仕事に不可欠なワープロソフトやスプレッドシートの扱い方も、よく分かっていないらしい部分がある。

自分が手伝わなければ、メールや添付ファイルを利用したの翻訳原稿のやり取りも満足にできないのではないかと思われる。その意味では、自分はその人の仕事の助手の役割をちゃんと果たしていると智樹は思う。母親への言葉は嘘とは言えない。それでも、いくつかの点で不自然さはある。母親が物事を深く追求する性格でないことに智樹は感謝した。

＊

「なんたって、謎なのは君のお父さんだよ」

その人は自分の変人ぶりを棚に上げて言うことがある。

智樹は自分の父親については、その人と知り合ったころから、何度も話している。そのたびに「謎だ」、「分からない」、「不思議だ」と、その人は驚く。「そんな人というか、父親というか、夫というか、息子っているの？」というぐあいに、ややこしい話だからか、ややこしい話し方をする。智樹は頭の中がよけいにこんがらがる。

その人は、智樹の父親の話を聞きたがる。その人は、自分の父親の顔を知らないで育ったらしい。智樹は、社会人としての父親、自分のお父さんとしての父親、自分のお母さんの夫としての父親、祖父母の息子としての父親が、どのような言動をしてきたかを記憶をたどりながら話す。

深く考えたこともない自分の家の事情を、いざ他人に伝えるとなると、かなり複雑で不可解な話であることに気づく。きっと他人には分かりにくいだろうと想像する。言葉にしているうちに、自分でもなぜなのか分からない発見がつぎつぎと出てくる。

妻子を実家に残し、十五年以上家を不在にしていた祖父——その祖父は幼児期に資産家の跡継ぎとして養子縁組された身らしい。父親（つまり祖父）のいない家庭で少年時代を過ごし成人したの父。妻が亡くなってから、愛人を連れて家に帰ってきた祖父。職場結婚した父と母。祖父の愛人から後妻となった現在の祖母。両親の仕事が忙しかったため、祖父母の子どものように育てられた自分。

家族旅行は、祖父母と自分と弟の四人連れがほとんどだった。自分が物心ついたころには、夫婦としての両親の関係は冷え切っていた。男勝りでさっぱりとした性格の母親。家庭内で孤立し、妻や子に対して冷淡とも言える態度を貫いている父親。

めったに口をきかない両親。めったに口をきかない父と祖父母。智樹自身が、父と口をきいた記憶があまりない。会社から単身赴任を命じられ、あっさりと退職した父。父は、現在昼と夜が逆転した生活をしていて、自室に閉じこもっているか、外に出ればギャンブルをしていると母は言う。母は父の食事を作らないし、父のために洗濯もしない。祖父の経営する数棟のマンションと駐車場から得られる収入が、智樹の実家を支えている。「うちは親戚との関係が途絶えているし、私が物心がついたころには家族はおばちゃんと自分のふたりだけだった。だから、きょうだいとか、父親とか、おじさんやおばさんやいとことかが、実感として分からないんだよね」

「逆だね。僕の家は、きょう代いは弟しかいないけど、お祖父ちゃんとお祖母ちゃんは健在だし、父方にも母方にも、何て呼ぶんだろう、いろんな関係の人たちがたくさんいる。おまけに、お祖母ちゃんは、後妻じゃん、この親戚が、また何かとしゃしゃり出てくるんだ。うっとうしいよ」

「ふーん。そういうもんかなあ。私には、分からない——」

その人と出会って間もないころ、「僕、お父さんといっしょに家でご飯を食べたことが一度もない」と話すと、その人は「嘘だろう」と決めつけた。本当だと言い張ると、「君のお父さんについて、もっと知りたい」と興味を示した。母子家庭で育て父親についての記憶が一切ないと、その人が自分の生い立ちを語ったのは、その時が初めてだった。

智樹の父の少年時代から青年時代にかけて、祖父つまり父の父親は、妻子を捨てる形で家を出ていた。そのことに、その人は父親なしで育った自分の過去を重ねているようだと思ふ。

智樹の父は母子家庭で育つ形になったが、さいわい家が持ち家だけでなく、貸してある複数の土地や家からの収入があった。大学に行かせてもらう余裕もあった。父の母親

は、夫不在の家を守り、子どもたちを育て、智樹にとっての曾祖父母の世話をし最期をみとった。

そうした環境の中で、智樹の父は自分の父親を恨んだはずだと、その人は言う。

智樹の父の母親である妻の葬式に出ることもなかった祖父が、愛人を連れてある日突然帰ってきた。この逸話に触れたとき、「君のお父さんの謎を解く鍵はそこだな」とその人が言った。智樹の家に問題があるとすれば、十五年以上も家庭を打ち捨てていた祖父に責任がある。それが、その人の出した結論だった。

智樹は自分の父のことを、尋ねられるままに話した。その人は、じっと耳を傾け、「分からない」、「信じられない」とつぶやくように言い、「遠くからでもいいから見てみたい」、「何げない形で会ってみたい」という言葉さえ口にした。

一度、「君のお父さんは、いわゆる『ひきこもり』じゃないよね」と尋ねられ、「ギャンブル仲間とかいて外出するみたいだから、ちょっと違うような気がするけど」と智樹が否定すると、その人は「やっぱり分からない」と言って黙りこんだ。

別の機会に、父母が離婚してもおかしくない状況を長年続けているのを話すと、考えこむようにして聞いていたその人が「『共依存』かな」と口にしたことがあった。「何、それ？ 一種の家庭内離婚なことは確かだけど」と智樹は首をかしげてみせて話は終わった。

その人は、何でも難しい言葉で物事をくくろうとする。悪い癖だ。本の読みすぎだ。智樹はそう思うが、口には出さない。趣味に口出しするのは嫌だし、自分も干渉されたくない。でも、共依存って何だっけ？ 以前に婦人雑誌で見かけた言葉だ。離れようにも離れられないってこと？ よくは分からないけど、まるでこの家の僕たちの状態じゃん——。心の中で、そうつぶやく。なんだか笑えてくる。

たまに、その人はどきりとすることを言う。

「勝手に想像して失礼かもしれないけど、ひょっとして、君ってお祖父ちゃんの子どもなんじゃない？ 君のお父さんの、家庭内での孤立と冷淡さは、普通じゃないよ。それに事実上、君は小さいころ、お祖父ちゃんと、後妻であるいまのお祖母ちゃんに育てられていたんだろう？」

祖父の女好きについて話した直後のことだった。

「いくら、女の人と見ればすぐにちょっかいを出したがる性格だといっても、息子のお嫁さんに手を出すなんてことあるの？」

「そういう話は、意外とあるらしい」と、その人は真顔で答えた。

智樹は言葉に詰まった。「と言うことは、お父さんと僕が兄弟だってこと？ でも、戸籍謄本を見たことがあるけど、そんなふうにはなってなかった」

「そりゃあ、そうだよ。こういうことは戸籍にあらわれる話じゃない。それこそ、当事者たちしか知らない秘密」

「当事者って、お父さんも含まれるの？」

「私は、君のお父さんにはそれが分かっていたんだと思う。だからこそ——」

奇抜な指摘を耳にして、智樹は驚くより笑ってしまった。

その人は、家族や家庭というものに並々ならぬ関心を持っている。智樹の目には、そう映る。その人の部屋の書棚には心理学関連の本や事典がならんでいる。大学では心理学を勉強したらしい。

最近では、家族を描いた内外の映画のDVDを借りてきて見ていることが多い。そんなとき、よくつぶやくのが「分からない」という言葉だ。遠くを見つめているような、ぼんやりとした表情でつぶやく。そんな言葉を口にしてはいるあなたこそ、分からない人だよ——。智樹は思う。

三カ月前に心療内科を初めて受診し、そこで処方された薬を飲むようになって以来、ストレスを引きずらないようになった。心労の原因である、おぼちゃんの世話と家事全般は大変だが、それが重荷となって金属製の鎧よろいのように全身にまといつく感覚がなくなった。

どうして、自分はこの人と、この家から離れられないのだろうと悩むこともなくなった。この家のすべてを放り出して消えてしまいたいという、暗い衝動も完全に失せた。

ようやく以前のように自分の趣味に没頭する余裕が出てきた。家事やおぼちゃんの世話の合間を縫って、編み物をする。編み物をしていると心が落ち着く。自分が人間であることを忘れ、宇宙と一緒に何かを編んでいるような不思議な気分になる。編み物はおもしろい。できるだろうと考えていたものと、実際にでき上がってくる物との間に落差がある。それが楽しい。いまはおぼちゃん用のカーディガンを編んでいる。

「——あっ、それからねえ、今度見本を郵送するから、そっちにある大きな手芸の店で似た感じの毛糸を探して、宅配便で送ってくんない？ 難しくないって、適当に選んでくれればいい。同じ色のものができるだけたくさん欲しいんだ。数さえあれば、いいんだから」

テレビを見ているおぼちゃんのいる居間から廊下に出て、智樹が携帯電話で母親と話していると、自室から出て来たその人がそばを通り過ぎる。読書中だったらしい。開けっ放しのドアを通して、机の上に分厚い本が見える。

「ああ忘れるところだった。おぼちゃんがねえ、お母さんにりんごを一箱送りたいて言ってるの。いつも、いろいろなものをもらって悪いて言ってる。近所にあるりんご園から、直接送ってもらいたいよ。えっ、何？」

「分からない」もう一方の耳から声が聞こえたような気がして智樹は振りむき、その人の背中に向かって、あかんべーをした。

PDSジェネレーションズ

＊

PDSジェネレーションズ——XYZ

殴るのは気持ちがよかった。ナカタニ・ナナセは弟のシータを完全に組み伏せた。シータの顔は紅潮し、さっきナナセがつま先で蹴った顎の一部が黒ずんで、あざになりかけている。シータは、まんざらでもなさそうな表情をしている。

取っ組み合いの喧嘩は、痛くて苦しいのは事実だが、それよりも快感のほうがはるかに勝る。

どうして、こんなに気持ちのいいことが許されないのだろう——。ナナセは思う。今度は、少しシータに反撃させてやろう。たまには、ぶたれてみたい。そう思って両腕の力をゆるめた瞬間に、ベルトに装着されたポーチからメロディーが発せられた。2030年代に流行した歌の旋律だという。

「あのころは、反戦歌だったんだ——」

このメロディーを聞くたびに母方の祖父が口にする言葉を思い出して、ナナセは顔をしかめた。あのおじいちゃんの日つきは気味が悪い。

曲の音は次第に大きくなっていく。ナナセとシータは、床から起き上がり、それぞれの腰に付けたられたポーチから、ビニール袋を取り出しジッパーを開けて、中に入っているオレンジ色の飴玉を一粒ほお張った。

人工甘味料独特のきつい甘さが、口いっぱい広がる。ナナセは、シータの視線が泳ぎ始めているのを見つめる。一歳しか変わらないのに弟は、自分よりはるかに葉に弱い。母親に体質が似ているのだ、と医師をしている父親は言う。メロディーが静まっていく。それにつれて脱力感が強まる。どうでもいいや——。

＊

勤務先のジュニアから帰宅したナカタニ・アカツキは、息子のシータの顎のあざを見ても、何も言う気にならなかった。ジュニアでは、娘のナナセより2、3歳年上の児童が中心の5年生のクラスを受け持っている。子どもたちを相手にした7時間あまりの労働を終えたのち、さらに1時間の教員会議に出席した。

ただ横になりたかった。眠るわけにはいかないことは分かっている。食事の準備をし、ナナセとシータの世話もしなければならない。今夜は夫が夜勤であることが、せめてもの救いだった。

居間のソファに腰を下ろし、アカツキは頓服のアップパーを飲もうかどうか迷う。
「最近のアップパーは、工場によってかなり粗悪なものも出回っているから、できるだけ頼らないほうがいい。毎食後の抗うつ剤と抗不安薬だけで我慢するように」
病院に勤務する夫のユージは、そう言う。夫の意見に従おうか、それよりも、このむなしさから一時的に解放されるほうを選ぶか。面倒だ。このまま消えてしまいたい——。
「お母さん、宿題手伝ってよ」
ナナセの声で、アカツキは目を覚ました。時計を見ると、10分ほど居眠りをしていたようだ。
「算数の問題で、ちょっとだけ分かんないところがあるの」
「ぼくの算数も見てくれる？」
「はいはい。家に帰っても、また授業ですね」
アカツキは懸命に笑顔を作り、アップパーを飲むためにキッチンへと向かった。

＊

「去年の平均寿命が発表された。男性が62.94年、女性が65.52年。男女とも5年連続の低下。ほかのスポットの数値が出そろっていないから、明言はできないが、ニュー・カワサキが下位20パーセント入るのは確実のもようだって——」
同僚の医師が、医師用ネットに流れるニュースを要約した。
ナカタニ・ユージは、ラップトップのキーボードから手を離して顔を上げた。斜め向かいのデスクにいる同僚の、灰色がかった薄いブルーの目を見つめる。同僚と同じくロシア系の女性患者の目を思い出した。妻のアカツキとのセックスレスの状態は、半年以上続いている。
34歳のユージは、7歳年上の女性と結婚したことを後悔しかけていた。同僚がげげんな顔つきになっているのに気づき、「君の家のXジェネレーションには、最近、異状はない？」と思いつきを口にした。
「凶暴性のほうは監視装置と薬で抑制できているが、放射能の被爆対策がうまくいっていない。カプセルはまあまあなんだけど、午前午後2回の光線のシャワー、あれがうちの娘の体質に合わないんだ。ものすごく肌が荒れてね」
「おやじに紹介させた会社の装置はどうだった？」と言い、ユージは同僚のデスクに近づいた。
「ごめん。礼を言うのを忘れていた。あの時はありがとう。感謝している。あの会社の製品を使ってはみたんだが、残念ながら著しい改善は見られなかった」
「行政府は？」
そう言って、ユージは医師用のネットのモニターを覗き込んだ。
ニュースのトピックが変わった。ニュー・カワサキからわずか数百キロ離れたスポットである、シンゲンからのレポートだ。ユージは見出しを読んだ。全住民の体内に埋め込まれている、電子チップの安全性に関する論文の概要が発表された、とある。
「ここの行政府が頼りにならないのは、おれたちが一番よく知っているじゃないか——」
咳払いを一つし、同僚は声をひそめた。「そもそも、これだけ薬漬け器械漬けにされてい

れば、長生きできるわけないよな。われわれYジェネレーションとしては、Xジェネレーションのわが子の行く末を憂い、放射能をこの惑星に撒き散らしたエロZジェネレーションと、その前の歴代のジェネレーションを呪うしかないってことだ」

同僚の声を聞きながら、ユージは無意識のうちに左手で握りこぶしを作り、腕時計をにらんだ。宿直時間が終わるまでには、まだ3時間半もある。自分の体内に埋め込まれた電子チップが発している微量の電波が、腕時計の文字盤の裏に内蔵された極少の器械に、ブルーの筋となって吸い込まれていくのが見えるような気がした。

＊

「——すみません。申し訳ございません」

サカモト・リョウは、ニュー・カワサキの治安組織であるポリースの取調室で、何度も同じ言葉を繰り返していた。

「つい誘惑に負けて、菓を飲まなかったのです」

「はい、よくできましたね、おじいちゃん」からかう口ぶりで捜査官が言った。「それだけを、検事と裁判官の前で繰り返してくれればいいんだ。少し休もう」と、事務的な口調に戻る。

捜査官は、カメラの死角の壁にもたれて居眠りをしていたもう一人の捜査官の肩を揺すり、一緒に取調室から出て行った。

10分ほど前によく菓を飲むのを許されたリョウは、いつもの落ち着きを取りもどしつつあった。自分がビデオの前で供述し署名したことの意味についても、あらためて考える心の余裕ができてきた。

66歳になったばかりのリョウは、ニュー・カワサキではかなりの高齢者だ。Zジェネレーションに属してはいるものの、核兵器が使用された最後の戦争中に子どもだった者たちに対する世間の目は、比較的寛大だ。

薬剤が効き出し次第に明晰になっていく頭で、リョウは世の中について、そして自分の置かれた今の立場について考え始めた——。

2085年。世界政府の役割を果たしているソリダリティの推定では、世界の人口は五億人弱に激減したという。放射能に汚染された地域が多いために、特定の少数の地域に人口が密集している。放射能を出来る限り除去した、そうした地域はスポットと呼ばれている。

世界各地に散らばっているスポットの間を、放射能を遮断する金属で防備された小型ジェット機で移動することだけが、幾たびかの大戦を生き延びた人々にとっての人的交流である。あとは人工衛星を介しての無線のネットとわずかに残されているケーブルを利用してのネットが、スポット同士をつないでいる。

「とんでもない世界になったことは確かだ」リョウはつぶやいた。「とんでもない話だ」

リョウの思いは、監視カメラ付きの取調室に取り残されている自分へと向かった。行政府によって無料で支給され、一日3回の服用を義務づけられているイエローのカプセル。あれを飲まないでいるときの、甘美で淫らな夢想。若かったころを思い出させる、ぞくぞくする快感。自分はそれに負けた。だが――。

「わたしは、犠牲者だ。こんな体になったのは自分のせいではない」

2030年代半ばから頻発し始め、長々と続いた数々の紛争。おびただしい数の大小の核兵器が使用された。放射能のせいなのかどうかは、まだ結論が出ていないようだが、どうやら人類の脳と身体に大きな異変が起きたらしい。

Xジェネレーションと呼ばれる、零歳からほぼ20歳の人類には、凶暴性と残酷性が顕著に観察される。Yジェネレーションと呼ばれる、20歳前後から40歳くらいまでの人類には、うつや躁といった気分障害がみられる。Zジェネレーションと呼ばれる、40歳を過ぎた人類の間では、著しい小児性愛の傾向が症候として報告されている。説明のつかない、そうした現象が世界的規模で起きている。

言語獲得以来の人類の大異変だと騒ぐ学者たちもいれば、天罰だとわめく宗教家たちが多数いるのは、リョウも知っている。

「天罰？ 罰？ そうだ、大変なことを忘れていた」

リョウは震えた。XYZの各ジェネレーションに対し、ニュー・カワサキの行政府は、意図的な薬剤の中断に対して重罪を課すことで世界中に知られている。スパルタン・スポット――古代ギリシャの時代に厳格な規律と教育で知られた都市国家にちなんで、ニュー・カワサキはそう呼ばれている。

世界の男女の平均寿命が65歳を切ろうとしているらしいことは聞いている。66歳の自分が、寛大に見られていることも日々感じている。しかし――。

「息子を呼んでくれ」リョウは、天井に備え付けられた監視カメラに向かって叫んだ。「息子と連絡を取りたい。息子の勤め先は、医療管理センターだ」

*

ユージは、自宅の書斎にいた。3時間前に、携帯電話を使って実父のナカタニ・ユウマと話をした。自分の孫と同じくらいの子どもにいたずらをしたために、ポリースに身柄を拘束された義父に対して、特別な配慮を依頼するという内容だった。

ユージの知る限り、いくら高齢者であっても、あの法律を犯した者は刑を免れることはできない。年齢を考慮して、せいぜい禁固10年というところか。65歳を過ぎた義父にとっては終身刑と同じだ。

実父は、ニュー・カワサキで行政官を務めていた元高級官僚である。「時間をくれ。二時間ほどで返事をする」と、ユウマは言った。

いつもなら、たいていの問題は短時間で解決してくれる。今回の件は、そうとう難航しているようだ、ユージは想像する。

知らせを聞いてショックを受けた妻のアカツキには、ユージ自らが強めの鎮静剤の注射を打った。7時間は眠り続けるだろう。それにしても、やっかいな問題を起してくれたものだ——。ユージは、じりじりしながらユウマからの電話を待った。

＊

3日後——。

サカモト・リョウは、監視体制の厳しい老人向け施設に入所することになった。

「ありがとう」

施設にリョウを預け入れた日、帰りの車の中でアカツキはユージに言った。

「ごめん。あれが自分に出来る精一杯のことだ、と親父は言うんだ」

「あなたのお父様には感謝しています。プリズンに入れられて当然の罪を犯したんですもの。あの年をして、みっともない。恥知らず——」

そう言って、助手席にいるアカツキが、ペットボトル入りのミネラルウォーターに口を一気に飲み干した。喉が渇くのは薬漬けのためだ。自分が妻に安易に薬を与え続けていることに、ユージは不安を抱く。そのうち、肝臓がやられるだろう。そして脳にも——。

「あのお年だから、仕方ないとも言える」ユージは妻と義父に対する配慮の言葉を忘れない。「親父も、現在の行政府への対応には、かなり苦慮したそうさ。先の選挙で政権が変わったために、以前のようにはいかなくなると嘆いている」

「わたし、今度の政権は嫌い。悪い噂をよく聞くわ」

「薬剤の意図的な飲み忘れに対する罰則も、そうとう強化されているらしい。背景には、Xジェネレーションの問題がある。ぼくも、医療の現場から入ってくるいろいろな情報や噂を聞いている。これは、口外しないでもらいたいんだが、薬がだんだん効かなくなってきた。成長ホルモンとの関係が有力視されているが、それだけではないようだ」

「本当？ それって、ナナセやシータにも関係あることなの？」

アカツキは、新しいミネラルウォーターの栓をひねって開けた。

「いずれにせよ、原因究明より、薬の成分を変えるなどの手段での対処法の確立が急務になっている。ただし、量を増やせばいいというものではない。実際、過剰服用による犠牲が出てきている」

ミネラルウォーターのボトルが助手席の床に落ちた。とくとくと中身が外に出て行く。アカツキはボトルを拾おうともしない。目がうつろだ。

「アカツキ、顔色が悪いぞ。ちょっと、その先で車を止めよう。注射を打ったほうがいい」

ユージは、振り返って後部座席を覗き、医療器具を入れた鞆があるのを確かめた。

「やっぱり天罰だわ」

リョウがポリースに逮捕されて以来、アカツキの抑うつ状態は悪化している。うつ以外の兆候も見られるようになった。ユージ自身も、このところ自分が薬を摂りすぎてい

るのを危惧している。原因の一つが妻であることは承知している。

アカツキは、終末論を唱える新興宗教に入っている。ユージは、実父のユウマとの電話での会話を思い出した。昨日、ユウマは電話越しにこう言った。

『——新政権は、前政権とは比べものにならないほど強権的だ。思想と宗教を含む言論に対する規制も強まると、私は見ている。宗教組織への別件による逮捕が近日中に計画されているという噂を、きょう聞いた。アカツキの入会している団体、あれは特に危ない』

ユージはゆっくりとブレーキを踏んだ。対向車もなく、背後にも車が迫ってはいない。「天罰だわ。教祖様のおっしゃる通り——」

助手席に目をやると、いつの間にか数珠を手にしたアカツキが珠を数えている。ユージは車を路肩に止めた。

「誰も悪くない。悪くした人たちは、この惑星にはもういない」

ユージは、妻に聞こえないくらいの声でささやいた。

PDSジェネレーションズ——PDS

「わたしたち、シンゲンに帰れるのかなあ？」

「帰れるって。保護するとか言いながら、ここのやつらは、おれたちを、すぐにでも送り返したがっているのに決まってるさ」

「そうだよね。もうじき帰れるよね。ケンも一緒に帰れるよね」

「また、彼氏の心配か？　いくらここの医療管理センターに働いている伯父さんがいるといっても、ケンだけホテルにいないのは不公平っていうもんだ。やっぱり、あいつの親父の力だな」

「これからの時代は、医者にならなきゃ、いいことなってしまうことだ。いつもの結論——。まさか、あいつだけシンゲンに帰っているなんてこと、ないだろうな」

「嫌よ、そんなの」

「大丈夫。おれたち、絶対に近いうちに帰れるって」

シンゲンからニュー・カワサキに修学旅行中の生徒たちが、ホテルのレストランで食事をしながら小声で話し合っている。

「おまえたちの考えは浅いよ。よく考えてみろ。おれたち、6日間も、このホテルに閉じ込められているんだぜ。帰すわけにもいかないほど、事態は悪化しているってわけだ。今回のインフルエンザは、前回よりはるかに強力だってことだ。ソリダリティあたりが、人道的問題だとか言って、きつとここの行政府に口出ししてるんだ——」

「しーっ。声が大きい」

「盗聴なんて気にしてられるか。それにしても、ニュー・カワサキって、嫌なスポットだよな。親父が言ってた通りだ。ここの医療管理センターは、世界一。シンゲンと違って、警察、軍隊、医療施設、行政の全部が一体化されてんだって。政権が変わってから、このスポットは何だか要塞都市みたいになってきたらしい。おれたちが、最後のお客さんかも——。話によると、医療管理センターの機能が肥大化して、事実上の行政府になってしまった。全部、親父の意見だけだよ」

「ソリダリティも、世界政府として、ここの行政府の独走には手を焼いているみたい。これはわたしのパパの意見」

「自称世界政府だろ？ シンゲンだって、世界政府だなんて認めていないじゃないか。まして、この要塞都市が——」

「ほら、やっぱり盗み聞きされてるよ」

17人の生徒たちが、五台のテーブルに分散しているところに、アテンダントと呼ばれている、ニュー・カワサキのスポット民の男たちが3人やってきた。シンゲンから付き添ってきた教師と入れ替わりに、6日前から生徒たちの世話をしている。

「みなさん、そろそろシャワーのお時間です」

言葉遣いや物腰は柔らかいが、3人とも体が大きく、肌にぴったりとくっつく素材の上下を着ている。屈強そうな盛り上がった筋肉が透けて見えるようだ。動きもきびきびしている。

こいつらは兵士だ——。

生徒のひとりと思う。シンゲンに比べて、ニュー・カワサキの残留放射能の量は高いと聞いている。被爆の被害を抑制するための機器を腰に付けたポーチに収め、やはり放射能対策のための光線シャワーを一日数回浴びなければならない点では、シンゲンと変わるところはない。

それにしても、このニュー・カワサキというスポットはどこか変だ。早く、シンゲンに帰りたい。修学旅行中に、いきなりニュースに接することができなくなった。それ以後、事実上の監禁状態にされている。ホテルのテレビでは、映画とスポーツ中継ばかりが流れている。ネットの使用が禁止というのも変だ。何が起きているのだろう——。

「どうしたの、アルーン君。元気ないね」

一度も口を利いたことのないアテンダントから、いきなり名前を呼ばれたその生徒は、小さく身震いした。

*

「馬鹿言うなよ。PDSはPDSじゃないか。『パーソナリティ・ディスオーダー・シンドローム』、つまり『人格障害症候群』、立派な医学用語だろ。それにジェネレーションズ

をつけて、PDSジェネレーションズってメディアが使い始めたのは、ずいぶん前の話。素人だから不正確な使い方をしているのは認めるけど、その言葉を自粛しろだって？はっきり言って、言論統制じゃないか」

中国系の同僚が、憤った表情でナカタニ・ユージに言う。「だから、当然のことながら、Xジェネレーション、Yジェネレーション、Zジェネレーションも使用自粛というわけだ」

「自粛じゃなくて禁止。こういう芽は早めに摘まないと、言論弾圧にまで発展する。全体主義は、子どもたちと言葉から手を染める。そんな意味のことが何かに書いてあったのを思い出す」

「その全体主義って言葉も、危ないな。この施設内での盗聴の噂を聞いただろう。自宅だって、どうなっていることやら。新政権による医療関係者への監視と締め付けは異常だよ。ぼくは、もう半分、諦めているけど——」

そう言うユージの口ぶりは、自嘲に満ちていた。抗うつ剤、抗不安薬、鎮静剤と、それらの薬の副作用を抑えるための薬。放射能による被爆を抑制するための複数の薬剤と器機類。そうした人工物に頼り、率先してスポット民を支えなければならない、働き盛りのYジェネレーション。

うつ状態と躁状態が交互に表れたり、躁が常態化している者も一部いるが、抑うつに苦しむ者が圧倒的に多い。

ユージは、医療の現場を離れ、現在の部署に回されたばかりだ。医療管理センターでは、大規模な機構改革が行われつつある。そのため、行政府の思惑についての憶測が飛びかう。

行政の社会政策遂行の中で、医療をどのようにして効果的に機能させるか——。それを調査し研究するのが、ユージに与えられたセンター内での新しい任務だった。

「薬が効かなくなってきたXジェネレーションの問題に加えて、今度はインフルエンザか」口を挟んだのは、韓国系の同僚だった。「エンデミックからパンデミックという流れは、もうメディアがリークしている。メディアも捨てたものじゃないな。ネズミも時にはネコを噛むってことか。いや、そろそろネコは、ライオンへと昇格かな。ライオン、瀕死の虎シンゲンに牙をむく——」

「おい、その話はやめろ」

ユージは声を抑えながらも断固とした口調で仲間に忠告した。

シンゲンからの情報は乏しい。

住民の 50 から 78 ーセント以上が新型インフルエンザに感染し、死者が続出しているらしい——。ユージは、数日前に聞いた話を思い出す。

シンゲンから最も近いスポットであるニュー・カワサキは、ソリダリティやほかのスポットの非難を尻目に、シンゲンを「隔離」することに最も積極的な姿勢を示している。シンゲンとの間のケーブルによる通信回線を切断し、人工衛星を介しての無線に対して、局地的な妨害電波を送っているという噂も、世界では半ば公然の秘密となっている。

オフィスの仕切りの向こうで、医療監視センター専用ネットのモニターを見守っていた、ブラジル系の同僚が立ち上がった。顔が青ざめている。両手を大きく広げ、首を左右に振り続けている。

今度は何が起こったのだ？

ユージを含めた三人の職員が、モニターのあるデスクに駆け寄る。

＊

ナカタニ・アカツキは、居間で液晶の大画面を見ていた。ソファの傍らのカーペットの上では、娘のナナセと息子のシータが、仲よく並んで寝そべり居眠りをしている。一日の大半を子どもたちが半睡半醒の状態にいるのを目にしても、アカツキは何も感じなくなってきた。

古い映像だった——。

アカツキは画面を見つめる。地球温暖化、環境破壊、二酸化炭素排出量取引、大量飢餓、貧富の格差、市場経済の終えん、文明の衝突、ジハード、アルマゲドン、核兵器の拡散、サイバーテロ、化学兵器、生物兵器、ジェノサイド、ICT、バイオテクノロジー、ナノテクノロジー、AI といった言葉が、ナレーションに混じる。

どれもがアカツキの耳には空疎に響く。現在の世界を思うと、ぴんと来ない——。

最近のアカツキは歴史に興味を覚え、ネットを通じて 21 世紀のドキュメンタリー・コンテンツばかりを見ている。以前に熱中していた宗教には、もう興味が持てない。教祖は依然として行方不明のまま。どこでどんなふうにして人類が足を踏み外したのかを、冷静に考えてみたい。そうした思いに駆られていた。

今は、21 世紀の初めの世界情勢についてのコンテンツを漁っている。のどかな時期だったと思う。現在に比べれば、誰もが生き生きとした表情をしている。それでも、ときおり混じる当時の人たちの話す口からは、苦しいとか不安という言葉が聞かれるが、現実味はまったく感じられない。

シータが目を覚ました。

「おしっこ」と言い、ゆっくりとした足取りでバスルームに向かう。

「ひとりできる？」アカツキは声を掛けた。

「わたしも行く」

知らない間にナナセが立っていて、弟の後をやはり緩慢な動作でついていく。八歳と九歳とは思えない。幼児返りの兆候が見られる。宿題を手伝ってくれと頼まれることは、もうないのだろうか、とアカツキは考える。

ジュニアでの教員を辞めて以来、アカツキは、自分の娘と息子以外に子どもたちに接することはない。かつて教えていた児童たちの顔が頭に浮かぶ。どのジュニアも、現在では休校状態だという。児童と生徒たちの消えた校舎、体育館、校庭——信じられない。みんな、家であんなふうにはぼーとした毎日を送っているのだろうか。そういう、わたしもぼーとしている。薬漬け、器械漬け——。

画面に、80年前のアフリカ大陸の映像が映し出されている。飢えた子どもたちの顔が次々と大写しになる。痩せこけてはいるが、目がきらきら輝いている。肌も荒れていなくて美しい。元気も笑みもない。でも、少なくとも、うつろな目はしていないと、アカツキは思う。流れ落ちる涙はいつこうに止まる気配はなかった。

「壊れている——」

そんな言葉を無意識につぶやいていた。自分の体だという感じがしない。

＊

「自爆テロだぜ。すごいやつがいたものだな」

「わたしも信じられなかったけど、シンゲンからの修学旅行生の一人だったらしいの」

「どういうわけで、その子と、新政権につぶされかけている宗教団体とが結びついたんだ」

「詳しいことは知らない。メディアも沈黙している。いずれにせよ、大失態。行政府は新たに情報部を置く計画らしいわ。ほかにも現体制打破をめざすグループが、連帯し始めているという噂だし、今回の自爆テロではセンターの内部にも——」

「とにかく、とぼっちりを受けるのは、いつもおれたち医療関係者だ。体にくくりつけた爆弾の5つや6つで、医療管理センターの中枢がやられて、それでスポット全域の薬と器械の供給が麻痺するなんて、お粗末にもほどがある」

「長官の言葉を借りれば、世界は『平和ぼけ』なんだって。危機管理がおろそかになっていたことは事実。だから、当面の最優先事項は、施設の分散化だというわけ」

休憩時間が終わった。二人は作業を再開し始めた。

「——とにかく、今回の事件によるニュー・カワサキ全域への影響は甚大だ。ある意味で

は、新型インフルエンザより質たちが悪いかもしれん。スポットの全住民が毎日必要としている薬が切れ、器械が切れる。抑うつで戦意をなくしたYジェネレーション、老いの身に鞭打って幼い子どもたちに襲いかかるZジェネレーション、衝動的に破壊行動に出るXジェネレーション」

「言葉に気をつけて。わたしたち、ちょっと言い過ぎているかも」

「大丈夫さ。おれたちみたいな医療の専門家なしでは、スポットは維持できない。盗聴器を通して聞いている者たちが、そのことをいちばんよく分かっているはずだ——。さて、無駄話は止めて、作業を急ごう。早く家に帰って眠りたい」

「わたしも、ベビーシッターに子どもを預けての生活には、もう耐えられないわ」

＊

「シンゲンに空から攻撃を仕掛けるなんて、やりすぎよ」

アカツキの表情は引きつっている。このところ毎日、21世紀の歴史に関するコンテンツを大量に見続けている。戦争や紛争やテロの映像が、目の前にちらついてならない。

「センター専用のネットで得た情報によると、数時間以内にソリダリティは、テレビ電話で緊急理事会を招集し、ニュー・カワサキとシンゲンを隔離するかどうか、全スポット間での意見調整を行うそうだ」

かすれた声でユージは言った。

「それって、戦争が始まるということ？」

「そうとも言える。両スポットは事実上、海・陸・空を閉鎖される。シンゲンは新型インフルエンザのエピデミックによって、ニュー・カワサキは薬と器械不足が原因のジェネレーション間の争いと殺戮さつりくによって、絶滅の道を突き進むしかない。ソリダリティでは、そんな分析をしている。もちろん、このまま事態が進行すればの話だ。つまりシミュレーションだ。だから、そうならないように、医療監視センターの仲間たちが連日連夜、薬と器械の供給ラインの復旧に全力を挙げている」

「そのシミュレーションが現実になる確率は？ ソリダリティのお好きな人道的措置はどうなっているの？」

「アカツキ、薬を飲もう。ぼくも疲れた」

＊

朝。

ユージは階段の踊り場で、立ち止まり、そのままいったん腰を下ろした。夜中に同僚から掛かってきた電話の内容を思い返す。ソリダリティは、ニュー・カワサキとシンゲンを隔離する決議をテレビ電話会議で採択したという。

薬が切れているため、今の気分は最低だ。これでいいのだと思う。このほうが作業がやりやすい。ユージは、液化ガスの入った小型ボンベのコックを少しだけひねった。空気より軽い気体は、やがて二階全体に薄く広がるだろう。二階には、夫婦の部屋、娘の部屋、息子の部屋、そしてバスルームがある。

駄目だ。許されないことだ——。

ユージは、階段を駆け上がり、バスルームに入った。胸のポケットから赤いカプセルの入ったプラスチックのケースを取り出す。その2錠を口に放り込み、水道の蛇口にじかに口をつけ、薬剤を飲み下す。気分が高揚してくるのが分かる。

踊り場に駆けもどったユージは、ボンベのコックをきつく閉めた。再度階段を駆け上り、各部屋の窓を開け始めた。大気が放射能によって汚染されているために、窓を開けるのは久しぶりのことだ。

シータの部屋で、ユージは立ち止まった。壁に掛かった鏡に、自分の姿が映っている。直接日の光を浴びているわけではないが、妙に青っぽさが目立つ顔色をしている。太陽光線の反射の中で自分の顔を見るのは何年ぶりだろう。

鏡に映る自分の背後には、仰向けに眠っている息子の顔が見える。朝日を浴びているのに、目を覚まそうともしない。鏡を覗き込むと、シータの額に二つ、顎の下に一つ、黒いあざのようなものがある。昨夜の娘と息子の大喧嘩を思い出す。息子の顔を眺める。その鼻と口元がアカツキそっくりなのに、あらためて気づくと笑みがこぼれた。

開け放たれた窓から入り込む空気がおいしい。

毛布の乱れを直してやろうと、朝日を浴びながら、ユージはゆっくり振り返った。

トイレ同盟

＊

始業式兼対面式の翌日、中嶋慶太は早めに学校に着いた。

校内は、しーんとしている。朝の練習のために登校したらしい、運動部かブラスバンドに属していると思われる生徒たちの姿がときどき目につくくらいだ。

勝手が分からない一年生に見られないように平静を装い、慶太は足早に校舎内を歩き回った。建物の各階を手際よくチェックしなければならない。「2年B組」、「美術室」などと記されたプレートや、ドアの窓ガラスにペンキで書かれた表示を横目で見ながら、ひたすらトイレだけを探す。

見つかると、男子トイレの出入り口の前で足を止める。あたりを見回して、すばやく戸を開ける。小便器、そして仕切りで囲まれた大便所の数と、手洗い用の台の位置を確認する。

小学校のトイレに比べて汚く、雰囲気が暗い。建物自体が古いせいかもしれない、と慶太は思う。

小学校では、音楽室と家庭科室が並ぶ階の端にあったトイレが一番利用しやすかった。めったに児童が入らないからだ。特別な授業のためだけに使われる部屋の近くのトイレ。それが狙い目だ。

教員用トイレもいい。便器のある仕切りの中に入ってさえしまえば、緊急用として役立つ。だが、女子トイレは、たとえ緊急時でもパスだ。何事にも、絶対にやってはいけないことがある。そう考えた慶太は、ある出来事を思い出した。

小学校五年生だった年の冬――。

慶太は絶対にやってはいけないことの一つをしてしまった。昼間でも気温が例年より低かった日の翌朝に、臨時の全校集会が開かれた。

「きのう、体育館の物置でおしっこをした人がいます」

体育館で全児童を前にして、女性の校長が言った。

館内でざわめきが起こった。「えーっつ」、「うそー」、「マジ?」、「いやだー」、「おまえじゃないのか?」そんな言葉が周りできさやかれるのを、慶太は黙って聞いていた。

「そのために、みんなの使っているマットが一枚台無しになりました。とても残念です。でも、先生たちみんなで話し合いをした結果、その人を許すことにしました。マットのことは、なかったことにします。なぜだが、分かりますか?」

校長は続けてそう言い、首を右から左へ、次に左から右へとゆっくり回して、児童全体に視線を投げた。そして再び正面を向いた。

「わたしたちがその人を許すのは、正直な人だからです。きっと、やむを得ない何かの理由があったのでしょう。いたずらではないことは確かなようです。マットに、鉛筆で『ごめんなさい』と書かれていたからです」

再び体育館の中がざわめいた。慶太は顔が赤くならないように、深呼吸を繰り返した。その日も肌寒く、吸い込む空気が冷たかった。耳が火照るのだけは防げなかった。

「その人に言いたいことがあります。あなたは正直な人です。でも、あなたのしたことは、よくないことです。分かっていますね。分かっているから、『ごめんなさい』と書いてくれたのですね。わたしたちは、正直なあなたに勇気も持ってほしいと思います。お手紙でも、電話でも、いいです。理由を聞かせてください。どうして、あのようなことをしたのですか。そのことを、わたしたちに知らせてくれる勇気を持ってほしいのです」

全校集会の前日のことだった。

音楽の授業が終わったあと、慶太はせっぱ詰まった状態に追い込まれた。音楽室に近いトイレは、クラスメートの「溜まり場」になっていた。そのトイレを使うのをあきらめて、体育館に付属したトイレに向かった。すると、そこは体育の授業を終えた六年生の「休憩所」になっていた。

漏れそうだ。どうしよう。とっさに目に入った一人だけになれる個室は、体育館の用具室だった。慶太はつま先立ちになって、そっと——それでいて素早く用具室に忍び込んだ。

どこでしょう？ 壁、床、跳び箱、マット、大小のボールの入った大きな籠……。迷っているうちに始業のチャイムが鳴り始めた。なぜマットを選んだのか、自分でも分からない。用を足すなり、慶太は教室まで走って戻った。

算数の授業が終わるとすぐに、青鉛筆一本をポケットに入れて、体育館の用具室まで駆けて行った。ばれていないだろうか。不安でならなかった。胸がどきどきした。

「ごめんなさい」と何度かなぞって太く書くだけで、精一杯だった。もっと書きたいことがあったが、書けなかった。説明したとしても、分かってもらえない気がした。

——ごめんなさい。

でも、本当に仕方がなかったんです。ぼくにとっては、生きるか死ぬかの問題なんです。不登校なんて、したくないんです。学校が好きなんです。学校に通いたいんです。だから、許してください。

そんな言葉を口に出さず、心の中で何度も繰り返した。全校集会のあった日から数日間、夢の中で口走っていた夜もあった。匿名での手紙を書こうとするたびに、テレビの刑事ドラマのように、指紋を調べたり筆跡鑑定をされるような気がした。

どうしよう？

いろいろな刑事ドラマのシーンが頭に浮かんだ。

そうだ！

迷ったあげく、「ごめんなさい。トイレにほかの人がいると、おしっこができないんです。マットのお金は、大きくなったら必ず弁償します」と、手袋をした左手で手紙を書いて投函した。

＊

あれから一年以上が経ち、慶太は中学一年生になった。

「ずいぶん、早いね」

背後から声を掛けられて、慶太は全身の血液が急停止したようなショックを覚えた。

「新入生だよな」

振り向くと、入学式と昨日の始業式で見た覚えのある男性教師の顔が見下ろしている。痩せているが、背が高い人だった。一八〇センチ以上あるのではないかと慶太は自分の身長から想像する。一年生のクラスを受け持つ一人だったような記憶がある。

「おはようございます」

慶太は頭を下げ、きちんと挨拶が出来た自分に驚いていた。ぎゃあ、とか叫ばなくてよかったと思う。

「朝練の様子を見せてもらおうと思って、早く来ちゃいました」と言いながら、自分でもよくこれだけ落ち着いて嘘がつけるものだと感心する。一瞬凍りついたようだった全身の血液が、今度は熱くなって駆けめぐるとような気がしてきた。耳が火照る。

「新入生の部活参加は、まだ禁止だぞ」と教師は言い、「おまえ、ハンドボールをやらな
いか？ 勧誘も禁止なんだけどな」と、くしゃくしゃの笑顔を作って付け加えた。

「ふーん」

その日の放課後の帰り道。早朝での教師とやり取りを、臨場感たっぷりに再現したつもりなのに、川村翔の反応はいまいちだった。慶太は、遅れ気味についてくる翔と歩調を合わせるのに苦労した。二人をほかの生徒たちが追い抜いていく。

翔が元気のない理由は分かっている。慶太は校内にある全トイレの状況について、昼休みに詳しく翔に話しておいた。だが、生徒たちがいない早朝の様子と、それ以後とでは状態が大きく異なる。授業の時間割は毎日と同じではないから、曜日によっても状況は変わる。

「で、どうだった？」と、慶太は小声で尋ねた。

「駄目みたい」

「決めつけるなって、小学校でも何とかやってきたじゃん。大丈夫だってば。いろいろ手はある。なせば成る。精神一到何事か成らざらん。類は友を呼ぶ。大山鳴動して鼠一匹。チュー」

「ふう」

塾の春期講習で覚えたばかりの慣用句を連発して、慶太は懸命に励まそうとしたが、翔はため息を漏らしただけだった。慶太は心配になった。小学校六年の時には同じクラスだったために、連携して何かと小細工ができたが、中学では二人はクラスが別になってしまった。

慶太は足が速いが、翔は遅い。とっさの場合に機転が利き、楽観的な慶太に比べて、翔は何かにつけ消極的に考え、あきらめやすい。そんな対照的な二人が同盟を結んでいる。最初は二人して、「二人同盟」と名付けていた。

トイレ以外のことでも、二人は仲がよかった。慶太が青山奈菜と「付き合う」とまではいかない間柄になって以来、「二人同盟」から「トイレ同盟」へと慶太が勝手に名前を変えた。

「ぼく、不登校になるかもしれない」

翔がぼそとつぶやいた。

「おまえ、結論を出すのが早すぎるんだよ。何か問題があったら、一緒に考えようって誓い合っただろう？ トイレ同盟、忘れんなよ」

数週間前だったら、こんな場合には翔の肩に手を回したのに、慶太は伸ばしかけた手を引っ込めた。母親の助言で大きめの学生服を着ていて、これまでとは違った人間になった気がするせいか、中学生になったという自覚があるためか、照れくさい気がする。翔をどう慰めていいかが分からない。

学校でも、デパートや公園のトイレでも、他人が隣の小便器に立っていたり後ろで待っていると、小便ができない。そんなふうになったのは、小学校四年生くらいになってからではないか。慶太は振り返る。正確には、いつからなのか。何かきっかけがあったのか。病気なのか。いろいろ考えてみたが、分からない。

トイレに他人がいると、自分がかなり緊張するのを感じる。そのために、小便が出ない。焦る。すると余計に緊張する。だから出ない。焦る。出ない——。そこまでは自覚している。なぜなのか。どうすれば、こんな状況から脱出できるのか。それについては、さっぱり見当がつかない。恥ずかしくて誰にも相談できない。

小学生だった時には、授業の間の十分から二十分の休み時間に、トイレ内が自分を除いて無人になることはまれだった。慶太は小便がしたくなると、自分のクラスや学年が利用するトイレを避けて、わざわざ遠くのトイレにまで走って行ったり、次の授業の開始を知らせるチャイム寸前まで、トイレの近くを何げない顔をしながらぶらぶらする。漏れそうになるのを必死で我慢して、トイレに誰もいなくなるのを待つ。そんな工夫をしていた。

大使用の仕切りに入るのには、相当な勇気が必要だった。見つかると、しつこくからかう児童が何人もいる。仕切りの上から掃除道具やバケツの水を投げ込まれることもある。下手をするとイジメの対象になる。実際、それが原因で不登校や「保健室登校組」になった児童もいた。

チャイムの鳴る時間が近づき、自分が大便所に入るのを目撃していないという十分な

確信がある時にだけ、駆け込んで閉じこもる。これしかなかった。

授業に遅れるのが当たり前になった。足が速いのが、せめてもの救いだった。それでも、クラスメートからは不審の目で見られるし、先生からもしょっちゅう注意された。おしっこを漏らしたり、学校に行けなくなるよりはましだ。そう自分に言い聞かせて、小学校での日々を何とか切り抜けてきた。毎日が戦争だった。

「きょう、休んだら？」

始業式から四日目の晩、慶太は翔の家に電話をした。

「おい、黙ってしちゃ分かんないよ。おまえ、どうする気だ」

そう尋ねても、翔は返事をしない。かすかに鼻をすするような音が聞こえた。泣いているにちがいない。

「苦しいのは分かる。でも、逃げてるなんて、悔しいじゃないか。一緒に考えようよ。おれたち、トイレ同盟は不滅だぜ！」

励ますつもりで言ってみたが、翔には冗談めいた言い方が全く通じないことは、これまでの経験で承知している。

慶太は思い出す。

小学校時代に、自分と同じくトイレに行くのに苦勞している者が何人かいた。他人がそばにいと、小便がなかなか出ないらしい児童。体質で頻繁に下痢をする児童。身体に障害がある児童。

小便が出にくい場合には、程度の問題もあるし、その児童自身の性格や周りの児童との人間関係などで深刻さが左右される。悩みをかかえた児童は一人ひとりが何とかやりくりしている、という印象を慶太は受けた。だが、面と向かい、腹を割って、その問題について話し合える相手はいなかった。

不登校や保健室登校の状態になっている児童の中に、自分と同じような悩みを持つ者がいるような気もした。慶太自身が、そうなりかけたからだった。

どうしてなんだろう。そばに他人がいると、おしっこが出ない。出にくい。自分は重症だという思いがあった。やっぱり病気なんだろうか――。

翔がトイレに行くことで苦勞をしているのを慶太が知ったのは、小学五年生になってクラス替えがあり、同じクラスになってからだ。始業寸前に二人でトイレにいることが何回か重なって、ぴんと来た。ちょっとうれしかった。後で聞いたことだが、翔もぴんと来たと言った。

慶太は、大使用の仕切りの中で小便をするほうが落ち着く。小便器は、ほとんど利用しない。男子トイレが、女子トイレみたいに全部個室だったら、と何度思ったかしれない。不思議なことに、翔は小便器しか使わない。慶太は仕切りの内、翔は小便器という具合に、テリトリーが決まったような形になった。

小学五年の初夏、「二人同盟」を結んで間もなく、慶太の提案でトイレ練習をしたことがあった。早朝や放課後に、ひとけのないトイレで小便器に並んでおしっこをする。普

段はなるべく水分を取らないようにしている二人が、その日は水筒を持参して、練習の少し前からがぶがぶお茶を飲んでおく。

同盟関係にあると言っても、しょせん二人は他人同士。緊張するのは変わらない。だから、隣り合って小便器に並んで、おしっこをする練習をした。

慶太は目をつぶって精神統一をはかる。出ますように出ますようにとか、気にしない気にしないと、心の中でおまじないをつぶやく。一方、翔は顔を反対側に向けて、おしっこが出るのを無言でじっと待っている。慶太のほうが、時間がかかる。

「おれ、やっぱり個室にする」と言って、仕切り内に入ったことが何度もある。小便器になじめない。小学校六年生のとき、二人で外を歩いていて、たまたま公園のトイレが目についた。練習をしようと慶太が誘うと、翔がうろたえた様子を示したのには驚いた。「嫌だ、絶対に嫌だ」

普段には見せることのない、翔の断固とした拒絶の表情を目にし、慶太はあっけにとられていた。

デパートのトイレに入ろうと誘ったときにも、翔は拒否した。慶太は翔のおびえた顔つきに、ただならないものを感じた。よく見ると、翔の体がかすかに震えている。公衆トイレは苦手らしい。前に何か嫌な経験をしたとか、怖い目にでもあったのか。慶太は、触れてはいけないものに触れた気がした。

やがて、慶太は「二人同盟」から「トイレ同盟」へと名前を勝手に変えたが、二人の間でもその新しい名称はめったに口にされなくなった。ただ、同盟関係は続いていた。

「——わざと遅刻するとか、保健室に行くとか、頭やお腹が痛いからと嘘をついて早退するとか、いろいろやってきたじゃないか」

慶太は電話の送話口に向かって言うてはみたが、依然として翔の声は聞こえてこない。「今まで通りにやっていけば、いいんだよ。でも、全然学校に行かないのは駄目だ。前に、何度も話し合ったじゃん。だから、明日は絶対に来るんだぞ。待ってるからな」

一方的に言い、慶太は受話器を置いた。

受話器を見つめながら、青山奈菜に電話しようという思いが頭をもたげた。中学に進学して奈菜と同じクラスになったことが、慶太には信じられなかった。うれしくて、たまらない。

慶太と奈菜は、母親同士の仲がいい。奈菜の母親は、慶太が電話をしても愛想よく奈菜に回してくれる。とはいえ、いざとなると躊躇する。

明後日の土曜日に、奈菜と一緒に映画を見に行きたい。慶太は思う。このあいだの春休みの一日みたいに、映画の後で肩を並べて、いろいろなことをしゃべりながら、シネコンとくっついたショッピングセンターの中を歩き回りたい。わざと馬鹿なことを言って、奈菜を笑わせたい。笑うときの奈菜のかわいい顔を、また見たい。

慶太は電話機から離れられずにいた。居間のカーペットの上に腰を下ろし、体育座りをする。

その日の昼休みに、学校で奈菜たちが話していたことを思い出した。クラスでは、まだ同じ小学校の出身者同士が固まる。慶太は東小出身の男子生徒の固まりの端にいなが

ら、近くにいる奈菜たちの会話に何となく耳を傾けていた。

「だってあの子どもたち、前からトイレ友達じゃん」

そんな言葉の切れ端を耳にした記憶が、不意によみがえった。「トイレ友達」という言い方は、小学生のころから聞き慣れている。男子がよく口にする「連れション」というのとは、違った響きがある。翔に電話した後のせいかな、その言葉が気になる。

「トイレ友達かあ」

慶太はつぶやき、おしっこ問題で悩んだり苦しんでいる様子が見られない、女の子たちをうらやましく思った。

セレブリティ

＊

新幹線のホームを歩きながら、薬を飲む時刻を三分過ぎているのに気がついた。列車のドアは既に開いている。発車までにはまだ十分ほどあるが、薬を飲む時間をずらしたくない。いったんいい加減になると、それが癖になる。

出がけに飲み下した精神安定剤のせい、コンクリートの地面がやわらかく感じられる。早くしなければ。定刻に服用しなければならないカプセルのことだけが頭を占める。指定席のある車両へと急いだ。

左前方の車内で誰かが大きく手を振っているのが目に入った。そちらには視線を向けずそのまま通り過ぎようとする、コツコツというくぐもった音がした。窓に目をやると、知った顔の男がガラスを叩いている。目と目が合った。今度は、さかんに手招きをする。立ち止まって軽く会釈をし、早足で前方に進んだ。

飲み忘れは厳禁だが、十五分前後のずれなら構わない。ただし、なるべく定時での服用を習慣化するように――。担当の医師は、繰り返しそう言う。席に腰を下ろして、すぐに薬を飲みたかった。

次の車両との継ぎ目まで来たとき、さきほどの男がドアから飛び出すような勢いで姿をあらわした。

「あなた何号車？」

尋ねられるままに、手に持った指定券の番号を読み上げた。

「少し離れているけど、乗ってしまえば大丈夫。まあ、とにかく、お上がりなさいよ」

まるで自宅に招くような口ぶりだった。ためらいもあったが、男の勢いに負けてそのまま乗車した。車両のほぼ中央にある二人掛けシートの窓側が、男の席だった。結局は、男の隣の席で薬を飲むはめになってしまった。水筒をデイパックにしまったところで、男は口を開いた。

「ご苦労さま」

平然とした口調でそう言った男の顔に、すべてを了解しているという表情を読んだ。定期検査の結果、医師から薬を飲み始めるように指示されて二週間が過ぎようとしている。人前で薬を飲むことには抵抗はないが、服用の時刻を守るのには、かなり神経をとがらせている。自分でも度が過ぎている気もする。

「わたし、実家に帰るんですよ。いえ、休暇でじゃなく、もう東京にはいなくなるという意味――」

男は一方的に話し始めた。内容は、共通の知り合いや飲屋の近況が主だった。よくしゃべる男だということは知っている。次第に早口になってきたが、場所をわきまえて声の大きさを調節するだけの繊細さを備えている。薬を飲んだ安堵感に浸りながら、私は男の話の聞いていた。

「名古屋まで一緒の人がいてよかった」

こちらの指定券を覗き見て、行き先を知ったのだろう。男はそう言って、自分の座席を後ろに少し倒した。

「一緒って言ったって、ここは私の席じゃない」

「大丈夫、何とかするから、ご一緒しましょう。それとも、誰かお連れさんでも？」

「いや」

「よかった」

男は次々と共通の知人の噂や世間話をした。男の早口に閉口し始めた。車内に入った以上、あとは席を移動するだけだ。少しの間、その男の話の聞き役になることにした。デイパックに入れてある読みさしの本の内容が、頭に浮かんでくる。車内での二時間があれば、読み終えることができるだろう。

発車三分前になり席が八割ほど埋まったところで、腰を据えている座席の乗客が来た。ヘッドホンをした十七、八に見える男で、顔をしかめている。この席に私を勝手に座らせた男は、その若い男にヘッドホンを外すように身ぶりで示し、いきなり千円札を握らせた。二枚に見えた。

「お弁当でも買ってちょうだい。足りないかしら？」

相手は首を振って千円札をズボンのポケットにねじ込んだ。

指定券を取り上げられたままなので、こっちは二人のやりとりを黙って見ているしかない。交渉が成立し、若い男は去った。

状況判断が素早く、機転が利き、頭の回転が速そうな隣席の男に感心した。確か、服の店で働いていたはずだ。名前は知らない。通称も知らない。男のほうも、たぶん私の名前を知らないだろう。その男と知り合った界限では、こういう薄い関係の人間がたくさんいる。

たとえば、あるバーによく来るスポーツジムでインストラクターをやっているという男。民放のアナウンサーのGに似た、マークと呼ばれている男。ある飲屋で大乱闘になり、公務執行妨害で逮捕された酒癖の悪いタチバナとかいう名の男。そうした、あだ名や通称だけで知っている男たち。それに加えて、飲屋のマスターや従業員たち。

列車が動き始めた。ぎりぎりです車内に乗り込んだ客たちが、せわしく通路を行き来する。男は相変わらず、世間話を続けている。私は車内での読書をあきらめた。

突然、「あっ」と、男が叫んだ。テレビでよく見る女性の芸能人と、そのマネージャーか付き人らしき男と女が、通路を通り過ぎていく。この三人も、発車間際に乗り込んだらしい。

男はブランド物の小型のバッグから手帳を取り出し、何やら書き付けている。私は遠慮して前方に目を向けていた。

「ねえ、見て」

男が差し出した手帳を、私は言われるままに手に取った。意外にずっしりしているのに驚いた。皮で装丁してある、やや大きめの高価そうな手帳だった。

「開いていいよ。中を読んでも構わないから」

手帳全体が異様に膨らんでいる。モスグリーンの皮で包まれているせいか、手に持つと小型の爬虫類を連想させる。一ページ目からじっくり読むわけにもいかず、私は全体

をばらばらとめくった。

分厚い手帳の前半のページには、たくさんの紙が貼られていた。その手帳の二分の一ほどのサイズの手帳を解体し、ばらばらになったページを、大きな手帳に糊できれいに貼り付けたものようだ。機械的にめくっていくうちに、貼られているのは解体された手帳ではないのに気づいた。

よく見ると小型の手帳を左右見開きでコピーしたものらしい。縮小コピーされたものにも見える。それが上下二段、左右二ページにわたってピッタリ収められている。念を入れて丁寧に貼り付けられたものだという印象を受けた。後半には紙は貼られていない。文字が書かれているだけだ。

「わたしの宝物なの——」

男は、十八年前の十五歳の時に上京したという。生まれも育ちも、三重県の北部。高校に進学したが、ゴールデンウィークを利用して上京したのをきっかけに家出状態になり、以後東京で暮らしてきた。寝る場所や食べることには、全然困らなかった。

「わたしって、かわいかったでしょ。お金の心配をしたことはなかったなあ。ある時期まではね」

若くてかわいかった少年時代のその男は、驚くべき数の男性遍歴を経てきたという。つい数か月前まで、私はカウンセラーとして他人の話に耳を傾ける仕事に就いていた。聞くことには慣れていづもりだったが、少し苦痛を覚え始めた。癒やす側だったのが、癒やされる側に変わったせいかもしれない。

知らぬ間に私は男の話に感情移入していた。私に手帳を預けたまま、男は語り続けている。さまざまな男性との出会いや付き合い、そして別れ——。その間に挿入されるのが、東京で見かけた有名人の話だった。手帳には、そうした有名人たちの名前と、見た場所、日付、時間帯、その人物がどんな格好で何をしていたかが、メモされている。

タレント、歌手、俳優、政治家、スポーツ選手、キャスター、アナウンサー、コメンテーター、評論家、モデルといった人物を見かけた時の様子を男は、驚くべき簡潔さで描写する。当初覚えていた辟易した気持ちと苦痛は消え去り、いつの間にか私は話に聞き入っていた。話を聞きながら、ときおり思い出したように相手の心理を推し量ろうと努めた。以前は職業柄そんな日々を送っていたが、そうしたさいに働かせる勘をもう忘れかけている。私はただ無心に男の話に耳を傾けていた。

「ねえ、原宿駅に専用の駅があるって、知ってた？ あ、そうだ、もうないんだ」と、皇室の人たちの話までが出てくる。途中から、男は急にしんみりとした声になり、今新幹線に乗っているわけを話し出した。この一年間に、親しい友人が二人、同じ病気から来る日和見感染が悪化して亡くなった。最近、体調がよくない。悪い兆候もあるが、まだ検査は受けていない。加えて、カードローンの返済がかなり切迫した問題になっている。

私たちは、名古屋駅で下車した。私には市内の専門学校を訪ねる用があった。男は私鉄に乗り換えて、三重県にある実家へと向かう予定だった。駅構内の連絡路での別れ際に、「あっ」と男が声を漏らした。

女性歌手とすれ違った。十代でアイドルとして一世を風靡したのち、結婚を機に芸能

界を引退。十年ほどの空白を経て、最近歌手として再出発。そんな話を思い出した。

さっそく、手帳を取り出してメモし終わった男が、顔を上げた。真剣な表情をしている。

「あの人、わたしが最初に東京で見た有名人なの」

男は手帳の一ページ目を見せた。細かい稚拙な字がおどっている。

「わたし、やっぱり、東京に戻る。引越しセンターに電話しなくちゃ。今、荷物が移動中なんだ——」

立ちつくす私を残して、男は携帯電話を手に精算所の窓口のほうへと急いだ。男が振り返って手を振った。手をあげてそれに応えながら、東京駅のホームで呼び止められてから初めて、男が笑みを浮かべているのに気づいた。

幼なじみ

＊

テープレコーダーが作動していました。

そのことは、はっきりと覚えています。小学六年生の時の記憶です。場所は教室。六年四組。月曜日。そこまで覚えています。何月かは忘れました。

自分を含めた児童たちが緊張していたのは、室内のほぼ中央の机の上に置かれた、テープレコーダーの存在のせいだけではありません。教室の後ろに、見知らぬ大人の男女たちが肩を寄せ合うようにして集まっているのです。二十人前後はいただろうと思います。ぶーンという、テープレコーダーの作動する音が聞こえていたような気がするの、いま思えば錯覚でしょう。

それくらいテープレコーダーの存在は不気味で、教室全体に緊張感を漂わせていました。

＊

道徳の授業でした。まず教科書に載っているあるお話を、担任の女性教師に当てられた数人の児童が分担して朗読しました。内容はオリンピックで金メダルを取ったある球技のチームをたたえるものでした。

そのチームは某会社の社員が大半を占め、監督もその会社のチームの監督が務めていました。監督とチームのメンバーたちが、どんなに一生懸命に努力して五輪での金メダル受賞という栄光を勝ち取ったか。その並々ならぬ努力を児童たちに感動させる。自分たちも頑張らなければならないという気持ちにさせる。

教科書をつくった会社も、それを検定して「合格」とお墨付きを与えた旧文部省も、そうした筋書きを想定していたことは容易に想像できます。こういうのを出来レースと言うのでしょうか。

「はい、ありがとうございます、N君。さて、みなさんは、このお話を読んで、どう思いましたか？感想を聞かせてください」

その直後です。先生は教壇から降り、机のあいだを縫うようにして教室の空席に歩みより、机の上に据えられたテープレコーダーのスイッチをカチッと押したのでした。

手を挙げる児童はいません。やはりテープレコーダーと、自分たちの背後に立ち並ぶ大人たちの存在が、いつもの打ち解けた気分になるのを妨げています。そのうちためらいがちにぼつぼつと手が挙がり、意見の発表が行われました。めでたし、めでたし。これで先生の顔も立った。そんな感じで時間が過ぎて行こうとしていました。

ある児童が手を挙げました。ふだんはわりと無口な生徒です。いたずらも、よくします。通知表の「落ち着きがない」という項目には、一年生の時から決まってチェックマークがついていた子でした。

「Kさんたちは、ずるいと思います。同じ会社の人たちが一生懸命に働いているあいだに、監督さんと練習ばかりしてお給料をもらっているのは、おかしいと思います。オリンピックはアマチュアの祭典だって、教科書にも書いてあります。練習は、ほかの人たちと一緒に仕事をやったあとからしたほうが良いと思います。プロ野球の選手たちとは違います。だからこの話は変だと思いました」

もちろん、その子の話したことを忠実に再現したわけではありません。ただその発言の趣旨からは、ずれていないと思います。発言に出てきた「Kさん」というのは、優勝チームのキャプテンの苗字です。監督の名前とともに国民的英雄として、そのころは全国的に知られた人でした。昔の話です。いまのようにオリンピックにプロが登場するなんて、考えられなかった時代の話です。

教室内が、ざわめき始めました。話し声が聞こえてきます。話しているのは児童たちではなく、教室の後ろでひしめき合っている大人たちでした。その日の授業は、他校の教師たちが授業参観をする——何と呼ぶのでしょうか——研修会の一部だったのかも知れません。

後ろから、こそこそ話し声がするけど、何だろう？ 後ろに近い席にいた、さきほどの発言をし終えたばかりの子は、そんなふうにしたようでした。顔を窓のほうに向ける振りをして、大人たちの様子をうかがいました。その子の顔に驚きの表情が浮かびました。大人たちがしきりに頷いているのです。笑みを浮かべている人もいます。険悪な雰囲気でないことは直感的にわかったみたいでした。

その子は少し心配だったようです。放課後に担任の先生から叱られるのを、ある程度覚悟していたと思われます。小学六年生だと、それくらいの見当はつきます。やっぱり、ちょっとまずいことを言ったのかな？——。授業が終わるまで、その子はずっとうつむいていました。

授業後もその翌日も、先生はその子を叱りませんでした。当時はそうした発言を許す教師たちが多かったのかもしれない。現在の風潮を思うと、ちょっと考えられないような話だという気がします。そういう時代だったのでしょうか。教職員の組合が強い時期だったのでしょうか。

そういえば、こんなこともありました。

確か自分が小学三、四年生のころです。学校で学年別に映画鑑賞に出かけた日のことです。映画はディズニー製作のアニメーションでした。午前中に映画を見終わり、児童たちは学校にもどりました。給食の時間が過ぎ、午後からは映画の感想をクラス内で話し合う特別授業になりました。

いい映画だった。いろいろな動物たちが出てきて楽しかった。出てきたうちではお母さんライオンがいちばん好きだ。絵がきれいだった。動きが自然で感心した。意地悪な人間が出てきたのが嫌だった。なかには悪い動物もいたけど、やさしい動物がたくさん

いて感動した。あんな世界で暮らしてみたい。

クラスの児童たちの口からは、だいたい以上のような感想が出ました。ある子が拳手もせず着席したまま、こんなことを話し始めました。

「動物なんて一匹も出なかった。全部、人間みたいだった。だって——」

教師はその子の発言をさえぎりました。その子は、担任のその男性教師から頬や腕をつねられたり閉じた教科書の背で頭を叩かれたことが、数えきれないほどあったみたいです。担任の教師からは嫌われていましたが、その子がほかの子たちからいじめを受けることはありませんでした。

ふだんはあまりしゃべらないけど、いたずらはよくする。ときどき突拍子もないことをポツリとつぶやき、みんなを笑わせる。そんな子でした。

男性教師から発言をさえぎられた子と、さきほどテープレコーダーの作動する部屋で発言をした子は、同じ子です。発言をさえぎった教師は男性、話し終えるまで発言をさせた教師は女性で、別人です。

現在ではもう大人になったその子は、五年生になって出会い二年間担任だったその女の先生に、今年年賀状を出しているそうです。先生からは返事という形で一月五日前後に年賀状が来るのに今年は来なかった、と言います。そのことが気にかかってならないようです。

話は変わりますが、自分の人生を集約的に表している一枚の写真を選べと言われたら、「これです」という具合に他人に見せられるものがありますか？

自分は、いま二枚の写真を机の上に置いています。久しぶりに見る写真です。さきほどからお話している子が映っています。これこそ、その子の人生の縮図だと言っても言い過ぎではない写真です。

保育園児だったころの、その子の全身が映し出されています。白黒です。おぼろげながら、そのときの状況を覚えています。そうです。その子とは幼なじみなのです。

その日は保育園の発表会でした。二枚のうちの一枚の写真には、舞台の上に、八人の園児が前後二列になって並んでいる様子が映っています。互い違い、つまり上から見ればジグザグに整列しているために、観客席から見ると八人の姿が重ならないように配置されています。その子は前列の右から二番目にいます。

子どもたちは、頭に紙製の帯を巻き、その帯の正面には花形だの星形だの丸形だのといった大きめの、これまた紙で出来た模様をつけています。その子は白っぽく映っている丸形の模様を額につけています。

もう一枚の写真も、同じアングルから同じ子どもたちを撮ったものです。同一人物が撮った写真でしょう。こちらの写真には、両手を上げ、両足を交互に上げ下げしてお遊戯をしている子どもたちの様子が映っています。

その子も踊っていますが、どこかぎこちない感じがします。ほかの子たちに比べて動きが小さいのです。自分がやっていることに納得していない様子がうかがわれる。そんな感想を述べれば、それは考えすぎだと言われるかもしれません。

先に紹介した、園児が整列している写真に話をもどします。ほかの七人がちゃんと気

をつけの姿勢をしているのに、一人だけが足を開いています。それが、その子です。舞台の上のほかの子どもたちは口をしっかりと閉じて、指をそろえて伸ばした両手をぴたり腿につけています。その子だけが口を半分ほど開けています。両手もわずかに曲げています。

正面から見て前列の右にいる、つまりその子から見て左隣にいた別の子が、足を広げたその子のほうに顔を向けて心配そうな目つきで見ているのが、おかしさをかもし出しています。舞台の上と観客席の両方に緊張感が漂っていたのは確かです。

そのとき、誰かが、たぶん先生、つまり保母さんたちだったと思いますが、しきりにその子に注意をしていたような記憶があります。

「Jちゃん、気をつけ、気をつけをして——」

観客席にいたその子の親が目を伏せるか、両手で顔を被っていたような記憶もありますが、昔のことなのでよくは覚えていません。大人の目でこの写真を見ているせいで、現在の気持ちから勝手にそうした記憶を作り出しているのかもしれませんが。

そんな子どもでした。推して知るべし、いわゆる問題児だったようです。いまは変人でしょうか。まわりからはそう思われているにちがいません。それはもう、毎日ひしひしと感じています。でも、とても涙もろい人です。根はいい人だと信じているので、別れずにいます、影みたくに。長い付き合いをさせていただいております。

捨てられた名前たち

＊

母の遺品の一つに小さな手帳がある。これだけは捨てられない。

手帳を残しておいたのには理由がある。私の名前がいくつも書かれているからだ。正確に言うと、私が生まれる前に考えられていた私の名前の案である。私につけられるはずだった名前が、何ページにもわたって三十くらい記されている。

旧姓、つまり父の苗字に続けて書かれている名もあれば、苗字なしのものもある。男の名がほぼ三分の二、女名は三分の一の割合だ。父の名から漢字を一字とったものもいくつもある。私の名前と一字同じものもある。

母の名から取られた名が見当たらない。気になったので丹念に探してみたが、やはり無い。古風だとかいう理由で、母が自分の名前を嫌いだと言っていたことを思い出した。

名前を書き付けていた時に母は妊娠していたのだ、と今更ながら気づく。自分の迂闊さにあきれる。結婚をしたこともなければ子を持った経験もないにしても、鈍すぎる。

表紙の裏に母の名前に加えて母の実家の住所が記されていることから、母の個人的な持ち物であったことははっきりしている。私物の手帳に複数の名前を書いている、持ち主の女性が妊娠していたと考えるのが普通の人間なのだ。

あらためて考える。妊娠していた母。そのお腹の中にいた自分。頭では分かるのだが、ぴんと来ない。その思いに自分がついて行けない。考えたことがないからだ。想像したこともないからだ。私にはそうしたいい加減なところがある。抜けているのだ。

協議離婚が成立し、母と私が父の姓から母の旧姓に変わったのは、私が五歳の時だった。事業に失敗し、借金をつくった父は妻子を置き去りにし、隣県のN市に逃げていた。母と私は母子寮にいた。熱心な寮母が、父の居所をつきとめ、離婚の手續に必要な書類に書名捺印させ郵送させた。父は私の親権を放棄して母に渡すことを、最初は拒んだという。そんな経緯を母から聞いた覚えがある。

小学校に上がる年、母から自分の氏名を書く練習をさせられた。正式に字を書くのは初めての経験だったと思う。ひらがなと漢字の両方を何度も書かされた。母の真剣な表情が怖くて緊張した。緊張のあまり、うまく書けない。書いてもすぐ忘れる。すぐに忘れる自分に苛立ち、先への不安も覚えた。それは母の感情そのものだったにちがいない。ふたりだけの家庭。ふたりの関係は濃密なものだった。

入学式が近づいたある日、母が名札に毛筆で名前を書いてくれた。その時の緊張した面差しで筆を運んでいた母の様子をぼんやりと覚えている。硯で墨をするさいの涼しげな匂いが、かすかに鼻を突いて心地よかった。

新聞紙か折り込み広告の上に何度か下書きをした母が、ようやく清書し、私の左胸に安全ピンで名札をつけてくれた。私は喜んで鏡の前に立った。私は声を上げた。奇妙な

虫が名札にへばりついていた。真っ黒でくねくねした虫だった。その様子を見ていた母が笑った。鏡に映った物が左右逆に見えることを、私は知らなかったのである。文字を鏡像として見て、初めて鏡の性質に気づいたらしい。

いま私は母の手帳に書かれた名前の羅列をながめている。同じ姓を冠して並んでいる名前たち。男名。女名。苗字なしで列をなしている名前たち。

女性の名にはひらがなだけのものもある。「——子」というふうに、ひらがなの下に漢字が添えられている名もある。男名は漢字のものばかりだ。私の名と漢字で一字違いの名もある。結局は捨てられた名前たち。なぜかぼんやりと顔が浮かぶ。みんなどこかで生きている気がする。

バット・スキン・ディープ

＊

【注意：この作品には残虐な描写があります。】

——Beauty is but skin deep. (美は皮膜にあるのみ)

目白通りから鬼子母神の参道へと曲がったところで、子どもたちの声がした。声の高さや、ところどころ聞こえてくる回らない口での喋り方からすると、保育園か幼稚園くらいの子どもたちらしい。そのまま進めば、その子どもたちと正面から向かい合うことになる。

馬鹿……。橋田玲子とはつさに道を引き返し、目白駅の方へと早足で進んだ。右に折れ、暗く細い路地に入る。そのまま行けば、参道の途中へと出られる。たまたま玲子は、この抜け道を利用することがあった。

午後三時を過ぎたばかりの時間帯なら問題はない。七時以降は、この道は絶対に使わない。昼間でも気味が悪い。玲子はうつむいた姿勢を正し、耳を澄まして、あたりに警戒の視線を向けた。最近、この近辺でひたたりや変質者が増えた。よく利用する果物店の主人が言っていた。

大ぶりの眼鏡フレームの眉間にかかる部分を、右手の人差し指で押さえる。左腕全体でショルダーバッグを押さえ体に引き寄せる。路地を通り抜ける風が、甘たらい沈丁花の匂いを運んでくる。

玲子は参道へと出た。子どもたちの声は、もう聞こえなかった。

アパートに戻るとすぐに、パソコンを起動させた。二時間前に訪ねた出版社からメールが届いていた。ワープロ文書が添付されている。こんなふうに済むのなら、別に呼び出さなくてもいいのに。原書も宅配便で送れば事足りるのに——。そんな愚痴が頭に浮かぶ。

玲子は、ワープロ文書をモニターでスクロールし始めた。自分が訳した文章の最終チェックから片付けるか、出版社で渡されたばかりの原書の要約作りを先にするかで迷った。最終チェックは、一時間以内で終わりそうだった。その訳稿のある個所について、編集者がクレームをつけてきた。

「ここにも説明をつけてよ。訳注じゃなくて、訳文に織り込む形でさあ。先生が、そうしろって言うてるの。先生のやり方ぐらい、もう覚えてくれなきゃ——。ねえ、聞いてる？ 返事くらいしたらあ」

先生というのは売れっ子の翻訳家で、玲子はその人の名前で上梓されるビジネス書の下訳をしている。指摘された部分は、玲子にとってはどうでもいい、ささいな問題に思

えた。読者は、それほど馬鹿じゃありません——。言い返したい言葉を飲み込んだ。編集者の居丈高な態度を思い出し、鼓動が激しくなるのを感じる。玲子は、原書から手をつけることにした。

出版社の名と住所が印刷された封筒から原書を取り出し、封筒にヘンケルス社製のはさみを入れる。庖丁もナイフも料理バサミも爪切りも、ヘンケルスのものを愛用している。そのはさみで、玲子は細かく封筒を刻んでいく。

馬鹿、馬鹿……。何度もつぶやく。文字が印刷された部分を切り刻むさいには、いったん神経がとがり、それが引いていくのを感じる。馬鹿、馬鹿、馬鹿……。乾いた音と指先に伝わる細かな震えが快い。高ぶった神経が収まっていく。

原書の三分の一ほどを読み終えたところで、夕食の準備に取り掛かることにした。バッグから携帯電話を取り出すと、留守電機能が設定されたままになっていた。実家からのメッセージが二つ入っている。普段から玲子は、携帯電話を留守電状態にして外出する。

人前で通話をしたり、メールを入力するには抵抗がある。人目に立ちたくない。できれば、外では透明人間でいたい。そう思っている。他人の視線にさらされるのが、身を切られるようで怖かった。

「坂下奈美さんって知っているわね。あの人から、ケータイの番号を教えてくれって、午前から三十分置きくらいに電話があって——」

実家に電話をすると、母親が言った。誰にも携帯電話の番号を教えるはいけない。これは母親にきつく言っている。自分が母親から恐れられていることを、玲子は知っている。自分に対して卑屈と言っているほど母親が下手に出るのを、玲子は当然のこととして受け入れている。

＊

翌日、坂下奈美が、玲子のアパートにハンドバッグとスーツケースだけを持ってあらわれた。アパートの住所は、別の知り合いを通じて調べてあったようだ。携帯電話の番号について玲子の母親に何度も問い合わせの通話をしていた時には、既に東京にいたらしいことが話の断片からうかがわれた。

玲子と奈美は愛知県出身で、中学高校と同じ学校に通っていた。高校卒業後、玲子は上京して大学に進み、奈美は地元の企業に就職した。卒業式の日最後に顔を合わせて以来、九年が経っている。奈美は消費者金融だけでなく闇金融を利用して多額の負債を抱え込み、借金の取立てを逃れて玲子を頼ってきたのだった。玲子は、約半日かけて奈美の語る話に耳を傾けた。

母一人子一人の家庭で育った奈美の母親は、三年前に病死したとのことだった。母親が残した保険金と預金を使っているうちに、過剰なまでの浪費癖がついたらしい。玲子には、奈美についての悪い思い出はなかった。良くしてもらった記憶のほうが多かった。玲子は、いつも心の奥にしまいこんでいる故郷での出来事を振り返った。

中学二年生の時に、玲子の実家で火事が起きた。母親の不注意が原因だった。逃げ遅れた玲子は、顔面から右乳房にかけて火傷を負った。それはかなり目立つ跡となって残っ

た。皮膚の移植手術の話をお父さんが持ってきたが、玲子は拒んだ。

傷跡をカバーする化粧法を覚えた。傷跡は首から下が最も目立つが、顔の皮膚に負った傷は、そのメイクで何とか隠せる。現在は、髪を肩にかかるくらいまで伸ばし、やや大ぶりの眼鏡をかけている。外出の際には、うつむいて歩く癖が身についている。

火事に遭って以降、学校を休みがちになり、引きこもり状態でいたころの生活が思い出された。自室で本を読んで過ごし、その時の「今」を忘れようと懸命に努めた。死にたいとは思わなかった。不慮の災難のために死を選ぶのは理不尽だという思いがあった。好きな本を読みながらひっそりと生きたい。そうした願いのほうが強かった。

坂下奈美については、家がひどく貧しく、表情の乏しい少女だったという記憶がある。特に親しかったわけではない。奈美の家庭にまつわるいろいろな噂を耳にしたが、玲子には興味がなかった。クラスや学校の中で孤立していた点で、二人は似ていた。中学三年生の時に行われた修学旅行に参加しなかったのも、二人だった。

「——ねえ、覚えていない？一緒にバレーボールして遊んだよね」奈美が言う。

それほど親しい間柄ではなかったのに、いやになれなれしい——。玲子は思う。これから世話になろうとする魂胆が見え見えだ。

「バレーボール？」

「修学旅行で三年生はいないし、一、二年生は遠足だった日が一日あったじゃん。誰もいない校庭で、二人バレーやったり、鬼ごっこみたいな感じで駆けっこしたり、楽しかったなあ。あの日は、先生も三人くらいしかいなかったんじゃない？人生で一番楽しかった日だった気がする」

そういえば、そんなことがあった。玲子は思い出した。昔のことなど忘れてしまいたい。あのころなんかに、絶対に戻りたくない——。

＊

玲子と奈美との共同生活はうまくいかなかった。性格が全然合わない。玲子は奈美に生活費だけを渡すが、すぐに使ってしまい、頻繁に催促をする。奈美は、借金の取立て業者から追われているために派手な動きはできなかったが、そのうち水商売の世界に入った。学校時代はおとなしかった奈美が、奔放で軽はずみともいえる性格の人間になっていることに、玲子は驚いた。酒癖も悪い。

玲子の生活のリズムは狂った。奈美に合わせて夜間に翻訳の仕事をし、昼間に眠るようになった。筆が荒くなった、誤訳が増えた——。仕事をもらっている複数の編集者から、そう言われた。

奈美に振り回される日常がストレスとなり、奈美がそばにいて、過去の記憶が次々とよみがえる。いつもクラスで取り残されるのは、自分と奈美だった。遠足や野外での学習のとき、仲間同士が集まる中で、相手のいない二人が仕方なく行動を共にしていた。

「またかい？どこか具合が悪いんじゃないの？ここんところ、顔色も良くないし——」

次第に翻訳の納期が守れなくなった。体調が良くないのでしばらく仕事を休ませてほしいと、玲子は自ら翻訳会社に伝えた。食品包装用のラップが脳に張り付いたような、もどかしい気分を覚えるようになった。本も読む気になれない。読もうとしても内容が頭に入らない——。玲子の苛立ちは募った。

不眠が続き、ちょっとしたことで腹を立てるようになった。玲子は自分の怒りを奈美に知られたいがなかった。努めて平静を装った。奈美の眠っている姿を眺めるたびに、玲子は奈美が犬に似ていると感じた。無心な洋犬のように見える。犬は猫と違って、こちらがいちいち気を使ってやらなければならない。うっとうしい。

そうだ、犬にそっくり——。玲子は思い出す。中学二年生の時に起きた、実家での火事。火事が起きて数か月後のことだった。父親が玲子に犬を与えた。

「悪いな。子犬じゃなくて」

「別に……。犬は犬よ」

父親の会社の同僚が飼っていた犬だった。その同僚が海外勤務となり、一家で引っ越すことになったために、父親が犬を引き取ると申し出たらしい。レトリバーの血が混じった、性格の穏やかな成犬で、深夜に散歩に連れていくことが、玲子にとって自室外での唯一の楽しみと癒やしになった。

ある夜、公園で、自分の顔をべろべろ舐めはじめた犬の相手をしていたとき、ぼろぼろと涙がこぼれてきたことがあった。犬には傷跡が分からない。犬の目には、美しさや醜さが分からない。ただ、新しい飼い主だというだけで、自分の傷跡を舐めてくれている。そうした理屈は承知しているつもりだったが、自分が同情されているという、道理に合わない思いは去らなかった。

暑い夜だった。顔に厚めのメイクを施すようになってから、とりわけ暑さが身にこたえる。玲子は犬と共に国道に向かった。輸送トラックの往来が激しい道路だった。歩道橋の上まで来た玲子は、犬を抱きかかえた。喜んだ犬は再び玲子の顔を舐める。玲子は犬を道路に落とした。けたたましい鳴き声があった。トラックが急ブレーキをかける音も聞こえた。

いったん走りかけた玲子は歩を緩めた。暑さで体中が火照る。首から胸に流れる汗が不快だった。ただただ汗で濡れた下着を替えたい。玲子は近道を思い出し、そのまま家に帰った——。

＊

久しぶりに見る夢だった。仕事中に寝入っていたらしい。奈美が部屋に戻って来た。奈美は、美人とは言えないまでも、化粧栄えのする顔立ちで、特に肌のきめが細かい。ふざけて奈美の頬に指で触った。

「嫌だ、何よ急に」

「おいしそう」

「ばっかみたい。あんたさあ、何だか目つきが変だけど、熱でもあるんじゃない？」

和菓子のようにふわりとした感触の肌だった。ふいに、かつて飼っていた犬の腹の柔らかさを思い出した。さっきまで見ていた夢が、頭から離れない。

眠い――。

それなのに神経だけが目を覚ましている。

なぜだろう。

かたわらで奈美が寝入っている。玲子は奈美の布団に近づいた。カーテンを閉めたほどの暗い部屋の光の中で、化粧を落とした奈美の肌の美しさに見とれた。再び、柔らかい頬に触れてみたい衝動を覚えた。室内の気温が徐々に上がっていくのが感じられる。

暑い、暑い。眠い、眠い――。

首から胸にかけて流れる汗がいまましい。

馬鹿、馬鹿……。玲子は風呂場で、奈美の死体を解体していた。それにしても、暑い。気だるく、自分の体が妙に重い。動作が次第に鈍くなるを感じる。

肉と血の臭いが、吐き気をさそう。それでいて無性に眠い。玲子は手を休め、奈美の肌の美しさに見とれた。つるつるした犬の腹の感触を思い出す。

風呂場には、ペンチや金槌をはじめ、ありたけの刃物が置かれている。その中から果物ナイフを選び、玲子は奈美の頬の皮を剥いていく。濡れた指と手のひらの間でナイフの柄が滑る。馬鹿……。

暑い。眠い。気だるい。

ただただ汗に濡れた下着を替えたい――。さきほどの夢の続きとしか思えなかった。

アセクシュアリティ ー 1 ー

＊

その日の夜、内山圭吾と渡辺梨野は、ほぼ八畳の部屋の中央に敷かれた一組の布団に入った。枕元には小型の七輪が三台置かれていた。その中には、練炭が赤い光を放っている。七輪のほかに、枕元に据えられていたものがある。籠に盛られた五個の柿だった。

二人は、十五分前に適量を超える抗精神薬を服用した。今、二人は唇を合わせ、目を閉じた。軽く口を開くと、相手の舌の先が触れてくる。先だけでいい。それ以上は望まない。互いに上体を相手に預けているが、下半身は接触していない。

意識が薄れてくる中で、舌の先だけに集中する。これまで生きてきたすべての時間とすべての記憶が、そのわずかな皮膚の表面とごく薄い細胞の層に集約される。

息と息が混じり合う。息には甘い柿の香りする。甘い香りが部屋にも漂う。

窓はサッシで固定されている。クローゼットの扉、そして部屋とダイニングキッチンとの間のドアの隙間にも、ガムテープの目張りが施されている。室内の一酸化炭素の濃度は急速に高まっていく。

渡辺梨野は、その日の朝に携帯電話で交わした、友人の田川夕子との会話の断片をふと思い出した。

「モチは元気？」

「元気、元気。うちのミドリちゃんとじゃれ合っている。女の子同士で気が合ったみたい」

「そう、良かった。ご飯はちゃんと食べたかしら。あの子は選り好みするから、預けたドッグフードをあげてくれた？」

「ミドリちゃんも、同じのを食べた。仲良くお皿をくっつけ合って二人とも平らげちゃった」

「モチの声、聞く？」

「ううん、やめとく。悲しくなっちゃうから」

「悲しくなるなんて、大げさなこと言わないでよ。ほんの三日間のことでしょ？」

「長い長い三日間——」

「えっ？ 三日間なんて、あつという間じゃない」

「ありがとう。本当にいろいろありがとう」

「何を言っているの？ どうかしたの？」

「ううん。今朝は空がきれい——」

一方の内山圭吾は、その日の午後三時二十八分にパソコンを通じてメールを送った。相手は、実姉の吉川里美である。

——姉ちゃん、

ちょっと旅に出てみる。

電話は留守電にはなっていないけど、心配しないで。

この間、送ってくれた柿、おいしかったよ。

梨野と一緒に食べた。

ありがとう。

千佳ちゃんに、よろしく。

ダンナにも、よろしく。

元気でね。

意識は薄れていく。舌の先だけでつながっている。それだけでいい。たまたま出会った。たまたま同じものを求めていると知った。偶然か必然か。運命か宿命か。そんなことはどうでもいい。出会った事実に感謝しよう。その点で、二人の意見は一致した。

苦しい——。

一度だけ、二人は同時に目を開けた。互いの瞳を見つめ合った。一瞬の出来事だったが、思いが一致した。二人は、艶を帯びた柿の色が目の前に広がるのを見たような気がした。

*

以上は、私の創作だ。

ただし、その日の夜の部屋に置かれてあった三台の七輪の中で練炭が燃えていたこと、部屋の隙間に目張りが施されていたこと、内山圭吾と渡辺梨野が同じ布団で寝ていたこと、二人が同じ抗精神薬を過剰摂取していたことは事実だ。

渡辺梨野と田川夕子の間での携帯電話を使っただけの会話の一部は、田川夕子から、私が直接聞いたものだ。内山圭吾が吉川祐樹の妻である里美に送ったメールの文面は、ほぼ忠実に再現したものだ。私は、吉川祐樹に頼んで見せてもらったパソコンのモニターで、そのメールを読んだ。

内山圭吾と渡辺梨野は死んだ。一酸化炭素中毒による死であると、検視にあたった警察官は判断した。二人が苦しんだ跡が見られたと聞いた。頭痛、吐き気、嘔吐といった一酸化炭素中毒の初期症状が先に表れたのか、それとも抗精神薬の過剰摂取が原因による同様の症状が先に二人を襲ったのか——、私は知らない。

まず、強い眠気と倦怠感が訪れ、混濁した意識の中で苦痛を覚えることなく死に至る、という具合にはいかなかったようだ。二人の吐瀉物の中には未消化の柿の断片があったという。自らの命を絶った者に対して同情する自分と、それは許されないことだと二人を責める自分がある。

私は二人と面識がある。正確に言えば、内山圭吾は、私が心理カウンセラーとして勤務していた時期のクライアントだった。カウンセラーとクライアントという関係が終わった後も、私生活で薄いながらも交際があった。

渡辺梨野とは、内山圭吾を通じて知り合った。渡辺梨野と初めて口を利いた時には、私は心理カウンセラーの仕事辞めていた。

一度だけ、渡辺梨野と二人で会話をしたことがある。今年の五月下旬だった。あれは、会話と言うよりも、カウンセラーとクライアントとの面談に近いものだった。誰が相手であれ、二人きりで対面すると、そうした面談に近い会話になる傾向が私にはある。

もともと自分が喋るより相手の話の聞き役になる傾向は、幼いころからあった。自分の対人関係におけるパターンを、私はそんなふうに分かっている。だから、臨床心理学の道に進んだのかもしれないと思うこともある。それは単なる結果論だ、という見方もできるだろう。

＊

「結婚という方法も考えています」

渡辺梨野は言った。

「結婚ですか」

「内山さんとなら、一緒に生活ができそうな気がします。でも、内山さんって、極端に人間嫌いなところがあるから、無理だとも感じています」

私には、その意味がよく分かった。クライアントとして内山圭吾を相手に話した時間は、百時間を優に超えるだろう。二十七歳で亡くなった内山圭吾とは、十年の付き合いがあった。なにしろ、最初に会ったのが、内山が高校二年生の時だ。

「人間嫌い——」私は渡辺梨野の言葉を繰り返した。

「そう、人間がかなり嫌いみたいです。度が過ぎていませんか？ 自分が人間だということも許せないような感じ。個人にそなわっている人格とか人間性とかいうレベルじゃなくて、生き物としての人間が嫌いみたい。匂いとか、汗とか、肌に触れるとか、容姿や体つきというレベルです」

「そう感じますか」

「わたし、他人ことは言えた義理じゃないんですけど、あそこまでいくと尋常ではないと思います——」

渡辺梨野と二人だけでファーストフードの店で雑談をしていたときに、そんな会話をした。四カ月前の夏の午後だったと思う。渡辺梨野が内山について人間嫌いという言葉を使うのが、よく分かる気がした。

内山と私とは、カウンセラーとクライアントの関係だったため、かつて内山は私に対してかなり踏み込んだ話をしてくれたことがある。顔を真っ赤にししながら、時には震えながら、人間の身体だけでなく、食事や排泄や生理的な面について覚える嫌悪感と違和感を私に打ち明けた。

「——一緒に暮らせると思いませんか」

私は渡辺梨野に尋ねた。

「わたしにはあまり人間だという感じをいだかない、と内山さんは言うんです。それを聞いてわたしは、とてもうれしかったんです。わたし、内山さんが好きです。愛していま

す。だから、たとえ、世間からは変だと言われるような関係でも、全然気になりません」
「一緒に生活するという事は、人間の生理的なあらゆる側面を相手にさらけ出すことになるのですよ」

「分かっています。内山さんが、そうしたことに異常なほど敏感だということは十分すぎるほど知っています」

「自分から話してくれたんですか」

「ええ。電話で、ですけど」

「電話ですか？ 内山君らしいなあ」

「そういう話は、直接会ってはできないと言うんです」

「なるほど」

「そう言えば、内山さんって、ケータイが嫌いなんですよ」

「ええ、嫌いですね」

「いつも他人たちがそばにいるような気がして、嫌なんですって。だから、固定電話っていうんですって？ 普通の電話しか持っていないし、ナンバーディスプレイですから、特定の人から掛かってきた電話にしか出ないし——。でも、わたしは内山さんの気持ちが分かるし、そんな内山さんが好きです」

渡辺梨野の言葉に耳を傾けているうちに、危ういものを感じたことは確かだ。この人は、「好きだ」、「愛している」と言っているが、内山圭吾に強く影響された結果として、そう言っているにすぎない。内山に同化し、共振しようとしている。そう思った。

渡辺梨野と会話をしたときには、もう私は心理臨床家としての仕事を辞めていた。

今でも、その状況は変わらない。あの時の私が心理カウンセラーという立場にいたらなら、そして渡辺梨野が私の担当するクライアントだったなら——。そう思うことがある。たとえ、そうだったとしても、私の役割はただ聞くこと、ひたすら耳を傾けることでしかない。カウンセラーは医師ではない。医療行為は認められてはいない。たとえば、薬を処方する権限は法的に与えられていない。

でも、信じたい。耳を傾け、クライアントの聞き手となることで、その人の心に何かを生じさせ、それが何かの変化なり転換なりにつながってくれる。それがポジティブか、ネガティブか、どの方向にむかっているかは、正直言って分からない。

かつてそうした意味の疑問を、私の恩師にあたる人物にぶつけたことがある。

「そうだね。分からないね」と、その人は言い、しばし沈黙した。「——人は本来、死よりも生を、そして不快よりも快を、苦しみよりも安らぎを志向する傾向がある。でも、今挙げたペアは、人という生き物の中では分けがたく結びついている、という考え方がある。クライアントの心の中に混在しているその二つの方向を、クライアントの力で気付かせるのが、わたしたちの使命ではないかと思う」

「それだけですか」

「残念ながら、それだけだ。どちらの方向に進むかは、クライアントが決めることだと思う。指示も誘導もしない。こちらがひたすら聞くという姿勢を示すことで、相手が言葉を出すのを手伝ってやる。それだけでも、クライアントにとっては、大きな力を得るこ

とになる。わたしたちの使命はそこで達成された。そう考えるべきだと思う」

「あとは、本人次第ということですか」

「そうも言える。でも、わたしは少し違ったふうに考えている。クライアントを信じる。ひたすら聞くことに全力を注ぐ以上に、相手を信じることにも力を注がなければならない。聞くと、信じる。この両輪を同時に動かす。とても難しい仕事だ」

相手を信じる——私は恩師のその言葉を、よく思い出す。カウンセラーとして働いていた時も、何度思い起こし、その意味について考えたか分からない。今でも、思い出す。

内山圭吾と渡辺梨野は死んだ。私は、二人の言葉に耳を傾けることにより、二人を信じることができたとは思わない。カウンセラーとクライアントという、内山が学生だったころの関係——。そして、カウンセリングが終わった後の、知り合い同士という関係——。

「ぼくにも、他人とつながりたいという気持ちはあります。でも、それが性的なものかどうかは、正直言って分かりません。性的なものとは何か、という定義によりますね。定義とか言葉は、どうでもいいです。少なくとも、ぼくにとっての話ですけど。さっき『他人とつながりたい』と言いました。でも、安易に他人を愛することはできません。相手の意思を尊重しなければなりませんから」

これは、かつてクライアントとしての内山圭吾が口にした言葉だ。私は、面談中の会話を録音することはない。ただし、面談のあった日のうちに、その内容を必死で思い起こし、それを覚え書きとして残すという作業は続けてきた。

内山圭吾から聞き取った言葉を記したノートは十二冊ある。私は、そのノートをこれから読み直していこうと思う。

アセクシュアリティ - 2 -

＊

菓を飲み終え、私はデスクの上のプリントに目を通そうとした。隣のデスクにいる及川信也が、プレーンヨーグルトを食べている手を休めて、話し掛けてきた。

「やっぱり、駄目ですよ。統計は、ぼくには教えられません。確かに論文を書く時には統計を使いますが、パソコン用のソフトに数字を入力するだけで原理は理解していないんですよ。統計の部分だけ、受け持ってもらえませんか」

「とんでもない。私の特に苦手な分野です」

「でも、論文のレジュメを教材になさっているじゃありませんか」

及川は、私の目の前にあるプリントを指さした。

「これですか？ 確かに統計用語は出てきますが、実は意味が全然分かっていないんですよ。ここだけの話ですけど——」

講師控え室のあちこちで、笑い声が聞こえた。何人かの視線が私たちに注がれている。部屋にはデスクが六台置かれている。そのどれもがふさがっている。端っこに位置するデスク四台のうち三台は、二人が共有するほどの込みようだ。

「塾長に、お願いしてみたらどうですか？」と私は言った。それしか言えない。

斜め向かいのデスクにいる大谷という古株の講師が、口を開いた。

「適当にやっておけばいいんですよ。及川さんは新人だから、真剣に考えすぎていらっしゃる。生徒は、あなどれませんよ。そこを逆手に取るんです。こっちが教えようとするんじゃなくて、『この部分を説明してみてください』とか何とか言って、順番に生徒を当てていく。そのうちに、大当たりしますよ」

「そんなんで、いいんですか？」

「いいんですよ。わたしなんかは、いつもその調子でやっています」と、大谷が大声で言った。

「当てても、説明できる生徒がいなかったら、どうすればいいんですか」

「宿題にすればいいんですよ」

また笑い声が部屋に響く。

私がパートタイムで働いている塾は、臨床心理学の講座を持つ大学院への入試対策と、臨床心理学関連のさまざまな資格を目指す人たちを対象に特化している。ここで、私は、大学院入試の必須科目である英語の授業を週に三日で六コマ担当している。

ほかの科目の指導も頼まれたが、断ったのにはわけがある。どれだけでも楽をしようという、魂胆があるからだ。六コマのうち半数で教材にしているのは、ある翻訳会社から依頼された学術論文や論文の要約文だ。大学教員の知り合いから、翻訳を頼まれたものもある。一石二鳥を狙った、ずるくてせこいやり方で日銭を稼いでいると言える。

私が次の時間の授業で使う予定の英文を、及川は身を乗り出して熱心に読んでいる。及川に向かって、私は言った。

「慣れですよ。統計そのものを教えるわけじゃないですから、他人の訳したサンプルを参考にしながら、訳文を作り上げてごだけ。心理学の論文は書き方が決まっていますから、いったんそれを覚えてしまえば、あとは流れ作業みたいな感じになります」

「英訳の仕事もなさっていらっしゃるのか」

「そっちも、かなり適当にやっています。これも内緒ですけどね。パターンさえ覚えれば、機械的に訳せます」

「おもしろいですね」と、及川がつぶやくように言った。

適当に翻訳をしたり適当に授業をすることをおもしろいと言っているのか、目を通してある論文の要約がおもしろいのか、判断に迷った。真剣な目つきをしている。どうやら、及川は論文に興味をいだいているらしい。

「及川さんは、アメリカの大学でマスターの学位をお取りになっているんですね」

私は、ほかの講師から聞いた話を思い出した。

「はい」

「じゃあ、英語も教えられるんじゃないですか」

「ぼくは、英文和訳というのが苦手なんです」

そうだった。及川は高校時代に一年間アメリカに留学し、そこで得た卒業資格で日本の大学に進学したという。その大学の入学試験の英語は変わっていて、いわゆる英文和訳は出題されない。かつて、私はその大学の入試に失敗した経験があるために、よく覚えている。

「大学院入試の場合には、別に直訳的な訳文は要求されません。意識や大意で十分なんです。かえって、及川さんのような方のほうが、向いているんじゃないですか」

私は思ったままを伝えた。及川信也は、私の言葉に返事をすることなく、遠くを見るようなまなざしで窓のほうを見やった。

＊

行きつけのバーのカウンターで、私はペリエ・レモンを飲んでた。日によって違いはあるが、その店の客は半数以上が日本人ではない。日本人の客も、海外に生活していた経験のある者が多く、周りから聞こえるのは英語が多い。さまざまな訛りの英語を、日本人らしき人たちと、さまざまな肌の色と髪の色をした日本人ばくなく容姿の人たちが話している。男性も女性もいる。

以前は、このバーの周辺のバーやスナックやクラブに出入りしていたが、今はそうした店に入ることはほとんどない。この界隈でこのバーが孤立しているという意味ではない。客層も一部重なる。

グレーというのが、この店と客たちの印象だ。曖昧で、白でも黒でもない、どっちつかずの雰囲気という意味だ。私は、このグレーな店の中で自分がグレーに染まっていく感じが好きだ。

その店で、私は及川を見掛けた。

向こうはこっちに気付いていない。私はそのまま店を出ようか、成り行きに任せるか、迷った。こちらとしては、気にすることは何もない。知り合いの中には、ここで偶然に会うのを快く思わない者もいるだろうが――。

及川があの塾で私と同様にパートタイムの講師を始めたのは、二週間前だ。その前には、京都の大学病院で臨床心理士として勤務していたと聞いている。

私は、カウンター内の壁に取り付けられた棚に目をやった。酒類の瓶が並ぶ棚の奥が鏡になっていて、そこに店内の一部が映る。鏡の中に及川の姿がある。

窓際に置かれた長細いテーブルだけのコーナーがあり、そのテーブルに片肘をつく姿勢で、及川が立っている。傍らには五十代から六十代の間くらいに見える白人の男がいて、二人ともビールを飲んでいる。ここで初めて及川の年齢のことを考えた。三十歳前後だろう。

笑みを浮かべた二人は、打ち解けた様子に見える。仕事仲間や、上司と部下という雰囲気はない。二人の間隔があまり近くないことと容貌から、相手の白人はラテン系ではないという印象を受ける。表情と話す時の口の開け方を見ている限りでは、米国東部出身者のような気がする。品のいい印象を与える男だ。

私は二人が会話をしているうちにペリエを飲み干し、スツールから降りて店を出た。及川には気付かれなかったと思う。

数日後、仕事の帰りに及川に声を掛けて、ファーストフードの店に誘った。

私は、喫茶店よりファーストフードの禁煙フロアが好きだ。飲み屋は、特定の街にある特定の店しか行かない。「コーヒーでも飲もうか」と言われたり、逆に言う場合には、相手に異存がない限り、ファーストフードの店を利用する。なぜか、落ち着く――。理由は、そうとしか言えない。

ジャンクフードと呼ばれ卑しめられているメニューの一種を食べ、コーヒーを飲みながら、私たちは雑談を始めた。塾の仕事には慣れたか。京都と比べて東京の住み心地はどうか。そんな当たり障りのない質問から、私が気になっていることへと話題を移した。

先日、講師控え室で、及川が私の授業の教材をえらく熱心に読んでいたのが、気に掛かっていた。私は鎌をかけてみた。

「この間、授業で使った論文のレジュメ、あれは興味深かったなあ。あれだけじゃ物足りない。論文それ自体を読んでみたくなりましたよ」

「性的虐待のサバイバーへのアンケートの結果でしたね」と、及川が反応してきた。

「以前、サバイバーのピア・グループを支援していた時期があったので、そのころのことを思い出しました」

私がそう言うと、及川は一瞬ためらうような表情をした。何か言いたいが、言おうかどうか迷っている。そんな感じだった。

「そうした経験がおありになるんですか」と言い、及川が話に乗ってきた。

「ええ」

「ぼくも、サバイバーには興味があります。というか、学部生の時に書いた論文のテーマ

だったんです」

「じゃあ、卒論ということですよ」

「そうしかっただのですが、駄目だったんです」

及川は下唇をかんだ。

「どういう意味ですか。まさか、指導教授が許可してくれなかったなんて意味じゃないですよ」

「実は、そのまさか、だったんです」

「本当ですか？ 立ち入った質問になるかもしれませんが、どうして許可されなかったんですか」

私は、これまでの及川の言動を見てきて、ある予測をしていた。その予測が当たっているような気配になってきた。

「いや、最終的には、許可されました。単なる研究発表の論文として、ですけど。ただ、卒論としては、別のものを書く形になったというだけです」

「不思議な話ですね」

「はい。そう思われるのも当然でしょう。アンケートを取ったんです。ただ、その対象が問題になりまして――」

「どういう人を対象に選んだんですか」

「中学生や高校生の時に、ホームステイや約一年間の留学という形で、主にアメリカに滞在した人たちです。詳しく言うと、ホストファミリーのうちの誰かから性的な虐待を受けた人たちに、アンケートと面談をしたのです」

ほぼ予想どおりの言葉が返ってきた。臨床心理学を学ぶ動機に、自分自身のかかえている心の問題を解決したいという欲求があることは珍しくない。やはり、及川は何らかの性的虐待を受けた経験があるらしい。

「ご存知のように、アメリカでは未成年者に対する性的虐待が数多く報告されています。特に家庭内でのケースが多いのが特徴です。離婚率が高く、養子縁組が珍しくない国ですから、血のつながりのない親子やきょうだいが生活を共にしている家族の存在は、日本で考えられる以上に普通になっています」

「そうですね。日本の場合だと近親相姦という言葉があり、血のつながった近親者同士の性的な関係が、真っ先にイメージされる傾向があるように思います」

「指導教授からは、タブーだって言われました」

「タブーですか」

「はい。私が学部生として在学していた大学を有する学校法人は、キリスト教系の財団が経営母体となっています。本部はアメリカにあります。日本では付属の中学と高校が複数あり、また姉妹校としてアメリカ各地にハイスクールや大学が散らばっています。日本に限って言えば、短期のホームステイを始め、最長で一年間の留学を体験する中学と高校の生徒数は、年平均で百人近くいます」

「なるほど。学校側としては非常に不都合な調査になりますね。まして、キリスト教系の――」

「そうなんです。だから、タブーだと言われたのでしょうか。あってはならない事実をほじくり返すな、ほじくり出すな、ということです」

「そのように言われたんですか」

「いいえ、ほのめかされただけです。直接口に出すのも忌まわしい行為ですから」

「学校とその母体の財団にとっては、単なる一本の学術論文だけではなく、スキャンダルを書き立てた印刷物となる危険性が出てくるというわけでしょう。それに、キリスト教系であるかどうかに関係なく、ホームステイや留学を企画している、ほかのさまざまな団体にとっても非常に都合の悪い資料となる」と、私は及川の言いにくいことを代弁するような心積もりで口にした。

「論文が引き金となって訴訟さえ起こる可能性がある、と示唆されました。明らかに、多くの研究に対する脅しであり圧力です」

あの日、私が塾の授業の教材として使用した論文の要約は、性的虐待に関するアンケートの結果をまとめたものだった。米国のある地域で行なわれたもので、養子縁組という形でのつながりを持つ家族が対象になっていた。

隣のデスクから身を乗り出してその要約を読んでいた及川の様子に、私は尋常ではないものを感じた。読み終えた及川の放心したような表情も気に掛かった。その謎が少し解けた気がする。

及川と話しているうちに、私はクライアントの話を聞いているような錯覚に陥った。それは、自分が及川の心の内に興味を持っているからにほかならない。同時に、自分自身の過去を振り返る作業の必要性も感じているからにちがいない。私は自分の中に、及川と重なる部分を探していたとも言える。

未成年者である時期に受けた性的虐待が、その人のセクシュアリティにどのような影響を及ぼすか。セクシュアリティとは先天的であったり自発的なものであるだけではなく、後天的であったり他者による働きかけによって芽生え、あるいは左右される場合も多いのではないか。セクシュアリティの選択が、外的な要因の結果であって、内的な要素の発露ではないケースも少なくないのではなかろうか。

また、セクシュアリティは一定のものではなく揺れ動くものではないか。さらに言うなら、単数ではなく複数ではないだろうか。自分のセクシュアリティが一定であり不動かつ単数であると主張する人は、自分の可能性を閉ざすと決意しているとは言えないか――。

内山圭吾と渡辺梨野の心中以来、私はそんなことを考え続けている。

人は、無意識のうちに自分のセクシュアリティに縛られているのかもしれない。自ら選んだと自覚しているにせよ、深く考えずにいるにせよ、セクシュアリティという曖昧模糊としたものを、自明で当たり前のこととしてとらえ、自らを窮屈な状況に追い込んでいるのではないか。未定あるいは保留を維持するという選択肢が、あってもいいのではないだろうか。

内山圭吾と渡辺梨野は、極端な形で自分自身のセクシュアリティを選択した結果、死という道までを選んでしまったのではないだろうか。内山との面談を記録した十二冊の

ノートを読み返していると、そんな思いに駆られる。

カウンセラーがクライアントに、自分自身の過去の体験や現在の思いを投影することは、私が恩師から受け継いだカウンセリングの方法では許されない行為である。先入観や偏見や創作したシナリオをいだいてカウンセリングに臨んだり、面談の最中に誘導や方向付けがあってはならない。私はそういう方法、いや倫理観を恩師から学んだ。

ひたすらクライアントの言葉に耳を傾けるだけ。もし何らかの働きかけが許されるとするなら、クライアントが話しやすいように促すだけ。それが、恩師から学んだ職業倫理だった。

カウンセラーの職を辞した今、私はそのような倫理観で身を縛る必要はない。私は、過去そして現在の自分自身のセクシュアリティについて、考えざるを得ない内的な苦悩をかかえている。サバイバーとしての自分と、いつか折り合いをつけなければならない。

毎日決まった時間に決められた組み合わせの薬を飲まなければならない身になったことと、自分のセクシュアリティは、直接的には関係ない。それは、客観的な事実というものだろう。

セクシュアリティと関係があるなしにかかわらず、客観的事実、あるいは無根拠な思い込みが、人の心の中で何らかの象徴となり、その人の言動を大きく左右する。以前の私は、そうした状況が不幸な事態へと発展したクライアントたちを相手に、カウンセリングをしていたと言える。

ひたすら耳を傾ける。自分を出さない。それが、私が恩師から受け継いだ方法だった。

これまで棚上げして、面と向かってこなかった自分自身の心。今の私は、自分の心と向き合わざるを得ない状況にある。

アセクシュアリティ - 3 -

＊

内山圭吾と初めて会ったのは、十年前だった。私は、大学病院の精神科に勤務していた。治療行為のできる精神科医を補助するカウンセラーという立場にいた。

「小学生の低学年の時に、性的虐待を受けたことまでは分かった。でも、それ以上のことは決して語ろうとしないんだ。性的な話だけでなく、身体に関する話題や、ものを食べたり排泄するといった生理的な行為について聞くことも話すことも避けようとする。しかも、その拒否反応はかなり強い。覚悟してくれ。珍しいケースだ。長い付き合いが必要だと予想している」

担当の医師は、私にそう説明した。あえて診断名は告げなかった。

精神医学や臨床心理学の世界には、多種多様な領域や学派がある。疾患の原因を、たとえばウィルスや細菌であるとか、器官や機能の不全だと特定することができるわけではない。

もちろん、脳の損傷が症状となっている場合もある。その場合には、外科的治療や薬物療法、そしてリハビリテーションがきわめて精度の高い有効性を示す。

心の病の場合には、そうはいかない。症状と診断名と治療についてのマニュアルが複数存在する。そうしたマニュアルに依存せず、自分のこれまでの体験をもとに試行錯誤を繰り返すしかない、と考えている医師も多い。理論はあくまでも参考にとどめ、臨床、つまり患者との対話と接触の現場を最重視するスタンスである。

似たもの同士が集まる形で、そうした現場第一主義とでも言うべき姿勢を持つ精神科医や臨床心理家たちが勤務する環境で、私は働いていた。

内山圭吾と私との面談は週に一回、六十分というペースで進められていた。私はひたすら聞く。内山が沈黙している場合には、話すのを促すいくつかの方法を試す。それでも、何も喋らない時がある。無理に話させる必要はない。沈黙のうちに、一時間が過ぎたことも、何回かあった。

＊

「ぼく、鉱物になりたいんです」

「ほう、鉱物に」

「石と鉱物って違うんですか？ 石でもいいんですけど、鉱物って漢字が好きなんです。硬そうで、生きてるとか死んでいるとか、そういうぐちゃぐちゃしたことに関係なさそうで、いいなって思います」

「そう思うんだ？」

「はい。思います。生き物って言葉より、ずっといいです。生き物って、いつか死ぬ物って意味ですよ。死ぬことは怖くはないです。痛いのは嫌だけど。でも、たとえば、今、ここで死んでも全然構わないです。すごく痛くても、短い間だったら我慢します。ただ——」

「ただ？」

「死ぬって汚くなることですよ。血が出るかもしれないし、そのうち腐るわけだし。そういうのは嫌だな。死んでしまえば、意識はないと思うんですけど、どうなんですか？」

「どうなんだろうね」

「きれいな死に方ってあるんでしょうか。調べているんです。そういうことについて書いてある本があって、その中で一番きれいに死ぬる方法は何かなと思って……」

面談が終わると、その日のうちに内容を思い出してノートに記す。表紙に、内山圭吾の頭文字である「K. U.」とだけ書かれたノートは十二冊ある。私は、そのノートを読み返している。

印象に残る記述に黄色のマーカーで線を引いていく。その時の、内山の様子を思い出そうとする。記憶はきわめて曖昧だ。作為と創作がどうしても混じってしまう。過去を再現することは不可能だ。ただ、再演することならできそうな気がする。再び現すのではなく、再び演じる。

内山の心呼び寄せる。内山になりきる。内山を装い演じる。私は私として内山という他者を演じる。能のように、仮面をつけて演じる。せいぜいそんな遊戯しかできない。

＊

『——体育祭、出たくないなあ。ぼく、仮病を使おうと計画しているんです。これから毎日、練習が続くんですよ。放課後だけじゃなくて、昼休みまで利用して、冗談じゃないですよ。正気の沙汰じゃない。どうして、あんなくだらないことに一生懸命になるんですか？ 汗なんてかきたくない——』

『——修学旅行が近いんです。ぼく、絶対に行きません。ほかのやつらとご飯食べたり、お風呂に入ったり、眠ったり、同じ乗物の中に閉じ込められたり——。考えただけで、死にたくなります。村田先生、いじわるなんですよ。溜めておいて一気に飲んでも死ぬないような薬しか、処方せんを書いてくれないんです——』

内山の愚痴や嘆きに対して私はひたすら聞き役に徹するだけだった。ときおり反応らしき言葉を私が口にしなかったわけではないが、あまりにもおざなりであり、今考えるとそれはカウンセリングというよりも職務怠慢に等しい行為だった。

「——ぼくがこういう性格だってことに、気が付いているやつがいて、わざと体に触ってきたり、唾を飛ばしてきたり、あと言いたくないんですけど、いろいろ嫌がらせをするんです。これまでも、いろいろないじめには遭ってきたから、平気な振りで通すしか

ないかなって感じ。でも、嫌だな、ぼくが一番知られたくないことを、狙って突いてくるんです。あいつだけは、許せない。殺してやりたい。でも、殺すってきたくないし、警察に捕まったら。きたない所でいろいろ面倒なことを聞かれそうだし。どうすればいいんでしょう」

「どうすればいいんだろうね」

「不登校しかないかなあ」

「もっと考えてみようよ」

「……………」

＊

内山は全日制の高校から通信制の高校に転入し、在学中に大検に合格して、大学に進学した。専攻したのは数学だ。これは理解しやすい成り行きだった。ノートとペンと頭だけがあればいい。きたないことをしなくてもいいし、きたないことを考えなくてもいいからだ。そんな意味のことを言っていた。

私が内山から聞いた限りでは、決して数学が得意だったわけではない。引き算をしていって残ったのが、数学だったため、数学を専門に学ぶことにしたという感がある。大学と並行してコンピューターのプログラマーを養成する専門学校の夜間部にも通ったのには驚いた。生きていく意志はあると見た。

内山を担当していた村田医師は、内山がプログラマーとして職を得た時点で、もう内山を「治療する」必要はなくなったと判断した。面談やその他の心理学的アプローチを続けるかどうかの判断は、私に任された。私は、同じような傾向を持つクライアントたちとのグループでの話し合いや交流に参加するように、内山に勧めた。

だが、内山は拒否した。私は、無理強いはしなかった。その時点で「治療」は終わった。

プログラマーとしての職を得て二年後のある日、病院にいる私は内山から電話をもらった。

「ちょっと近くに寄ったのですが、お時間はないですか」

私は院内の会議を欠席して、内山と会った。クライアントとして面談を求めてきたのではないが、会う場所は、わざと面談室を選んだ。内山が助けを求めていると直感したからだ。

二年振りで会う内山には、大きな変化がいくつか見られた。以前のような極端な潔癖症が姿を消していた。

まず感じたのは、内山が人間らしい匂いを放っていたことだ。汗の匂い、体臭、靴下の臭い、剃り損ねたひげ、シャツの襟に付いた汗の染み、顔に浮かんだ油気、手入れを怠っている不ぞろいに伸びた爪、靴の汚れ——。つまり、成人の男から漂う匂いがし、男の身体を前にすれば当然目につく細部にあふれていた。

「仕事は忙しい？」

内山から感じた変化を要約したつもりで、私は言った。

「思ったより、ハードですね。ずいぶん、薄汚い男になったでしょう」

私の発した言葉の裏の意味を、内山は感知していた。

「仕事に追われて没頭していると、身なりとか清潔さとかに無頓着になるんですよ」

そう言いながら、以前には見せたことない照れくさそうな笑みを浮かべた。

「社会人らしくていいじゃない」

「社会人かあ。そういう見方もできるんですね」

私は、内山が何かを打ち明けたい気持ちでいるのを感じた。それを引き出してやりた
いと思い、内山が話しやすいように、カウンセリングの時と同様に聞き手に回ること
にした。しばらく黙っていると、内山が口を開いた。

「好きな人ができたんです」

「ほう」

「まだ会ったことはないんですけどね」

「会ったことがない」

「インターネット上で交際のあるのは、ご存知ですよ」

「聞いたことがある程度なんだけど、どんなものなの？」

「いろいろなシステムがあります。掲示板とか、会員制のものとか——。ぼくがある人と
知り合ったのは、そういうのではなく、ごくありふれたブログなんです」

「ブログ」

「はい。あるブログサイトで、ランダムブログというのがあって、あるアイコンをクリッ
クすると、無作為にそのブログサイトに登録しているブログの一つにアクセスできる。
それだけなんです。で、ある時、暇つぶしにその機能で遊んでいたら、ちょっと気にな
る日記とめぐり合ってしまったというわけです」

「めぐり合った——」

「その人、たぶん女性だと思うんです。ネット上の社会は、紹介制だったり、厳格な会員
制のサイトでない限り、本当の性別も年齢も性格も生い立ちも趣味も不明です。それが
おもしろいんですけど」

「確かに不明だね」

「そうです。誰だか分からない——。でも、人間って、そもそもが不明じゃないかって思
うんです。学生のころ、ここでいろいろ話しましたよね」

「そうだね」

「あのころも、よくそんな気がしていたんですけど、人間は心と体が一緒の時と、離れて
いる時があると思うんです。ぼくは、個人的には、離れている時のほうが好きです。で
できれば、体は要らない。別に無くてもいいんです」

そう言って、内山は笑顔を浮かべた。私も、それに合わせて笑みを作った。

「やっぱり、ここだと何でも話せる。何だかうれしいです」

「そりゃ良かった。時間はあるから、話したいだけ話してみたら」

「本当に時間は大丈夫なんですか」

「大丈夫だよ」

「そのブログの日記を書いている人なんですけど、ぼくと同じような考えみたいなん
です。体は要らない、無くてもいい——。そういう生き方が理想だと、よく書いています。

ただ、コメントとかトラックバックをできない設定にしているんです。結構、そういうブログは多いです。でも、メッセージを送る機能だけは付けているんで、送ってみたんです」

「ほう」

「三十回ほど送ったかな。こっちのメールアドレスは知らせずに、一方的に思っていることを書いて送っていたんです」

「そんなにこまめにブログを更新する人じゃないんですけど、ある時、ぼくが書いた文章をそのまま引用したような文章が投稿されていて、それに対して返事をしているような文章が続いていたんです。それがきっかけで、交換日記みたいな感じになってきました。そんなのが二十回ほど続いているうちに、こっちのフリーメールのアドレスを知らせたんです。そうしたら、あっちもメールアドレスを送ってきて、メールでのやり取りを始めるようになりました」

「今も続いているのですか」

「はい。向こうもこっちも一日に最低五通は出しています。ちなみに、ぼくは、ケータイは仕事用以外には使いません。好きじゃないんです。体に張り付いてくる感じがして」

「張り付いてくる」

「そういう感じです。ケータイって、器械なんですけど、体の一部になっちゃうような感じがして嫌なんです。もうこれ以上、体の器官は要らないって感じ、分かります？」

「ケータイが、体の器官のような気がするということだよ」

「個人的には、そう感じられます。口と性器を合わせたような器官と言ったらいいか」

私はどきりとした。内山が「性器」という言葉を口にしたのを聞いたのは、私の記憶ではその時が初めてだった。以前の内山は、体の部位や内臓や器官を口にすることを極端に避けていた。まして性器に関しては、「あそこ」という言葉でほのめかすことすらしなかった。

「ぼく、性器も排泄する器官も要りません。精液を漏らすのは、うっとうしいです。できれば、食事もしたくないし、おしっこやうんちもしたくありません」

「そう思うんだ」

私は型どおりの受け答えをした。カウンセラーの受け答えや相づちには、一定の型がある。臨床心理学は、百花繚乱というか百家争鳴の状態にあり、流派や学派がいくつにも枝分かれしている。私の教わった方法では、相手の言葉を繰り返したり、相手が話している内容をこちらがちゃんと聞いているという信号を送るだけだ。

否定も肯定もしない。ただ聞いているというサインを送るのが、原則だ。その日の内山との会話は、次第にカウンセリングでの面談の様相を帯びてきた。そうした対話の中で、私は内山の変化に大きな驚きを覚えずにはいられなかった。

アセクシュアリティ ー4ー

＊

通りを歩いていると、背後から名前を呼ばれた。振り向くと、懐かしい顔が私を見下ろしていた。

「久しぶり」

相手は口元だけに笑みを浮かべて言った。笑みが目に表れていない。何か心配事か不安をかかえている、と私は感じた。

「そうだね。あの時以来じゃないかな」

私は相手の心情を察して、わざと「あの時」という言葉を口にした。

平井慎吾と最後に会ったのは、拠点病院のロビーだった。互いに姿を認め、同時に目礼をし合った。私は支払いを済まし帰るところ、平井は会計の窓口に向かう途中だった。私は定期的な検診を済ませて来たと言った。平井は、合併症が悪化したため、内科に所属する循環器系の専門医の診断を受けて来たと言った。最新の数値を告げ合った。平井の免疫力は、相当低下していた。

あれから二カ月は経っただろうか。平井の今の体調が気になる。

「で、最近はどう？」

私は尋ねた。

「良くないですね」

「この間よりも？」

「そうなんです」

「夜遊びなんかしていて、いいの？」

お説教じみないように口調と表情に気を付けて言う。

「一人でいると寂しいから、つい飲みに来ちゃうんですね」

「グループ活動とかには参加していないの？」

「やっていますよ。でも、やっぱりこの辺が恋しいと言うか——。雰囲気が違うじゃないですか」

「分かるよ、その気持ち。現に、ぼくもこの辺りをうろちょろしているわけだから」

そのとき、車道を挟んだ向こう側、つまり私たち二人が立っている歩道とは反対側を歩いている及川信也を見掛けた。私は少し移動して、長身の平井の後ろに身を隠した。

こういう場所で、こういう場所以外の場での知り合いを見掛けることが、たまにある。相手がこちらに気付いていない場合には、私は自分から相手に声を掛けたり、わざと目に付くような行動は取らない。

互いに正面から出くわしたのなら、話は別だ。そうではない時には、相手に気付かれないようにする。こちらは一向に構わないが、相手が戸惑ったり、気まずい思いをするのではないかと、つい気を遣ってしまうからだ。

だが、その時の私は違った。偶然を装って及川と出会う振りをしてみたくなった。

「じゃあ、また」

お大事に、と言いたいところだが、その言葉を口にする場所ではない。私は、車道に出た。徐行して来た車をやり過ごし、及川の後を追った。及川の入った店を見届けたが、中に入る気はしなかった。

そのバーの客のほとんどが、外国人と外国人を好む日本の男たちだ。私の行きつけのバーも、平均して外国人の客がほぼ半数を占める。ただ、客層と客が店に期待するものが、及川の入った店とは異なる。

バーの周辺には外国人と日本人が五、六人いる。誰もがドリンクを手をしている。一度ドリンクを注文し支払いを済ませた客が、外で飲んでいるようだ。こうした飲み方は、外国人相手の店によくある。

私は、思い切って中に入った。及川の姿をすぐに認めた。クアーズを手にしてゆっくりと奥へと向かっている。私は円形のカウンターの一番ドアに近い所にいるボーイにペリエ・レモンを注文した。

天井近くに、間を置いて設置された三台のテレビ画面には、エルトン・ジョンのコンサートの模様が映し出されている。ビデオだろう。及川は店内の中ほどに立って、斜め頭上の画面を見つめている。私は、円形のカウンターを及川がたどったのとは逆方向に回りながら、及川の視界に入るように徐々に近付いた。

及川が瓶入りのクアーズをラップ飲みしながら顔を上げた。その目が私を認めた。

＊

「単刀直入に尋ねていただいて構いません。たぶん、お察しのとおりだと思いますが」

及川はそう言った。

「じゃあ、私が勝手に想像していた筋書きを白状しましょう」

「どうそ。いや、お願いしますかな？ おもしろそうだな。自分がどう思われていたかを聞けるなんて」

「そう言われると話しにくくなります」

実のところ、私は後悔していた。及川は、巧みに私を誘導し、私が及川をどう見ていたかを打ち明けるよう仕向けている。頭の回転の速い男だという印象を受けた。私が鈍いだけだとも言える。

「ぼろが出ないように、詳細は避けて、頭で描いたシナリオをかいつまんで述べてみます」と私は言い、コーヒーを一口飲んだ。

私たちは、新宿駅近くのファーストフードの店の禁煙フロアにいた。あのバーには五分もいなかった。どうやら、私は及川の邪魔をしたようだった。場所を変えて、話そうということになった。

あの店の近辺は避けようという点で、意見が一致した。ファーストフードの店はどうかと提案すると、異存はないと及川は答えた。JR新宿駅のほうへと向かいながら、以前に行きつけの店で、及川が白人の男性と一緒にいるのを見たことを正直に告げた。身

なりやマナーのきちんとした良さそうな人じゃないですか、と私が言うと、及川は照れくさそうにうなずいた。

「話によると、あなたは高校生の時に一年間、アメリカのハイスクールに在学していたらしい」と、私は自作のシナリオを話し始めた。「留学中のホームステイ先で、おそらくあなたは性的虐待を受けた。相手は、家族の父親ではないかと推測しています」

私は、そこで話すのをやめた。話し終えたのではない、ここまでのシナリオが、どれだけ当たっているかを確かめたかった。

「大筋ではそうです。ぼくの場合には、ホームステイ先は二家族でした。性的虐待を受けたのは、そのうちの一家族でのことでした、お察しの通り、父親です」と及川は言い、ためらうような表情をして間を置いた後、続けた。「そのシナリオに、付け加えなければならぬことがあります。これは、ぼくの現在のセクシュアリティとも大きくかかわってくる出来事なのですが——。ぼくは、その人を愛してしまったのです」

性的虐待の場合には、虐待された者が、虐待した者を全面的に憎み、忌み嫌うとは限らない。逆に、虐待者に引かれる、あるいは愛することがある。と言うよりも、性的虐待と性の目覚めが一致する、と言うべきか。

また、愛憎相半ばするケースもある。アンビバレントな感情をいだいてしまうのである。憎い、でも、愛している。許せない、でも、なぜか引かれる。そうした相反する感情が同居する場合もあるという。

快と不快、愛と嫌悪とが、矛盾しない心持ち——。性的虐待と性の目覚めが同時に起こる、という見方——。

未成年者では、虐待を受けた時の年齢が低くなるほど、そうした傾向が高いという研究結果がある。その一方で、年齢が高くなるほど、アンビバレントな心情が定着しやすくなり心のなかで葛藤が生じる、と結論づけた論文を読んだこともある。

ただ、こうした説、特に前者は、誤解を招きやすい。また、虐待した側の自己弁護の口実として、しばしば利用される。その意味では、危険な考え方であり、タブー視されがちである。

「あなたが大学で心理学を学ぶ決意をし、また性的虐待を受けた人たちにアンケートと面談をしたのは、自分のセクシュアリティについて考えるという目的もあったのではないのでしょうか」私は考えていたことを、そのまま口にした。

「それは認めます」

「でも、自分に正直すぎたというか、真っ向から取り組む格好になってしまった。そのような研究をし、論文にまとめることによって、大学、そして付属の高校や中学だけでなく、母体である財団にまで迷惑がかかる可能性がある——。あなたが、そこまで頭が回らなかったはずはないと思います。あなたは、ひょっとして、虐待への復讐を試みたのではないですか」

及川は大きなため息をついた。

「傷口を引っ掻いたり、突く人がいますよね。血が出るまで突く人もいます。いわば、やけっぱちの行為です。突けば痛いことは分かっている。でも、突かざるを得ない心境に

陥る、あるいは自分を追い込んでしまう。浜辺で、せっかく作った砂の城を、波がさう前に壊してしまうのにも、似ています」

「相当心理的に追い詰められていたのでは？」

「かなり——」と言って、及川は目を伏せた。

「そうでしょうね。自分の置かれた立場を考える余裕がなかったのではないですか？ 下手をすると、大学を追われる可能性も十分にあったと思いますが」

「その通りです。ミッション系の大学でしたから」

「論文は書いたんですか」

「書いて、お蔵入りという感じでした。もちろん、指導教授の取り計らいがあって、急ぎよ別のテーマで論文を書き、卒論として受け入れられました」

「いずれにせよ、そのスキャンダラスな論文を見逃してくれたなんて、運がいい。先生に恵まれていたんですね」

「……………」

及川は、下唇をかみ、顔をほころばせた。意味ありげな表情だ。

「まさか、じゃないですよ」

数週間前にも、別のファーストフードの店で及川と話をしていたさいに、まさかという言葉を使ったことがあった。

「そのまさか、だったんです」

「なんと」

私は驚いた振りをした。さもなければ、及川の人格を傷つけることになる。

「ぼくは、大学教師とか知的職業に就いている白人の男性に引かれるんです」

「じゃあ、その外国人の教授の、何と言うか、いわば厚意で難を免れたというわけですか」

「薄い厚いの厚意ですか？」

「ええ」

「違います。好き嫌いの好意です。教授の気を引き、困らせ、世話を焼かせるという形で、甘えたんです。ぼくは、その人に片思いで恋していたんです。最初のうちは——」

及川は、目の辺りと頬を紅潮させた。

「いやはや」私は言葉に詰まった。「困った学生さんだったんですね」

「その教授には奥さんがいたんです。でも、離婚しました」

「あなたが火をつけてしまったとか？」

「結果的には、そうだったと思います。ぼくって、とんでもないやつでしょう。あきれていらっしゃるんじゃないですか」

「今は現役を退いていますが、これでも元カウンセラーですよ。それくらいのことでは、驚きません」

私たちは同時に笑った。

「こんなことを話したのは初めてです。何だか、すっきりしましたよ。やはり、面と向かって話すという行為は心の整理にもなるし、告白することで癒やされるという言葉の意味も実感できますね。きょう、あそこで声を掛けてくださったことに感謝します」

及川が握手を求めてきたので、私は素直にそれに応じた。

「いやいや、感謝されるほどのことはしていません。ずっと気になっていたことを確認さ

せてもらったというのが正直な気持ちです。実は、カウンセラーとしての勤が、まだ働くかどうかを知りたかったのです。感謝しなければならないのは、私のほうです。ところで、及川さんは、臨床のほうは、おやりになっているんですって？

「ぼくは、カウンセリングには携わっていません。もっぱら、アンケートや面接を行い、その結果を統計ソフトで分析して理屈を付ける。そんな方法を使っただけの論文ばかりを書いています。大学で教えている科目にも、臨床関係はありません」

「ご専門は？」

「性的虐待です」

「もしかして、まだ、こだわりがあるとか？」

これが、私が最も知りたかったことだ。

「これから先も、ずっとテーマになるかもしれません」

「質問していいですか」

「ええ、ぼくに答えられることでしたら」

「セクシュアリティというのは、自ら選べるものだと思いますか？ いや、質問の仕方が間違っていました。言い直します。セクシュアリティとは先天的なものだ。そういう考え方や主張があることは、承知しています。でも、自分が生まれ育った社会や風土の産物であったり、各人の人間関係の産物であるケースもあり得るのではないのでしょうか？ また、セクシュアリティは不安定なもの、あるいは流動的なものだという考え方に対して、どうお感じになりますか」

自分が興奮しているのを意識し、私は沈黙した。このところ、読み耽っている内山圭吾との面談を記録したノートが頭を離れない。内山が死を選んだのは、セクシュアリティについての強迫観念と、そのもとにあったと考えられる性的虐待が大きな要因となっていたからではないか。

人は、死を決意するまでに、自らのセクシュアリティにこだわるものなのか——。もっとも、内山の場合には、ホモセクシャルでも、バイセクシャルでもなく、アセクシャルだったと考えられる。ただ、こうしたレッテルを張ることには、慎重でなければならない。

同じラベルを張られていても、各人によって、その性格は異なる。内山には、性的欲求がなかったというよりも、性的欲求を過剰に拒否していたというほうが正確だと考えられる。

「逆に質問しても、いいですか？」と、及川が言った。

「もちろん」

私は身構えた。

「答えは、もう用意してあるのではないですか？」及川は視線をそらせて、つぶやくように言った。

話が途切れた——。

不意をつかれた形になった。知らぬ間に、私は及川に対して質問をしすぎていた。答えを求めて探っていたのではない。答えは既に心のうちにあって、その答え合わせをし

ようとしていた——。及川への質問の中に、私自身のこだわりと質問への答えが投影されていたことに、今になって気づいた。うかつだった。仕事から遠ざかっているうちに焼きが回ったらしい。医師から処方されている、不安を取り除く薬の効き目も手伝っているに違いない。あの種の薬は、不安だけでなく思考力も低下させる。

カウンセリングの基本ではないか。クライアントの質問の中には、既に答えが含まれている。かなり煮詰まった結論に至っていて、あえて質問をするクライアントがいる。この場合には、その結論をひたすら聞く。質問に答えてはならない。

一方で、頭の中が整理されていなくて、考えをまとめる助けとして質問をするクライアントもいる。この場合にも、質問に答えてはならない。つまり、カウンセラーの意見を述べてはならない。とにかく相手に話させる。自らが納得のいく結論に至るように相づちを打ち、ひたすら聞く。

私が恩師たちから受け継ぎ、自分なりに実践してきた方法は、そうしたものだ。クライアントに積極的に介入する方法もある。私は、そうしなかった。それが職業的な倫理だったから。

今の私はそうした倫理とは無関係な一人の人間にすぎない。それも、揺らぎ悩める一人の人間にすぎない。私はその自分を持て余している。

カウンセラーだった以前の自分なら絶対にしなかった行為を、私はしている。私は救いを求めている。長い間柵上げにしていたサバイバーとしての自分の問題に、今になってようやく、けりをつけようとしている。自分自身の問題に立ち向かう術（すべ）を持ち合わせていない自分を意識するのが、つらい。

つらいのは、保身や虚栄心があるからだ。元カウンセラー、あるいは休職中のカウンセラーだという意識が邪魔をしている。まずは、そのつまらぬ見栄を捨てることから始めなければならない。自分がクライアントになる必要がある。

アセクシュアリティ ー5ー

＊

渡辺梨野と向かい合って話をしたのは一度だけだ。夏だった。あれから四カ月は経っている。精神的に内山圭吾の影響を強く受けている。それも、かなり危うい状況にまで来ている。私はそうした印象をいただいた。

「内山を愛している」、「結婚まで考えている」とまで言った渡辺梨野は、既に自分の心を内山にいわば「売り渡した」状態にあったと思われる。あの時にはまだ、内山を客観的に見る目を、わずかながら持っていた。その後の数カ月間に、急速に内山に共振し同化していったにちがいない。

内山圭吾と私がクライアントとカウンセラーとして面談するようになったのは十年前だった。内山は十七歳の高校生だった。その五年後にプログラマーとして就職した時点で、村山医師の判断で内山への治療行為とカウンセリングは終わった。

実際には、終わったという言い方は適切ではない。特に心の病においては、患者と医師、そしてクライアントと臨床心理家とのかかわりが「終わる」ということはないからだ。中断する。途切れる。とりあえず終わる。そんな言い方のほうが、しっくりする。

内山が就職して約二年後に、私は内山から電話をもらい、病院の面談室で会った。

＊

『ぼく、鉱物になりたいんです——』

『鉱物って漢字が好きなんです。硬そうで、生きてるとか死んでいるとか、そういうぐちゃぐちゃしたことに関係なさそうで、いいなって思います——』

『生き物って言葉より、ずっといいです。生き物って、いつか死ぬ物って意味ですよ。死ぬことは怖くはないです——』

高校生当時に、内山が口にした言葉だ。身体に関する語や生理的な状態を示す言葉を極端に避ける少年だった。内山との面談を記録したノートで、内山の話した言葉を語彙という点から分析してみた。

胃や腸や肺といった器官の名。汗、唾、体臭、おなら、排泄物、血液など。また、朝ご飯に何かを食べたとか、面談のさいに何かを飲みたいというように、飲み食いにつながる言い回しも、内山の口から出たことはなかった。

無機物ばかりを話題にし、有機物が話題にのぼることはなかった。そんなふうにも言える。

内山が通院するようになったきっかけとなったと考えられる、性的虐待については、ついに話を聞くことはできなかった。その虐待があった時期は、内山の母親からの伝聞から推測すると、小学四年生の夏休みだったらしい。八月上旬のある日に、何かが起こった。

その日、内山はひどく疲れた様子で家に帰り、何も食べることなく、自室にこもったという。

「——今、思えば、急にうつになったような感じでした。無言、無表情で、食事は大半を残し、元気がなく、ぼーとした反応しか示さない。そんな状態が四、五日続きました。それが最悪で十だとすれば、あとは七くらいで落ち着いて、きょうまでに至っています。そういう性格だ、みたいはずっと考えていましたが、このごろ、学校へ行きたくないと言い出し、それじゃ困るからということで、こちらの病院をご紹介いただいた次第です」

以上は、母親の話を要約したものだ。

その夏の日に何が起こったか。それが性的ないたづらを誰かに受けたと推測できるのは、次の母親の証言があるからだ。

「帰って来たのは、午後三時ころでした。帰るなり二階の自分の部屋に入り、着替えて出てきました。そんなことは初めてなので、どうしたのかと尋ねたのですが、返事をしません。その時には気付かず、後になって記憶をたどってみると、紙袋を手にしていったような気がします——。

「数日後に分かったのですが、その日に身に着けていたTシャツ、ショートパンツ、下着上下、靴下、それにスニーカーまで、全部なくなっていたのです。どこかに捨ててきたのだと思います。それから、これも後に思い出したのですが、着替えて一階に下りて来て、お風呂に入りました。シャワーを浴びていたらしいのですが、あまりにも長くお風呂にいたので、声を掛けたのを覚えています——。

「それから、また着替えたんです。変だなどは思いましたが、あの日は暑かったので、汗をかいて気持ちが悪いのだろう、くらいに考えていました。でも、妙なことに、お風呂に入るまで着ていた衣類が、無くなっていました。家の中をいろいろ探してみたのですが、見つかりませんでした。何か不気味というか、怖くて、そのことを尋ねる気になれなかったのです」

身体に対し、何かの行為をされたことは明らかだ。内山を担当することになった村田医師と私は、何が起きたかはあえて追究せず、内山が自分自身の力でその「何か」を受け入れ、その「何か」と付き合っていく手助けをしようという点で、意見の一致を見た。

＊

二年ぶりに会った内山圭吾は、大きな変貌を遂げていた。見た目にも、話をしているさいにも、以前のような身体に関する語や、生理的な言葉を避ける傾向は認められなかった。気になったのは、ブログを通じて知り合った女性とメールだけで付き合っている。それが生活の中で大きな位置を占めているらしい点だった。

『人間は心と体が一緒の時と、離れている時があると思うんです。ぼくは、個人的には、離れている時のほうが好きです。できれば、体は要らない。別に無くてもいいんです』

かつて、内山はそう言ったが、それをネット空間と重ねて考えてみると、現在においては決して珍しくない心のありようだ、という見方もできる。その一方で、かつて百時間ほどの面談を続けていた元クライアントとして見た場合には、見過ごすことができないシグナルを送っているような気がした。

話すにつれて、内山が未だに身体を自分にとっては「不要なもの」だと認識していることが分かってきた。また、ネット空間で付き合い合っている女性との共通点は、「体は要らない、無くてもいい」という感情らしいと推測される。そうした内山の発言に、私は危ういものを感じた。

＊

以上は、四年前のことだった。

その四年間のうちに、私は事情があって心理カウンセラーとしての仕事を辞めた。内山には、私のパソコンのメールアドレスを教えてあった。携帯電話は嫌いだと、内山は言っていた。会社から支給されたものを仕事上仕方なく使ってはいるが、個人的には持っていないというような話だった。

携帯電話は、体に張り付いてくる感じがする。器械なのだが体の器官、それも口と性器を合わせたような器官のような気がする——。うろ覚えだが、そんなようなことを言っていた。

半年に一度の頻度で、内山のほうから私の利用しているフリーメールのアドレスにメールが届いた。暑中見舞いと年賀メールである。型どおりの文句だけで、近況を記したものはなかった。

それがどういうわけか、今年の五月下旬になって、不意に内山からメールをもらった。会ってもらいたい人がいるという文面だった。暇を持って余していた私は、すぐに返信し、会う用意があることを告げた。

今になって思えば、唐突な話だった。だが、それは結果論であって、ネット社会は唐突や不意や偶然に満ちている。

内山に返事のメールを出して、十分も経たないうちに、渡辺梨野という女性からメールが届いた。午前だった。内容は、「きょう会っていただけませんか」というものだった。あれよあれよという間に、事が進んだ。若い人たちは、こんな具合にネット空間を利用しているのか、などと私は感心した。

渡辺梨野とは、池袋にあるファーストフードの店で一時間ほど話をした。いろいろなことを耳にしたが、今もよく思い返す言葉がある。

「——内山さん、舌の先だけのキスが好きなんです」

「舌の先だけ？」

「ええ。触れ合うのは、舌の先の米粒くらいの面積だけなんです。点と言ってもいいくらいです。わたしも、それだけで満足しています。というか——」と言って、渡辺梨野は

うつむいた。「すごく気持ちがいいんです」

この人も、何か重いものを心にかかえているにちがいない。そんな印象を受けた。

それから、半年も経たないうちに内山圭吾と渡辺梨野は心中した。体は要らないという接点を持つ二人が、同じ場所で同時に死ぬ道を選んだ。

＊

心中した二人について知っていることを、私は及川信也に話した。性的虐待について専門的に研究している人からの意見が聞きたかった。

私の行きつけのバーのカウンターで、私たちは肩を並べていた。話を一通り聞いた及川は、店の奥にある窓際の細長いテーブルに目をやった。

この店は、十二人が座れるカウンター席と、中央に据えられた楕円形の大きなテーブルと、窓との間が一メートルもない細長いテーブル四台がある。カウンター以外に椅子はない。ごくまれに、楕円のテーブルに臨時のスツールが置かれるくらいだ。

私は細長いテーブルか、カウンターのどちらかで飲むことにしている。きょうは月曜だ。客は少ない。

「奥のテーブルにいる口ひげを生やした男がいるでしょう」と、及川が言った。

私は何げないふりを装い、振り返って店内を一望し、再びカウンターに向かった。

「ここで何度か見掛けたことがあります」と、私は答えた。

「とんでもない男です」

「というと？」

「未成年の男の子たちを相手に、性的虐待を繰り返してきたやつです。前科があります。インターネットで性犯罪者リストを公開しているアメリカの州があるのはご存知ですよね。そういうサイトの一つに入れば、あの男の顔写真と一緒に、名前と生年月日と、その州でどんなことをしてきたかが分かります」

「アメリカでの性的虐待者の扱いについては、聞いたことがあります。今思えば、この店やこの界限に、その種の人物がいても不思議はない。それも分かります。でも、正直言って、そこまで深く考えたことはありませんでした」私は思うままを口にした。

「問題なのは、あいつがこの国で数年間、ALTとしてある県で働いていたという事実です。しかも、同じことを繰り返していた。その県の教育委員会が、複数の男子生徒とその親からの訴えを聞きながら、あいつを放置していた。それが大きな問題、いや、あってはならないことです——。警察や児童相談所にも相談した親がいます。しかし、そちらのほうの動きも鈍かった。そのうち、ようやく教育委員会が、退職金付きで解雇した。そして、今は都内の英会話学校で堂々と教えている。一度も、この国の警察のやっかいになったことはない」

「なんと」

「よくある話です。事なかれ主義の産物です。もっとも、今の話は、又聞きです。ただし、あの男のデータがインターネットで検索できることは確かです。ぼくも閲覧してみましたから」

私はトイレに立った。席に戻るさいに、その男に視線を投げた。目が合った。男のほうが、目をそらした――。

「さっきの心中の話ですけど、アセクシュアリティという言葉が当てはまるかもしれませんね」及川が言った。

「言葉でしか知らないのですが、亡くなった二人はそのケースに当てはまりますか」

「そう考えて構わないと、ぼくは思います。いかなるセクシュアリティも自分に認めようとしな。そういう人たちについての論文を読んだことがあります。もっとも、ぼく自身は、アセクシュアリティの傾向を持つ人と面談したことも、アンケートの対象としたこともありませんが」

「考えようによっては、アセクシュアリティの場合、自分が人間であることまで否定する行為につながりませんか」

「自殺という意味ですね。自分のセクシュアリティを、どれほど重視しているかによると思います。言い換えると、セクシュアリティが自分という存在にとって、どれほどの意味を持っているかによる、という意味です」

「個人的な意見ですが、人間は多面的な存在だと思います。その多面性を犠牲にするまで、セクシュアリティに義理立てする必要はないのでは？」私は持論を述べた。

「義理立て？」

「セクシュアリティを個人が選択する、あるいは自己決定するという考え方に疑問を持っているんです」

「と言うと？」

「セクシュアリティは、生物学的なものというより、言語的なものであり、物語作りだと思うのです」

「フィクションだという意味ですか？」首をかしげて、及川が言った。

「そうも言えるかもしれません。これまでさまざまな人たちと接してきて感じるのは、ヒトにおけるセクシュアリティは、先天的であったり生物学的なものではなく、その人の生まれてからの生活の中で、形成されていくものだという気がします」

「その種の考え方は、分からないわけではありません。ただ、性的虐待者に口実を与えかねない危険性もはらんでいます」

「承知しています。ただ、極論を言えば、性に自発的に目覚める人はそれほど多くはなく、目覚めさせられる場合がほとんどではないでしょうか」言いすぎたと思ったが、私は自分を止めることができなかった。

及川は沈黙したあと、ゆっくりと話し始めた。

「――問題は、どういう形で目覚めさせられるかです。性的虐待が、その『目覚めさせる』とおっしゃったケースに含まれるとすれば、ぼくとしては認めるわけにはいきません」

「それは百も承知なのです。でも、現実にはどうでしょう？ これは性的虐待をどう定義するかにもよると思います。そうですね、中学生までをリミットにして考えてみましょう。きょうだいや、年の近い知り合いが相手の、性的な触れ合いまでを性的虐待に含めていいのか。性的虐待を、被害者と、ある程度年の離れた未成年にまでに広げて考えていいものか。同意、不同意という心理的な面を考慮するか……」

「おっしゃりたい意味は分かります。でも、やはりその考え方は危険だと思います。セ

クシュアリティは本音でアプローチすると、危険です。それほど微妙な問題だと、ぼくは思います。なぜなら、その人の尊厳にかかわるからです。本音ではなく、建前でいいのではないのでしょうか。いや、建前で議論すべきだと言いたいです」

「ある人が自分のクシュアリティを選択していると言った場合には、その言葉を文字通りに認めるという意味ですか」

「そうです。たとえば、それが年の離れた人からレイプされた結果であったとしても、です。ぼくはカウンセリングの経験はありませんが、たくさんの性的虐待のサバイバーの人たちと接してきました。サバイバーの人たちが、必ずしも自分の受けた虐待を正確に語るわけではないことは認めます。自分の頭の中でストーリーを作り出す場合が非常に多い、とも思います」

「私が問題にしているのは、それなんです」

「ぼくは、そのストーリーを尊重すべきだという立場を取ります。事実でなくても構わない。自分にとって、都合のいいストーリーであっても構わない。ストーリーやフィクション、作り話あるいは嘘と言ってもいいでしょう。そうしたストーリーは、その人にとっては自分の心を安定させるための支えなのです。建前だというのは、そうした意味です」

私は及川の意見に全面的に同意することはできない。ただ、自分を安定させるための支えとなるなら、クシュアリティを建前として宣言する、あるいは宣言しないまでも信じるという、プラクティカルな考えは理解できる。現に、私自身が自分のクシュアリティをある一つの物語として、これまで生きてきたのだから。その物語をよりどころにし、それにすがって生きてきたのだから。

それほど言葉とフィクションの力というものは強い。強いのは分かるが、強いだけに、それが何かきっかけで破綻した時の衝撃も、強いのではないだろうか。ちょうど、今の私のように――。

これ以上、自分について考えるのはよそう。考えがまとまりそうもない。私にとって、今一番大切なことは、ちゃんと病院に通い、処方された薬を決められた時刻に飲む。そうやって、この体にすみついた病と折り合い共存することだ。病の原因と、そのまた原因について考えをめぐらしても、得るものはない気がする。自分を責め、心と体を痛めるだけだ。

＊

内山圭吾と渡辺梨野が亡くなったのは事実だ。私は、二人がいかなるクシュアリティをも拒否するという建前の犠牲になったように思えてならない。及川の論理では、二人は自分の尊厳を守るために、自分の肉体を犠牲にしたことになるのだろう。

二人は、自らの性と肉体を認めることを拒否した。だが、二人は最後に触れ合ったにちがいない。つながったはずだ。私はそう信じたい。

『触れ合うのは、舌の先の米粒くらいの面積だけなんです。点と言ってもいいくらいで

す』と語った渡辺梨野の言葉に、私はせめてもの救いを感じる。そのわずかな触れ合いだけは、言葉でもストーリーでもなかった。

最期の二人は、言葉と言葉を交わしあったのではない。共通した物語を信じ、そのヒーローとヒロインを演じたわけでもない。まして、以心伝心などいう、いかにも作り物めいた概念でつながったわけでもない。身体と身体を触れ合った——。私はそう信じたい。

ベランダ

＊

トイレの水の流れる音が止まった。台所で隔てられた寝室の気配に耳を澄ます。何度か利用したホテルのトイレの様子がちらつく。どれも似たような作りだった。早くおうちに帰りたい、といつも思ったものだ。ここは自宅で帰る必要などないのに、トイレに閉じこもる癖は直らない。

私はラブホテルを利用したことがない。人の話に出てくるラブホテルのトイレにはプライバシーというものがまるでない。ガラス張りであったり、音が丸聞こえであったり、鍵がなかったりする。信じられないどころか、いきどおりすら覚える。そんなことが許される世界が許せない。

だから、誘われるたびに「普通のホテルじゃなきゃ嫌だ」と言い張り、決して譲らなかった。二十九歳で、付き合った男の数が五人。多いのか少ないのかわからない。一番長く続いたのが二週間。これは極端に短いにちがいない。

男を家に入れたのは、これが初めてだ。寝室から出るときに見た彼は、背を向けて寝ていた。布団は別々に敷いてある。私が窓側、彼は押し入れの前。思った通り、何もしない人だ。いまのところは。午前一時になるのに。

彼と歩きながら、私から肩を寄せたり体を接触することがある。こっちから手をつないでみたこともある。嫌がる様子は見られない。ただされるがまま。噂通りの人だった。

私はそれがかまわない。話が合わないわけではないし、ご飯を食べる前にはちゃんと合掌する人だ。変人同士とか変態同士なんて人は言うけど、私に不満はない。

ドアの通気口から冷たい空気が入ってくるのを感じて、私はトイレから飛び出した。ベランダに続く寝室の窓を開けられるのが大嫌いなのだ。外から入る埃とにおいが我慢できない。私が台所にいる間に裸足でベランダに出た友達を怒鳴りつけて大喧嘩になったことがあった。玄関の靴脱ぎに裸足で降りる人にも殺意を覚える。

さいわい彼はベランダには出ていなかった。窓際にしゃがみ込んで、三分の一ほど開けた窓から外を眺めている。道端でプランターや鉢に植わった植物を見ながら、彼はよくこんな格好をする。めったに笑わない人だけど、そういう時には笑みを見せる。

「汚いベランダでしょ。洗濯物を干すこともないし、いつも締めっきりだから」

彼の背中に向かって声をかける。

「こっちが南側だよ」

「そうよ、花でも育てようかな」

思いもしない言葉が自分の口から出て驚く。

「これだけ広いんだもん、もったいなあって思って」

彼は振り向かず、いつもの聞き取りにくい小さな声で言う。

「わたし、虫が大の苦手なんだけど、育てるの手伝ってくれる？」

ああ、言ってしまった。はしゃいでいる自分を意識したとたん、顔が赤くなるのを感じる。

「もちろん手伝うけど……」

よく手入れされた草木のある彼の家の庭を思い出す。

「けど？」

彼の隣で同じようにしゃがみ込む。

「本当にいいの？」

「どうして聞くの？」

いいよと素直に返事をしない自分の性格がいやらしい。

「何でもない」

追求しないところが、この人らしいと思う。

「なんか目がさえちゃった。ベランダのお掃除でもしようか？　もう遅いから、そつとね」

もう私は歯止めがきかなくなっている。横を見ると、月明かりを浴びた彼の笑顔がある。

たぶん面白半分

著 星野廉

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
